

第十八回 神道講演全国研修大会 講話集

肇国の誓ひ



講話集

肇国の誓ひ

第十八回 神道講演全国研修大会 鹿児島大会

御挨拶

神社本廳総長 工藤伊豆

第十八回神道講演全国研修大会の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

神道講演全国協議会の皆様には、平素より神社本庁の諸施策に対し、格別なるお力添へを戴いてをりますこと、有難く厚く御礼申し上げます。

さて貴会は、神道講演を通じて斯道の興隆に貢献されることを期して、昭和四十六年より本研修大会を開催してられました。爾来三十有余年、全国から多くの有志を集め、研修を重ねてられましたことは、洵に慶びに堪へません。しかして、その成果は会員各位の奉仕神社における日々の社頭講話に現れ、教化活動の要となつてをりますことは、斯界にとりまして実に心強い限りであり、たゆみない研鑽に対し、深く敬意を表するものであります。

そもそも神道講演の根底に祈りがあることは、今さら申すまでもありません。常に祈りを以て行ふべきことは当然で、そこに神道講演に携はる皆様の責務の重さがあると拝察致

します。

思へば敬神崇祖といふ言葉に表される、自然への畏敬、神々と祖先への尊崇は、神代に連なるわが国悠久の歴史の中で培ってきたものであります。かやうな神道の精神が今、混沌を極める世の中で脚光を浴びはじめ、自然との共生における普遍的な理念であるとの評価を受けつつあります。この時にあって、神道を平易な言葉で氏子崇敬者に説き聞かせ、伝へてゆく神道講演の大切さは弥が上にも増すものと確信してやみません。

どうか会員の皆様には、教化活動の第一線に立つとの自覚のもと、斯道の興隆、ひいてはわが国の発展のため、尚一層のご尽力を賜りますやう、切に願ひ申上げる次第であります。

終はりにあたり、貴会の益々のご隆昌と、参加各位の愈々のご活躍とご健勝をお祈り致しますて、ご挨拶と致します。

序

旭川神社の芦原高穂宮司から第十八回神道講演全国研修大会の会場について依頼のあったのは、前年の夏頃であったが、夏の研修なので霧島は凌ぎやすいという事情であろうかとお引受けしたのですが、後日、大会会長就任と初日の記念講演は大会会長が行うのが慣例となっているのでよろしく、と依頼がありいささか面食った次第である。

実行委員長村田和之宮司、事務局を預る佐古一洌宮司の神道講演に注ぐ熱意はまことに真摯で敬服するばかりであるし、二泊三日間の研修を拝聴して、この全国研修大会の内容は極めて充実したものであり他の研修会のように居眠りなど出来る雰囲気ではない。

研修生一人一人が真剣勝負のような気魄で取組んでいる姿に接して当方も身の引き締まる思いであった。

神職として社頭講話をはじめとする諸講話は、教化活動の中でも最も力を入れなければならない分野だと思ふし、神職も話は苦手だからと逃げるのではなく、苦手下手を克服する努力が問われるところである。今後は苦手神職の積極的な参加を促したい。

会場をお引受けしたが、霧島は田舎で施設も十分ではなく研修生諸兄には大変不便をお掛けしたことお許しを乞い、また最後の高千穂峰登拝も含めて事故もなく無事終了出来たことは、実行委員長、事務局そして参加者の協力の賜ものと深く感謝し、この研修大会が更に輪を拡げて発展されんことを祈りつゝ、挨拶とします。

霧島神宮宮司 高橋弘平

目次

御挨拶

序

大会記念講演

神宮の森

霧島神宮

宮司

高橋弘平

1

第十八回神道講演全国研修大会鹿児島大会

天神様と私 — 御神像掛軸拝受の大靈驗 —

小岱山振魂の瀧のこと
しやたいざん

八百万の神を仰ぐ

神武天皇御東遷
とうせん

日々新たに

お守りさん

神風

神様の不思議

おこもり

神社本廳

総長

工藤伊豆

霧島神宮

宮司

高橋弘平

相原牧雄

10

平川訓正

15

生寫經和

19

荒木房雄

24

河野誠

28

寺本正徳

32

畠田明彦

38

村田佳子

42

宇都宮誠

46

百済くだらと九州

社頭講話でのふれあい

祝詞の妙趣みょうしゆについて

老人のつとめ

受け継がれるもの

郷土芸能の意義（太鼓踊りを通して）

祓はらいについて

夏期御霊祭かきみたまさいにて

神武のもとに就くこころ

霧島山に住む仙人せんじん

神職として氏子崇敬者に学ぶこと

天孫降臨

日本人が育はぐんだもの

私の神道観

高山定基 50

松吉宣和 54

市来忠恕 58

熊谷房重 62

黒田明司 68

中木屋豊 73

川崎太久美 77

芦原高穂 82

波多野學 89

堀康弘 93

青木信市 97

松坂公宣 100

木下久榮 105

樺山成剛 111

嗚呼^{ああ}老いゆく母

思うこと

人

生きる

何とかしよう どうにかしよう 何かをしよう

人生行路

南洲翁^{なんしゅうおう}と敬天愛人^{けいてんあいじん}

大和魂^{やまとだまし}

うまし世に生まれて

大祓^{おはらひ}は、今日^{けふ}より始め^{はじめ}て、今^{いま}、一歩^{いっぽ}前進^{ぜんしん}

すでに神道は出番^{でばん}だノ

神の御声^{みこえ} — 敬愛の碑と浩徳の花 —

植樹祭

いのち

村田 徹郎 115

岩田 康彦 120

植木 貴道 124

原 茂子 128

渡邊 知宣 132

古川 雅恵 138

木下 鏌二 143

井出 舜^{すむ} 149

佐古 一洌 153

大宮 四郎 158

戸内 康雅 161

大野 康孝 166

徳久 豊彦 174

松本 スミ子 177

生命の根

神道講演構成法

鹿児島大会の記録

あとがき

鹿児島大会実行委員長

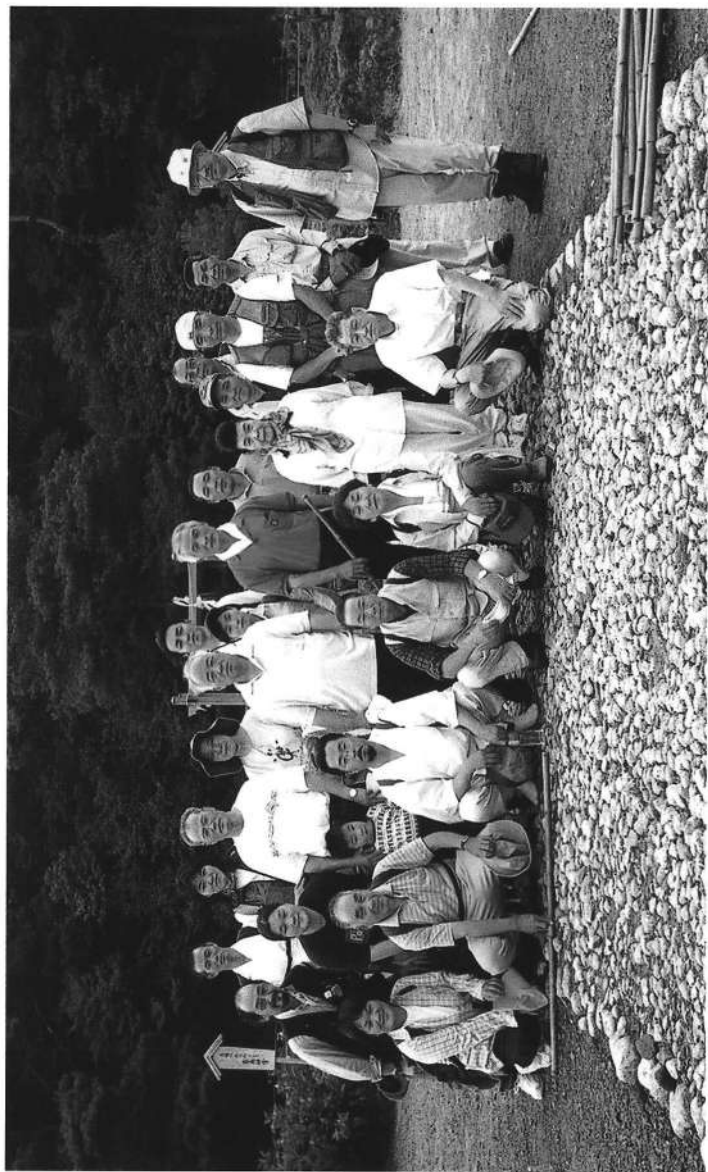
村田和之 180

村田和之 195



第18回 神道講演全国研修大会 鹿児島大会 平成14年 8 月21日

高千穂山登拝



第十八回

神道講演全国研修大会

鹿児島大会

とき 平成十四年八月二十一日～二十三日
ところ 鹿児島県 霧島神宮

神宮の森

霧島神宮 宮司 高橋弘平

この度、第十八回神道講演全国研修大会が霧島神宮において開催されることとなり、本日より二泊三日で全国から参加された皆様の熱心な研修が行われますが、最初に大会々長の記念講演ということで、「神宮の森」と題して江戸時代から明治・大正・昭和の国家管理時代、そして昭和二十年の終戦以後の宗教法人として現在に至る霧島神宮の森について順次述べてみたいと思います。

前置きとしてまず神宮の由緒の概略をお話いたしますと、

人皇第二九代欽明天皇元年（五四〇）慶胤という僧侶により、高千穂峰の背門丘^{せとお}というところに奉斎されたのが創祀であると伝えられております。

霧島連山は古くから靈気の強い山であり、修験者の靈場として修行僧が入山し行に励んでいたと伝えられる一方で、霧島連山は霧島火山帯の中にあり韓国岳^{からくに}、新燃岳^{しんもえ}、高千穂峰に接する火常峰^{ひとこ}（現在のお鉢）等、度々噴火を繰返しており、その火常峰の噴火により背^せ

門丘^とに創祀された神祠も焼失し、平安時代第六二代村上天皇の天曆三年（九四九）に更に麓に下った瀬多尾越^{せたお}というところに、天台宗の性空上人によって再興され僧坊も置かれたが、鎌倉時代第八七代四條天皇の文暦元年（一二三四）の大噴火により瀬多尾越に再興された神祠も僧坊もすべて焼失してしまい、以後二五〇年間は更に麓に下った、待世^{まつせ}というところの仮宮に奉斎されております。

室町時代となり第一〇三代後土御門天皇の文明一六年（一四八四）に至り、島津藩第十一代島津忠昌公が、真言宗の僧侶、兼慶に命じて現在の場所の社殿をはじめ別当寺、華林寺も再興しております。

その後島津藩代々の藩主は、霧島大神を深く崇敬し度々戦勝祈願をなし、願が成就すれば神領も安堵しております。

江戸時代宝永二年（一七〇五）華林寺から出火した火災により社殿・僧坊ともすべて焼失してしまいましたが、十年後の正徳五年（一七一五）島津藩第二十一代島津吉貴公により造営されたのが現在の社殿で豪華な彫刻・色彩を施した荘厳な御本殿以下は、平成元年国の重要文化財に指定されております。

明治の神仏分離以前は神仏混淆で、修験の山であった霧島で修行に励む僧侶により霧島

連山一帯に六社の神社が祀られ霧島六所権現と称されており、当神宮はその中で、霧島六所権現（にしのございしよ）西御在所と称し別当寺華林寺が置かれて殷賑を極め霧島信仰の中心をなしていたものであります。

当時の西御在所の境内地・所有地は、霧島連山の主峰（からくに）韓国岳を軸に周囲二四里周りの約五萬三千町歩に亘ったと古地図にも記されておりますが、明治維新により明治政府は神仏分離令を発して排仏毀釈を行い、神道は国家の宗祀として神社の国家管理制度がはじまりますが、この新しい制度の中で霧島六所権現西御在所は、明治七年官幣大社に列せられ、社号も霧島神宮と改称されております。

明治八年に境内外の調査が実施され、明治十五年に従来の境内地の内五四町歩が境内地とされ、それ以外の七、八〇九町歩は境内地外として上地され官有地第三種に編入されております。その後明治三十二年には国の政策により国有林野法が制定され、その第十七条に「社寺上地の森林は、その社寺に保管せしむることを得、社寺は勅令の定むる所に依り社寺林地を使用し、又は、主副産物を採取することを得」とする、保管林制度が導入されました。霧島神宮では大正八年に上地林保管願を提出し翌大正九年に許可が下りて約五、九〇〇町歩の山林を保管林として管理することになりますが、この保管林制度のもとに管

理経営されたのが戦前の神宮の森ということになります。

この保管林制度の保管期間は五十年（大正九年から昭和四十五年まで）で、神宮では保管林事務所を設け専従職員を置いてその管理経営にあたっております。

この保管林制度は、昭和二十年八月の終戦により廃止となっておりますが、この間の管理状況・事業内容は大略次のようなものでした。

職員は技師以下二十名で霧島、牧園、栗野の各地区に三―五名の看手かんしゅを置いて手入れを行い、更には消防組合を組織して山林火災に備えるなど保護管理に当り、大正末期には特に神宮周辺の風致に力を入れて保護林の拡張に努めており、当時地元で進められていた霧島連山一帯の国立公園指定に向けての要請にも積極的に取組み、昭和九年三月に日本で最初の国立公園として、神宮境内を含む霧島連山が霧島国立公園に設定されております。

保管林時代に神宮保管林事務所が行った事業の概略は、造植林約六十町歩、林道造設二〇〇〇米、巡視歩道五四、三六〇米、臨時防火線一七、二四五米など神宮周辺をはじめ保管林の造林保護及び管理にあたり環境保全に大きな成果をあげております。

昭和二十年以後のいわゆる戦後の境内地及び神宮林の管理経営については、昭和二十年八月の終戦により保管林制度は廃止となりますがその代償として国は、保管林の処分につ

いて昭和二十二年に法律第三十三号を定め『社寺土地によって国有となった国有財産で、この法律施行の際、現に神社に対し、国有財産法によって無償で貸し付けてあるもの、又は国有林野法によって保管させてあるものうち、その社寺等の宗教活動を行うのに必要なものは、この社寺等において、この法律施行後一年内に申請したときは、社寺境内地処分審査会、又は社寺保管林処分審査会に諮問して、主務大臣がこれをその社寺に譲与することができる』となりました。

霧島神宮では、前記法律の施行に伴い昭和二十三年に境内地や保管林の無償譲与申請書を主務大臣宛に提出しておりますが、境内地については、現境内地一帯は聖域中の霊地で、この周辺一帯は、日本国民の肇国記念地であるとし、又、保管林については、この地域は当神宮の御神体山として、日本国における霊山中の霊山として真に宗教的信仰の対象となる御山の神聖を保つため、高千穂頂上を結ぶ古宮址齋場に至る地を神宮の由緒地区、尊厳地として保持する必要がある、とその理由を記しております。その結果、境内地については昭和二十五年九月、二十五万六千四百九十一坪（八五・五町歩）が無償譲与されました。保管林については昭和二十六年、二百三十六万八千八百八十二坪（七八九・四町歩）が無償譲与されております。

霧島神宮では、無償譲与された境内地、社有林の管理について、山林課を設けて技師、看手、林業手等の専従職員を置いて、経費についても山林特別会計を設けて一般会計とは別に経理を行っております。

譲与を受けた翌年の昭和二十七年度から十ヶ年計画を策定し、本格的な森林の整備と経営に乗り出しており、当時の『境内林将来の施業及び取扱方針の概要』によりますと、

「本神宮境内林は一般森林と異なり、神宮の尊厳を保持するものであり、加えて国立公園内でもあるので、風致を重視し特に従来からも禁伐的な扱いがなされて来たが、将来においてもなお一層の保持に務めるべきものである。マツクイ虫等森林害虫の被害木及び風倒木、枯損木等は入念に除去し、人工造林地は一部手おくれ林分になっているところもあるが、現実林分の状況を勘案し、十ヶ年計画を樹立する。すなわち林地及び林木の保全を図る造林本位の合理的な方法をもって境内林の目的である尊厳の保持に務める。」となっております。

以上のように昭和二十六年以降は本格的な森林の整備・経営に乗り出しておりますが、昭和三十六年度からは、鹿児島県が五年毎に十ヶ年を一期とする森林計画を作成し、その計画に基いた施行を行っております。平成三年度の神宮林の現況は、面積は約八百町歩、

立木の蓄積は約十七万五千立方米となっており、そのうち約三百町歩が杉、桧、赤松の人工林で約三百七十町歩が天然林となっています。また神宮林は全区域が霧島屋久国立公園に指定されており、一部は水源かん養保安林にも指定されています。

戦後、神宮の所有地となつてからの神宮林の植栽面積は二百町歩余りで施行計画に基き、改植や林相改良、林種転換など杉、桧を中心に山林の整備を進め、植栽、下刈り、枝打ち、間伐などの手入作業は延にすると二千町歩位にもなります。平成五年以降は、植栽も複層林方式を取り入れて針葉樹と広葉樹を併植するようになっております。このようにして山林の整備、保護育成に取組んでおりますが、すべて計画通り順調に進むわけではなく、様々な災害や障害があります。

台風や豪雨による風倒木、土砂崩れなどの自然災害ともう一つ野生動物や虫類による災害が近年大きな問題になっておりその対策に苦慮しております。

松くい虫の被害は昭和三十年代前半から現れ始め、当初は被害木の伐倒除去が中心であつたが昭和五十年代に入つてからは、ヘリコプターによる薬剤の空中散布が行われております。神宮林の標高八百米地帯には赤松林があり、県内でも貴重な赤松の群生林とされておりますが、毎年梅雨期前に空中薬剤散布を行っておりますし、境内地や参道の松並木

は殺線虫剤による樹幹注入方式を採り入れて被害の防除を実施しております。

また、野うさぎ、鹿の被害も多く対策に頭を痛めております。忌避剤の使用など様々な対策を講じておりますが効果は挙っておりません。杉、桧等の苗木を植栽すると鹿は苗の芯を食べ、うさぎは苗木の根元の幹の皮を食べるなどして苗木を枯らし、また著しく生育を妨げる等、その被害は近年特にひどくなり、電気牧柵や有刺鉄線、古魚網による防護柵を設けるなどしてりましたが、平成七年度からは、植林する場所に高さ約二米のステンレス線入りのポリエチレン網を使った防護柵を設けて、うさぎや鹿の進入を防いで植林するということに不本意な経費と労力を費しているのが実状です。

動物愛護を強く叫んでいる人等には、山林経営者のこの様な苦労は殆んど知られていないと思います。

以上、明治以降現在までの神宮の森の概略をお話しましたが、今後の神宮の森について、自然の恵みと先人の努力を鑑みとして、神道の原点である自然崇拜、自然との共生という伝統を守り継承することが第一義であります。

天孫降臨の聖地、日本の肇国の地は緑ゆたかな、神在ます森、神籠る森、でなければなりません。

緑深い鬱蒼^{うつそう}と繁る森林の彼方に一際高くそびえ立つ霊峰高千穂は、まさしく天孫降臨の聖地であることを、参拝者にも肌で感じていただける環境（神域）づくりに関後とも最大限の努力をしなければならないと考えております。

天神様と私

御神像掛軸拝受の大靈験

相原牧雄

人は誰でも神さまの御子であります。神様を敬って、正しい願いを持ち続け、絶えず努力しておりますと、必要なもの、希望する宝は、確かに、神様が与えて下さいます。

私は、天神様（菅原道真公）の、お姿の掛軸を毎日拝み度いゝと、念願しておりました。その昔、勅使が太宰府に参向せられ、菅公に正一位太政大臣を贈られ給う宣命を、御読み終えられたとき、神殿鳴動して空に御声がありました。

きのうは ほつけつに かなしみをこらむるの しみなり
昨 為 北 闕 被 悲 士
きようは せいに はじをすぐの かばねとなる
今 作 西 都 雪 耻 戸
いきでの うらみ 死 飲 其 奈 我
生 怨 死 飲 其 奈 我
いまは すべからく のぞみたりて まるべし
今 須 望 足 護 皇 基 . . . と

此の御霊詩は「一度び詠吟の人をば、毎日に七度び守護するぞ」とのお言葉が後にござ

いました。

私は昭和二十五年の春より、毎日、奉唱して参りました。遂に御神像の御掛軸としては、わが国最高と信ずる宝物を、拝受致しました。

それは、昭和四十二年の三月二十一日春分の日、呉市内の本田屋という骨董屋で、僅か千円で買い求めました。いや、天より授けて頂きました。大喜びで捧持して帰り、床の間に高く掲げ、毎日拝み始めました。

それから二ヶ月すぎて五月二十七日に、山口県の大神社の例大祭に、この御掛軸を捧持して参拝いたしました。

すると、明治大学のO教授は「これは素晴らしいのです。昔から多くの絵かきさんが、天神様の御姿を画かれましたが、菅公は罪無くして流され給いましたので、お顔は御憤りや御悲みの御表情なのです。然し此の天神様の御顔は温和そのものにおわします！」と、絶賛されました。

祭典は厳肅に斎行され、直会の終り頃に、此の神社のK先生が、「相原先生！御掛軸を。O教授に譲ってあげて下さい。お頼みます！」と言われます。私は「どなたにも御譲りいたしません」と申しますと、K先生は重ねて、「私の家の天神様の御掛軸と○○天皇様

の書道の御後見役として、天下随一と言われた大書道家の書軸、つまり二点を、相原先生に私から進呈します。その上でO教授は、相原先生のおっしゃる通りの金額を出されます。なおO教授は『私は学問をもつて身を立てる者でありますから、是非に……』と、言われております。何卒、譲ってあげて下さい！」と、強い御執心であります。

私は眉を上げて「相原牧雄の学問の程度は、只今は貧弱であります、あと五十年勉強に励んで、『人間とは何ぞや？即ち、アマテラスオホミカミの御子なり』『人生いかに生きるべきか？即ち一言十行なり』又、『世界維新実現大神歌の解説』——即ち新世紀開幕の大神示を、説き明かす『人類最高最貴の大宝典』を書き上げ度いのであります。そのためには、此の天神様の御絶大の御靈力おんぜつだいを毎日頂戴したいのです」と大きな夢の事も申し上げて、きっぱりと御断り致しました。

O教授からは「もしも万一、手離してよいな……と思われた時には、私に一番先に知らしてください」と真剣に頼まれました。

此のように異常なる御執心から推察して「大変なる宝物である！」と思い、それから耳学問や書籍等々を求めて研究を重ねましたところ、全く驚き、此の上なく喜びました。

御掛軸には「月溪謹（げつけいつつしむ）」との落款らくかんがあります。「月溪」とは、松村呉

春画伯の事でありました。かの有名な丸山応挙先生に次ぐ大画家で、四条派の開祖であり、立派な門弟も輩出ノ江戸後期から明治にかけて、京都画壇の中心であった事が判明した！のであります。

特に「月溪」の雅号から「呉春」に改められた経緯を知った瞬間ノに、私は思わずハタと膝をうちました。「呉春」とは「呉の春」と書きます。私が御掛軸を拝受致したのは、「呉」を訪れた昭和四十二年の「春」で、春の真中の、春分の日ノでありました。奇霊です。そして拝受の御値段は、ナント僅かに千円ノ此の大神秘。此の大神恩ノは言葉にも筆にもなりません。「御威光溢れる天神像を、呉春の作品を、呉の春に授けてやるぞ！」との玉の御声が聞こえてきます。

その後、数多くの天神像を拝観いたしました。私が拝受の御神像こそは、正に「天下一品ノ」との、大歓喜大自信が高まるばかりでございます。

一年後に、山口県のK先生に拝眉致しますと、「あの天神様の御掛軸は、やはり相原先生そのものが、天の神様から頂戴したものです。重要文化財級の逸品です」と喜んで下さいました。

又、私の尊師T先生は東京より「美術名鑑等々で調べると、二千三百万円の評価であり

ます」との、有難き御手紙を頂きました。

ああ、高く貴き大神様が、人間の世界に御降誕遊ばされ、大きな大きな御苦難に耐え給い、人間生活の御手本を見事に御示し賜りましてから、天の大神界に御帰りになられて一千一百年の記念の年に、改めて広大無辺の大神徳を朝夕に仰ぎつつ、駕馬に鞭打ちながら学問を続け、神明奉仕に専念し、聖なる大目的であります『人類最高最貴の大宝典』完成のために、勇往邁進することをお誓い申し上げます。

(広島県 切幡神社 宮司)

小岱山振魂の瀧のこと

平川 訓正

私は、小岱山しやたいざんといふ山の麓（熊本県玉名郡南関町）に少しばかり土地を所有しております。そこには、山から湧き出でた小川が流れております。今から二十三年前より毎月一日の日にその小川にて「禊仲間」と共に禊をしておりました。小さな小川でありますので季節によつては水量が少なくなつたり、増えたり、水が濁つたりします。また、年々人家から流れ出る洗剤汚水やプラスチックのゴミなどが混ざるようになり、私は、清らかな水で禊ができたらいいなあと思うようになりました。

平成七年に内孫男子誕生し、記念に柿の木をその土地に五十本、少し離れた土地に二十本植樹し孫の成長と柿の成育を楽しんでおりました。柿の木を植樹したのは、秋にはおいしい実がなり、知人にも配れるだろうと思つてのことでありましたが、夏になれば夏草が生い茂り草刈りも早朝や夕暮れの中である日々が続いていました。

平成十一年、天皇陛下御在位十年の年、いつもの如く山で柿の木の周りの雑草を引きぬ

いている時にふと「そうだこの土地に井戸を掘ればいいんだ。ここに禊場をつくろう。」と決心いたしました。この場所は山の斜面、九百坪の広さがありました。この見上げる杉木立の陰に井戸を掘り、腹の底から神語をとへ身を清めることができたらどんなに良からうか。また宿泊可能な鎮魂道場を側に建て、ゆつくりと心を落ち着ける時間を持てればどんなに良からうか。

建設工事は着々と進み、井戸は五〇メートル掘ったところの水脈に当たりました。

そして、直径三・九メートル深さ〇・八メートルの八角形の滝つぼを作りました。十二人ほどの人が一度に入れます。（小岱山振魂之瀧と命名）

井戸水は約二・五時間程で満水になります。汚れなき清らかなありがたい水です。鎮魂道場は建坪三二坪、二LDKの和風家屋となりました。（小岱山禊之郷と命名）

平成十二年九月いよいよ竣工となり、竣工祭には、真木大樹県神社庁副庁長をはじめ県内の神職・関係者（禊仲間）の方々に参列していただき、小鳥居信貞県錬成行事道彦（太宰府天満宮権宮司）先生の先導で初禊をしていただきました。皆様喜んでおこしいいただき、大変ありがたく感無量の思いとならせていただきました。

ところで、禊は何のために、どうしてするのかとよく尋ねられます。

「一度来てみてやってごらん。とにかくやって見たらわかるから。」と答えます。私の襖仲間の一人は大きな商店の社長を務めておりますが、彼の感曰く、「商売は儲けるのが仕事。でも我が欲ばかり走っては儲からんとよ。襖をして、心を静め我が欲を捨てるとたい。そしたら、あらゆることに感謝することとなるばい。すると商売もうまくいくたい。」と言います。忙しい毎日を忘れさせるひとときだと襖を楽しみにされておられます。

私も同感であります。襖は自分が生きている、また生かされている「命」をよみがえらせる霊力があります。大昔の神々の時代、黄泉の国の穢れにふれられた伊邪那岐命が、筑紫の国の日向の橘小門之阿波岐原にて襖をされ、身をすすぎ、清められたところで左の目を洗うと、光り輝く天照大御神、右の目を洗うと月読命、鼻を洗うと須佐之男命が誕生され、「たくさんの子を生んできたが、最後に三人の貴い御子を得たぞ。」と喜ばれ、襖によって三貴子が誕生したと語られています。

私は襖をなぜするのかと申しますと、このように水の清らかな霊力をいただいて、神々のみ心になかう自分でありたいと思うからです。

非日常の場所で非日常の行為で得る貴重な感動。水はもとより、目に触れる山の緑、草、木、石ころ、土、肌を通りぬける静かな風、山のほひ、空気、空、耳を澄ますと草木の

ざわめき、鳥や虫の空に放つ声・・・生きとし生けるもの皆すべて、大いなる自然の懷に抱かれて、八百万の神々と共に居るという感動。

この感動は、やはりこの地でしかあじわえません。今後私は禊の授ける感動を多くの人に広め、神ながらの道へ誘いたいと思います。

(福岡県 熊野神社 宮司)

八百万の神を仰ぐ

生 寫 經 和

○

最初に私事にわたり恐縮ですが、今年九十二歳になる母方の伯母が一人おります。五年ほど前に脳出血で倒れ、その後遺症で左半身が不自由になり、現在も車椅子生活を続けています。ただ、ありがたいことに、目もよく見え、聞くこと、話すこと、読み書きの能力は何とか残されています。私共がたまに訪れても、その確な受け答えには驚くばかりであり、逆に刺激を受けることが多くあります。長く小学校の教師をしていたこともあり、非常に知識欲も旺盛で、現在も時事問題等に衰えることなく深い関心を寄せています。その伯母は、新聞が届くと半分に切ってもらうそうです。半分だと片手でもつことができ、裏表すみずみまでも読めるそうで、色々な工夫を重ねているものだと感心をしています。また、親しい知人のジャーナリストと手紙のやり取りをしたりして、新しい情報を得ようと努力をしているようです。もちろん、神仙に対する崇敬の念も殊の外強いものが

あり、特に、昨年来の宗教的な対立が原因となつて、戦火が拡大をしていく世界の現状を憂いつつ、新聞を読み、解説書を繙いているということです。

○

さて、そんな伯母の話から、昨年九月十一日に発生した米国中枢への同時多発テロが思ひ出されます。あのニューヨークの世界貿易センタービルに次々と突入する旅客機、爆発炎上し崩壊するビルの光景は、今も生々しく鮮明に脳裏に残っています。そして、それに続くアフガニスタンの攻撃、アルカイダとの戦闘の様子は平和になれた現代の日本人に大きな警鐘を鳴らしている感じがいたします。今もなお緊迫した状態が継続していますし、新たな戦争の可能性も危惧されています。

特に私ども神職の立場から見ても、世界宗教と民族宗教、一神教であるイスラム教やキリスト教、かたや八百万の神に象徴されるわが神道とを比較するとき、様々な点で彼我の相違に深く考えさせられるものがあります。

先程お話しました伯母は、そうした事柄にも非常に関心を持ち、自分なりにいろいろな資料を読み、その内容を知人に手紙で書き送ったりしているようであります。その中で、イスラムの過激派といわばキリスト教世界を代表する存在であるアメリカ外交の姿勢の共

通点を、資料を引用する形で挙げています。それは、①自らの優越性を全く疑わない、②自分の持っている価値観が正しいと思ひこんでいる、③自分と異質なものを理解しようとする意志がない、の三点であるそうです。



これはまさに一神教世界の大きな特徴であると思われます。一神教の立場では、人間も自然も、唯一絶対の神（ゴッド）によってつくられた被造物であり、たとえば自然は人間によって征服せられるべきものと考えられました。それは砂漠のような厳しい自然の中で生まれた宗教としては当然の神観念であると思われます。アフガン攻撃のテレビや新聞の報道を見ると、緑の樹木すら見あたらない茶褐色の荒涼とした風景が続いています。果てしない砂漠が、水も少なく、太陽の光さえ時として激しく、厳しい自然との闘いの中から発生した宗教との差というものを如実に感じる気がいたします。

最近、韓国のジャーナリスト、キム・ワンソプ氏の著書『親日派のための弁明』を読む機会がありました。日韓の歴史を非常に公平な立場から検証した画期的な内容の本であると感じておりますが、その中に、「日本精神、神道、靖国神社」に触れた部分があります。一部引用しますと、「神道の根本は万物に神が宿っているという汎神論だ」、また、「日本

の神道は人類がつくりだした、もつとも理想的な形の宗教だ。神道は古代から存在し、多様な外来宗教と文化が混じり合いながらも、今日までその根つこの部分には不変の神秘さがある」と述べています。



日本の神は、キリスト教におけるゴッド、イスラム教のアッラーのような唯一絶対の神、超越神ではなく、自然や人間に神格の顕現を見出しました。「八百万神」・「千万神」・「千五百万神」などという通り、人間的な姿で活躍する神もあれば、自然そのものもあり、極めて多種多様の存在であります。

本居宣長は、「尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とはいふなり」と説明しています。日本人は天地間の万物、すべてのいのちあるものを讃えて「神」と仰いでまいりました。そして、神と人との間に絶対的な差異を認めず、人も神と成り得るし、神としてまつられることがあると信じてきました。その点で、神と人とは隔絶して相容れないという一神教の立場とは明確に異なるのであります。

四季折々の豊かな風土に恵まれた日本列島は、自然の恩恵によって生命を育まれてきました。それゆえ常に自然に感謝し、生きとし生けるもすべてを「八百万神」と讃え仰いで

まいりました。

この大いなる神々の存在が、すなわち「神道」であり、われわれが自信をもって、現在の世界にまた未来に誇ることのできる、日本の民族宗教であると思うものであります。

(京都府 松尾大社 権宮司)

神武天皇御東遷

荒木房雄

本日は茲に我日本國歴史の發祥の九州鹿兒島の地霧島神宮に於きまして、私は神武天皇御東遷と云ふことに就いて申し上げ度いと思ひます。

神道とは天地悠久の大祖神天子様に御奉公申し上げるの道であると信ずるものであります。神典古事記に依ると鵜茅草葺不合命様に四人の男の御子様が居られました。其の母君も曾母に当たられる方も海神の都の海神の娘様で有った。一番上の方は皇兄五瀬命、末の四番目の方は幼名を狭野の命と申し、又の名を神大和磐彦天皇命と申し、後の我國第一代目の神武天皇に在らせられます。中の武人の方は朝鮮或は南洋方面へと向わせられたのであります。神大和磐彦天皇命は皇兄五瀬命と御相談になられ、吾々は此の九州西國の高千穂宮に何時迄居つても仲々天下を統一することは出来ない、やはり都をば東國の方に移されませうと、そして九州阿蘇の神々に祈願を込められ勇躍出向わせられることと成ったのであります。然し其の行手には筆舌に盡し難い処の難艱が待受けて居ったのであります。

其頃東國の方には高天原以来の土族豪族と云った猛將が雲の如くに居ったのであります。

塩土翁命の御導もあり豊後水道を通り、大坂難波を通り、伊駒山を越え、大和に入らむとする処には鳥見山には豪族鳥見族^{トミダウ}の長髓彦と云ふのが居り、饒速日命を奉じて勢が頗る強かつた。此の饒速日命に妹の鳥見夜姫をば嫁がせられてあつた。饒速日命と云ふ方は天岩船に乗って天下られたと云ふ天津神の子孫であり後の物部一族であつた。長髓彦は皇軍の来るを待受けて或日暁の日輪を脊負つて一舉に攻め立て、来た。此の孔舎坂^{クサカザカ}の戦に於て皇兄五瀬命は敵の流矢に當つて戦死せられたので有ります。嗚呼無念である。今此処で志半ばにして倒れるとは我々皇軍は日の御子であるのに日輪に向つて弓矢を引いたが為に不覺を取つたのである、以後十分に注意する様にと諭された。そして御遺骨は懇に葬られたのであります。そして皇軍は一端難波に引返し迂回して大和に入り、其処の宇多と云ふ処には豪族宇迦斯兄弟^{ウカシ}が居った。兄の宇迦斯は皇軍の来るを待受けて穴を掘つて一挙に落入れようとしたが、敬神家である弟の宇迦斯に依つて見破られ、自ら掘つた穴に誅せられたのである。この時力を盡された方は道臣命近衛將軍大久米命達であつた。八咫鳥の導も有り勇氣凛々葉竹^{ハチク}の勢を以て進軍を開始して行つた。

次は忍坂^{オシザカ}と云ふ処に八十猛^{ヤッタマシ}の一族が居つたが、之は計略に依つて何無く打平げられたが

未だ長髓彦族が残つて居るので皇兄の仇を取らなければならない。此の時の神武天皇の大み歌には、みつ／＼し久米の子等が粟生アワフには葦一莖カウヒトモト 其根が莖 其根芽繋ぎて打ちてし止まむ。の烈々勇武の歌が有ったのであります。そして互に対峙している間に皇軍が愈々危くなつた時、一天俄に搔曇り雹が降り雲間から一羽の金鷄が飛んで参り神武天皇の御弓の先に止つた。其の光輝く眩ゆさに賊軍は一挙に退散した。そして互に対峙している内に長髓彦はあちらの神武天皇も天津神の子孫であると云ふが、こちらも饒速日命を奉ずる天津神の子孫である。天津神の子孫に二通りある筈はない。何か証拠があつたら見せて貰い度いと。そこで神武天皇は天の羽々矢と歩鞞カチユキとを取外して示した。それは寸分の違もなかつた。そこで饒速日命は我々は最早皇軍に従ふ可であると諭されたが、長髓彦は頑として聞かなかつた。そこで饒速日命は長髓彦を自ら誅された。此処に於て神武天皇は鳥見山に天津神籬ヒモロギを立てて天津神を祀り政治を始められた。之が我國の祭政一致の始まりである。檀原宮に御即位に成られた時、大伴物部の強者共を率給ひ高御座に就かせられ天下治召し給ふ事となつた。此の時を以て我國の紀元元年とするのであります。妃には五十姬命七少女

の一人伊須氣依姫命五十鈴命を皇后とされた。此の五鈴姫命は斯の有名なる大國主命の御子八重事代主命の娘であつたのである。神武天皇様は八紘一字の大精神を抱かせられ、雄図を抱かされ日向をご出発された時の御歳は四十五歳、御即位になられた御歳は五十二才、天寿を全たふされ神去り給ふた御歳百参拾七歳と伝へられて居るのであります。

九州の宮崎神宮、大和奈良の橿原神宮に齋奉られて居る所以のもので有ると思ふのであります。正に神武天皇様は神道の先覚者であり先達者であり、其の実踐奉公者にお坐します方でありました。

嗚呼偉大なる哉神武天皇様であらせられます。此の神武創業が明治維新の原動力と成つたことは云ふ迄も無いと信じます。御静聴有難ふございました。

（北海道 尻岸内八幡神社 宮司）

日々新たに

河野 誠

早朝遠くに浮かぶ島より出る真つ赤な太陽を拝む時、今日も元気で朝を迎えられた事に感謝いたします。と共に、今日も一日頑張るぞと新しい気持ちになるものです。そして、命の若返りを感じるのは私だけではないでしょう。大自然の朝は、自ずと人をして、新生の喜びを感じさす何ものかを持っているようです。それを、人は大自然の神秘と言っています。

さて、日々新たになっている物の中に、六十兆と言われる私達の肉体を作っている細胞があります。何億と言う細胞が日々新たに出来ていると言われています。生命を維持して行くには、細胞も逐次新しくなっていかなければならないようです。私達が眠っている間も、心臓は働き続けています。そして、体の隅々まで、栄養を補給し、且つ老廃物を体外に運び出す役目をしているのです。

山野を彩る木々も、境内に生えてくる草花も、総て細胞の増殖と若返りを日々繰り返し

ているのです。只々神様の成される計らしいに驚かされます。

ところで、人間は草木や他の動物と異なつて心を神様より、授かっています。この心の持ち方によつて、更に生命は活動を高められると言われています。

私は昨年の四月、妻を交通事故で失いました。それ以後はかつて、予想もしなかった、人生一人旅の日々が始まりました。そして、その一人旅を支えているものは、新しい生活への挑戦です。

一人旅と妻と一所の二人旅の大きな相違は、すぐそばに話し相手がいるか、いないかと言ふ事です。一人旅をしている人の多くは「独りごと」が多くなつたと言っています。私も全く同じです。その日の出来事、嬉しかった事、困つた事など、人間と言ふ動物は話し、聞いて貰ふ事によつて、心が癒されるらしいのです。そこで、この心を癒す話し相手を何処に求めるかによつて、是からの生活は変わつて来ます。私は、それを同じ年輩の人達の集まりである老人クラブのカラオケ同好会や、習字教室や、社交ダンスの同好会に参加する事によつて、補うとしています。勿論、これで二人旅から、一人旅になつたハンディキャップを完全に補えるとは思いませんが、幾分とも補えるのは事実で、有り難いことだと思っています。前向きに日々前進、そして自立生活の確立の意欲は、一人旅をする者には、必

用な事だと思っています。

もし現在も尚妻との生活があるならば、今更、八十の手習いで、得意でもないダンス等には、見向きもしなかったでしょう。また習字の練習にしても、カラオケの練習にしても、子ども達が新しい事に対して意欲を燃やし、生命の躍動を感じるのと同じように、所謂老人青年を意識して、新しき物への好奇心を、敢えて、燃え上がらせような事はなかったと思います。それは、一人旅の者に、神様より与えられた大きな恵みの一つだと思っています感謝しています。夫婦には、二人旅の生き方があり、一人者には一人旅の生き方があります。それぞれ境遇の相違によって、求めるものは当然異なってきます。ただ、命の若返りを願う時、新しき物への探求意欲は是非必要と思っています。中には「それは、貴方が元気だから、そのように言えるので、病気がちの私達には、とても考えられない話だ」と言われる人もおられると思いますが確かに、それも事実だと思います。腰の痛む人、足の痛む人、食欲のない人と人それぞれ異なっています。私も数年前、心臓のバイパス手術で付けたバイパスの二本のうちの一本が使用不可能になっており、担当医師よりは、「貴方は重症患者だから、気を付けなさい」と言われています。私はそれらは総て、神様のみ計らいと素直に受け入れようと思っています。とすれば、私が生かされているのは、成さね

ばならぬ事がある為だと思っています。話は変わりますが、十数年前、須山登さんの、お世話で、この町にも子供神輿が新調されました。その寄付者名を見ると、既に故人に成られた方が多くおられます。つくづく、年代を重ねたと実感すると同時に、宮司として私がしなければ成らないことが多く残されている事にも気づかされます。

日々とは継続を意味します。例え一日の成す事は目に見えない程の小さいものでも、日々努めれば、驚く程の仕事になるものです。境内の草にしても、日々、草の生命は一瞬の休みなく活動しています。たかを括って、草取りを怠ってる間に、何時しか、花を咲かせ生命継続の種を地上に落とそうとすると、生命の偉大さにあらためて驚きます。

皆さん、どうか自分自身の身边を静かに見廻して下さい。大自然は私達に何かを教えようとしています。つまり、神様は日々の生活の中で、いつも何かを教えようとして下さっています。皆さんもそこから明日への生きる力を得て下さる事を願って止みません。

今夜はようこそ、暑い中をお参り下さいました。有り難うございました。

(広島県 齋島神社 宮司)

お守りさん

寺 本 正 徳

今月もようお詣りでございました。

神前で清められた清々しいお心で今月も、またご健康にご送日下さいませ。

この処、病氣見舞に行くとか、海外旅行に行くとか、外国の方に記念にするとかで、お守りさんの授与がふえてきました。

ありがたいことでございます。

さて、ついこの前のことです。

若い二人が見えまして、ここの神社に、お守りさんを納めさせて下さいと申されます。ハイ、結構ですが、お守や、お札の納め方は、お受けになった、神社やお寺にネ、事の次第を報告、感謝の念をこめて納めさせて戴くのが、本当の姿なのですと説明しました。九州の母もそうしていました。

このたび、二人ともお守りさんのお蔭で、難関を突破し、いますぐの新幹線で、東京に

行きます。スミマセンが宜敷しく願います、といって一通の封筒を差し出されました。受け取った封筒には、稲荷神社の開運厄除のお守りと、太宰府天満宮様の合格お守りにお母さんからの手紙も入っていました。

「受験する二人に」

お母さんは、二人になにも手伝うことが出来ません。今日、天満宮様にお詣りし、二人の合格を祈願してきました。

神様に心をこめて祈願してきました。

“桜咲く便り”を待っています。

追伸、神主さんも、“平常心”で臨めば大丈夫だといって下さいました。

神様の力強いお告げと受け止めました。

母より

合格守りを握りしめ、難関に臨んだ、二人の姿が目に見えてくるようではありませんか。諺にもありますように。

“石に立つ矢” “思う念力岩をも通す”

母の心が神様に通じ、神様は、二人の努力に、合格のプレゼントを下さいました。

みなさん。

宗教とは、信じることです。

念ずれば、助けて下さいます。

お蔭様と、感謝する心です。

みなさんも、お守りをお持ちでしょう。後生大事に、神棚や、仏壇の奥深くしまひこむのではなく、いつも肌身につけて、守って貰ってください。『猫に小判』になさらぬように。

最後に、もう一つお守りさんについて、お話します。

古い氏子様で、富岡さんという方がおられました。

合うたびにごとに、寺本はん、あんたはん、まだ若いのう。お守りさんに救われたこというたかて信じへんでっしやろ。

ほんま、わたしや、お守りさんに救われたんでっせ。

戦争のことというとき長くなりますさかい、簡単に話しまっさ。

わたしや、毎年のように遺骨収集で、ジャングルに入っていました。

同志の者もだんだんに年取りよって、もう今年で最後にしようという日のことです。

いつものようにジープに分乗、さあ数キロも入った時のことです。

突然ゲリラの銃撃に合い、腰の当りの痛みと共に気を失ったそうです。

気が付いた時は病院のベットの上。

若い医師は、富岡さん助かりました。これが、貴方を救ってくれた品です。

ここに、二、三日休んだら日本に帰れます。

オメデトウ　ございます。

受け取った弾帯と、皮のベルトには無数の穴がありました。身につけていた、お守りさんは、ほつれ掛っています。

一瞬、身体中の血が引く思いがしたそうです。いつもは首よりつるしていた、お守りさんを、今日に限ってベルトに挟んでいました。

そのお守りさんが、わたしに新しい生命をくれたのです。

富岡さんは、帰国するなり早々に、四天王寺様に、事の次第を報告に行きました。

終止無言で聴いて居られた管長様が

富岡君よ、よう生命あつたな。

これも、みんな、あんたはんの心掛けやで

厚い信仰心のなせる業やで。

戦友が、身代りなりはったんや。

生命くれはったんや。残った人生大事に。

管長は富岡さんの手を握りしめて下さったそうです。

“声涙 俱に下るが如”

熱く、熱く話して下さった、富岡さんも、四年ほど前に、笑うが如くに天国の星になりました。

ここに生前の指導に感謝し、ご冥福を祈ります。

みなさん、今日は、お守りさんについて、私の経験した二つの例えを話しました。

わたくしも、四十年ほど前に、故里を出ますとき、母のつけてくれた、氏神様の

“お守りさん”を肌身離さず身につけて、神様のご加護を戴いています。

本日は、ご多忙の折り、長時間にわたり、お付き合ひ下さいましてありがとうございます。

さて、来月は

神道の心、感謝 お蔭様なる心

について話して見ましょうか。

(大阪府 稻荷神社 権祢宜)

合掌

神風

畠田明彦

今日は「神風」と題してお話をさせて頂きます。

一般に「空氣の流れ。氣流。特に肌で感じるもの」を我々は「風」と呼んでおります。暑い夏に風がそよげば涼しさを感じ、寒い冬に木枯らしが吹けば体が震え上がります。つまり、目には見えないが、体で感じる、それが「風」であります。

それでは、「神風」とはいったいどのような「風」でしょうか。風は言うまでもなく自然現象です。自然現象全てが神様のなせる業と言えばそのようにも思えるのですが、ここで言う神風とは単なる自然現象ではありません。自然に発生するものではなく、人の真摯な「念」が神様に通じ、神様の業を以て吹く風が「神風」であります。

まず、神様の「業」について私が感じた事を経験談を交えお話しさせて頂きます。私が奉職する松尾大社のご祭神は、平安時代には皇城鎮護の神として、東の賀茂の厳神、西の松尾の猛靈と称せられておりました。私、当社に奉職して十九年目を迎えますが、その間

に、この「猛霊」と称せられた所以を何度となく痛感させられた事があります。もう十数年前になりますが、境内の木の枝打ちをしている時でした。当然樹木には生命が宿っております。ましてや境内の木となれば、尚更そういった事を念頭に置き、事に当たらなければならぬのです。しかし私はただ邪魔なものを除去するぐらいの安易な気持ちでおりました。そして切り取った大枝が顔を直撃し、何針も縫う大怪我を致しました。如何にも「猛霊」に相応しい男性的なストレートな神罰だと思いました。

又去る平成十年十月、私が宿直をしておりました深夜、記録的な集中豪雨に見舞われ、松尾山から大量の土砂が境内に流れ込み、庭園の一つの曲水の庭が完全に土に埋もれてしまいました。そこは重機の入らないところで、全て人力で除去しなければなりませんでした。男子職員全員通常の業務を置いて、約十日間土砂の撤去作業に当たりました。上司も部下もなく懸命に一日でも早い復旧を願い、皆泥だらけになっておりました。その姿に私は感動を覚えました。これは松尾の大神様が我々を試され、そして「団結」の大切さを諭され、その素晴らしさを感じさせてくれたのだと思いました。

次に私の実家は神戸の小さな神社の社家で、幼い頃少々家庭が荒れている時期がありました。毎日暗い思いで過ごしておりましたら、ある人に「一生懸命神様にお願ひしたら、

必ず良くなるよ。」と諭され、神社でのお百度詣を勧められました。そして夜中に裸足で一生懸命祈りつつ小一時間かけてお百度詣を致しました。すぐに結果が出たわけではありませんが、徐々に改善していった事は確かです。ひたすらに祈れば、神様はその人の望む形ではなくても、必ずその人にとって良い結果をもたらしてくれると、その時私は感じました。

ここで話は少し歴史的なものになりますが、神風といえば、やはり文永十一年と弘安四年の未曾有の国難である元寇、所謂蒙古襲来時に蒙古軍を撃退した暴風があげられると思います。今時このような話をすれば、「あれは単なる台風にすぎない。」と笑われるかもしれません。しかし当時の龜山上皇を中心とする敵国降伏の祈願には、捨命殉国の精神の凄まじさが窺えます。朝廷のみならず国民が一体となってこの国難に際し、神仏に祈ったのです。その祈念が台風を呼んだのです。一人一人の小さな念が集まり、より大きな、より強い念となったからこそ、数千隻の船をも一蹴する神風が吹いたのだと私は思います。あまり念を強調しすぎると話がオカルト的になってしまいますが、真摯な念は必ず神様に通じると思います。しかしここで大切なのは、感謝の心です。人は勝手なもので、祈るときは一生懸命になるのですが、その後の感謝を忘れる場合が多いのではないのでしょうか。

平素の無事に対する感謝の念があつてこそ、お願いをする資格があるのだと思います。

今日日本には、祖国のために尊い命を捧げた英霊をも否定する輩が決して少なくありません。何故感謝の心が持てないのでしょうか。国民一人一人が神や祖先に対し、常に感謝と畏敬の念を抱いていれば、混沌とした現状に神風が吹き、風通しがよくなり、清々しさを感ずる事が出来ると私は信じております。元寇の際の敵は蒙古でした。現在の敵は感謝や祈りを忘れた「心」そのものではないでしょうか。「真心」のないところに決して神風が吹く事はありません。

真摯な念は神様に通じる、私はそれを信じ、宝くじの時期になると必ず券を購入し、三億円当たると只菅念じておりますが、当つたためしはありません。神様はそのような贅沢な願いは決して聞き入れてくれない事を言い添えさせて頂き、私のお話を終わらせて頂きます。

(京都府 松尾大社 権祢宣)

神様の不思議

村田佳子

「ひたすら階段を下りていくから氣を付けて」という友人に手を引かれて、おとといの夕方、昔は表参道だったという霧島神宮の裏参道を散策いたしました。

樹齢数百年と思われる大木が茂り、ほの暗い苔むす道を下りてゆくと、摂社の鎮守社がありました。と、その右の奥に、お墓があるではありませんか。「性空上人のお墓なの。この間も、墓前祭を御奉仕したばかりよ。」との言葉に、不勉強な私の頭は彼女を質問攻めにしてしまいました。まさか、次の日、昨日ですね、高橋宮司様がお話下さるとは、きつと、霧島の神様のおはからいに違いありません。

昨日お話しにありました、そう。性空上人という方は、村上天皇の時代に、御山の噴火によって、失われた神宮を、再興さいこうされた方と教えていただきました。霧島神宮御創建は欽明天皇の時代です。また、現在の御社地に復興をされたのが、後土御門天皇の時代で、兼慶というお坊様でした。

神社なのに、なぜお坊さんが深く関係しているのでしょうか。不思議で仕方ありません。お坊さんといえば、仏教、仏様への信仰ですものね。今の時代の神主さんや、お坊さんに「神様と仏様ってどう違うの。」と質問すると、なかなか、納得のゆく説明が帰ってこないと言われます。私もよく、友人に聞かれて困ってしまうのですが、御創建と同じく霧島神宮の仏教は欽明天皇の時代外国からやって来た宗教で、神道は、それ以前からある日本固有の信仰というお答えでは、何か少し、舌足らずな気がします。日本最古の歴史書である『日本書紀』に、欽明天皇の十三年、百済の聖明王から仏様の像やお経が献上されたとあります。そこで欽明天皇は「西蕃の献れる仏の相貌端嚴し。全ら未だ會て有ず。礼ふべきやいなや」と臣下にお尋ねになりました。それに対し、神官であった物部氏、中臣氏は、「我が国家の天下に王とましますは、恒に天地社稷百八十神を以て、春夏秋冬、祭祀りたまふことを事とす。方に今改めて、蕃神を拝みたまはば、恐るらくは国神の怒を致したまはむ」と答えたのです。

天皇様が、「西の国からやってきた、仏様というもののお姿が、たいへん美しく、今までに見た事がなかったので、敬い、礼拝するべきかどうか」とお尋ねになった所を神官で

あつたところの物部氏や中臣氏は、「わが国の王とあられるならば、天地の神様また、たくさんさんの自然の神様、祖先の神様を、春、夏、秋、冬と季節ごとにお祭りされます事が、第一の務めです。今また他の国の神様を拝まれますと、おそろく、我が国の神様のお怒りに遭うでしょう。」と答えたのです。つまり、伝来した当初から、仏様は、今まで日本にはいなかった神様として考えられたのです。仏教は、最初こそ、警戒されわずかな戦いは起こりましたが、「御先祖様をまつる」という日本の伝統をとり入れた事で、国神様のいかに触れる事なく、むしろ好意的に受け入れられたのです。そして、明治になって、神と仏を明確に分離するまでは、神が仏になったり、仏が神になったりしながら、または、それぞれに厚く信仰されてきたのです。

しかし、これもまた不思議なもので、世の中にはそれぞれの教えにより、自分達の信じる神様以外の存在を認める事ができず、はてしなく殺し合いを続ける人々もいます。この自分達の信じる神様、しかも、唯一の存在としての神様だけを信じる考え方を、一神教と呼び、キリスト教やイスラームがそれにあたります。一方この一神教の国々から見て、我々日本人のように、様々な神様を敬い信仰する事を、多神教と呼びます。

一神教と多神教と、どちらがすぐれているかと聞かれたならば、ひと昔前までは、一神

教が優れている。多神教は、あまり文明の発達していない国の古い考え方だとされてしまった。「それは違う！」多神教というのは古い考えではない。ことに、私達日本の神様というのは、あらゆるもの、全てのものを良い事も、悪い事も、全ての事を含んでいます。さらに良い事に、全く他所^{よそ}から来た神様でさえも、非常に広い心で、つつみ込む事ができます。言い替えるなら、一神教の神様さえも、理解できてしまう、ものすごい力を持っています。

あー、本当に日本に生まれて良かった。私達の御先祖様は、素晴らしい生き方を伝えて下さいました。どうかみなさん、多くの神様をそれぞれに素晴らしいと認める事の出来る日本の国の伝統に誇りを持つてはありませんか。

世界中、どこの国の神様もあら不思議

日本へ行ったなら、仲良く平和に暮らせるそうなの。

(広島県 長束神社 権祢宜)

おこもり

宇都宮 誠

現在私は本社のほかに十二の兼務社を抱えております。それぞれにとっても面白い祭事があります。特に「ムラ」の鎮守のお社には興味深い物が多い様であります。今日はその中でも一般的な祭りの行事とも言える「おこもり」について考えてみたいと思います。皆さんは「おこもり」と言う幼いころ両親や祖父母に連れられてお宮に上がり、地域の皆と一緒に御馳走を戴いた記憶がよみがえってくるのではないのでしょうか。福岡県の神社庁暦によると現在でも五月には豊前地方で「苗代ごもり」、六月には「さなぶり」の記述があり、田川では「皆作ごもり」と呼ばれ、各地で御籠りが行われていることが分かります。では本来「おこもり」とはどういうものなのか。広辞苑によると「御籠」―神仏に祈願をこめるため、その堂に参籠すること。とあり、又、神道辞典によると、「御籠り」―神祭りの前の物忌みをいう。とあります。今日では祭日の前晩に、神社の拝殿、あるいは籠堂などに集まり、斎宿することを言う。とあります。今日ここで述べるおこもりは前

者の解説に当てはまるものであると考えられますが、私が思いますに「おこもり」はお神様をダシにして仕事を休み御馳走を頂き、酒を飲み疲れた身体を休め、明日への英気を養うものである。

元来ムラの鎮守の祭祀は稲作との密接なかかわりの中で行われてきました。お田植え祭、皆作祈願、川祭り、虫風祈祷、七夕願成就、秋祭り等々。皆さんが御存知の通り稲作そのものがムラの協同作業という一面を持っていました。その昔ムラは運命共同体でありました。従って、田植えを行い、農作を祈願し、共に収穫を行いその喜びを分け合ってきたのです。農作業はもちろん様々な祭祀に至るまで全てムラ共同の行事でした。皆作ごもりと云うのは、豊前地方では春の例大祭・神幸祭が終わると川上から順に田植えが始まります。上流から順に水を張り農家は総出で手伝いながら、ムラ全部の田に苗を植えるのです。これが終わると楽しい皆作です。ムラの皆が農家、非農家にかかわらず家族総出でご馳走を作り氏神様に上がり、農作の祈願を行い、七夕願成就のお祭りに奉納する行事を氏神様の御籤の業で決めるのです。くじの中身には色々の物があつた様です。子供相撲、女相撲、海汐、川汐。それから直会に移ります。御食、御酒を戴き、それぞれ持ち寄ったご馳走を広げ互いに交換しあいながら、田植えで疲れた体を休め、明日への英気を養い、この日ば

かりは何の遠慮もなくおいしいお酒も頂けるのです。子供たちもこの輪に交ざり、皆からお菓子を戴きます。盛り上がつてくると歌や踊りも飛び出し、こうして数時間に及ぶ「おこもり」が終了するのです。こうしてみると、ムラの「おこもり」が単に農作祈願の神事だけではなく、共同体としての連帯意識の高揚、情報交換、更には知恵や文化、しきたりや習慣と言った年寄りの知識ムラ独自の伝承などを受け継ぐ場となり、貴重なムラの伝統が受け継がれてきました。また、娯楽の少ない時代には、このような「おこもり」が季節季節の唯一の娯楽の要素をも合わせ持っていたと思われれます。又いつの世も子供はムラの宝であります。

「おこもり」で顔を見知った大人たちは、常に子供達に注意を払い、悪さを見つければどこの子供であっても我が子同様に叱り、善行見れば褒め、頭を撫でる。子育てさえも共同体意識の中でやってきました。

今日まつりも変わって参りました。「おこもり」は農家だけの皆作祈願となり、若者の家族は参加せず、従って子供が「おこもり」に顔を見せる機会は極端に少なくなりました。善し悪しは別にして、地域の風習は次の世代に受け継がれなくなり、運命共同体としての連帯意識は薄れ、子育ては核家族の中だけに成りました。

お祭りの様は、時代と共に移り変わって行くものであり、その時代の背景を反映したもので、現在ご馳走がご馳走でなくなり、欲しいときに欲しいものが手に入る、飲みたいときにすぐ飲みたいものが手に入る、ありがたい時代になりました。これを否定するものでは決してありませんが、豊かな物質文明の中で忘れ去っていった、感謝の心、年長者に対する畏敬の念、そして思いやりの心、更には自分の生活する社会の中の一員としての自覚と責任感。それらは全て昔からの「おこもり」の中で常に育まれてきた日本人の心のように思えます。今まさに必要とされている教育の原点が、神事としての「おこもり」にあるのです。我々神職が祭りを育て、継承することが子供たちを救い、ムラを助け、真に麗しい日本を作り上げて行くという自負と、確固たる信念のもと、共にまつりに精を出そうではありませんか。

(福岡県 風治八幡神社 宮司)

百済と九州

高山定基

神職にとって、古事記、日本書紀は神典の中心を示すものです。

大戦に敗れて、GHQの指導によって、新しい日本の方向づけの中、神道指令が出されました。神社の公職追放です。

古事記は仮空のもので、實在しない大野安萬侶をして、稗田阿礼が誦む所を撰録したとされている。けしからん事だと、日本共産党をはじめ、マスコミの攻撃を受けました。

十数年前、奈良に於ける大野家の墓所に於て太朝臣安萬侶の墓が発見され、決して虚実仮空のものでないと証明されました。

古くより、九州の地は隣接する韓国とは、平和の時も、戦乱の時も、大きな影響を受けています。外交、通商、又戦闘の窓口として大役を受持っていました。

昨年十二月二十三日の平成天皇六十八才の誕生日に記者会見が行われました。日韓共催のワールドカップとの関連で発言されました。

「日本と韓国との人々の間には、古くから深い交流があつたことは、日本書紀などに詳しく記されています。韓国から移住した人々や招へいされた人々によって様々な文化や技術が伝えられました。宮内庁楽部の楽師の中には、当時の移住者の子孫で、代々楽師を務め、いまも折々に雅楽を演奏している人があります。」

こうした文化や技術が日本の人々の熱意と韓国の人々の友好的態度によって日本にもたらされたことは幸いなことだつたと思います。日本のその後の発展に大きく寄与したことを思っています。

私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると続日本紀に記されていることに韓国とのゆかりを感じています。武寧王は日本との関係が深く、このとき日本に五経博士が代々日本に招へいされるようになりました。また武寧王の子、聖明王は、日本に仏教を伝えたことで知られております。しかし、残念なことに、韓国との交流は、このような交流ばかりではありませんでした。このことを、私どもは忘れてはならないと思います。ワールドカップを控え、両国民の交流が盛んになってきていますが、それが、良い方向に向かうためには、両国の人々がそれぞれの歩んできた道を個々の出来事において、正確に知ることに務め、個人個人として互いの立場を理解していくことが大切と考えます。

ワールドカップが両国民の協力により滞りなく行われ、このことを通じて両国民の間に理解と信頼感が深まることを願っております。」

今年の六月、ワールドカップは心配された事故もなく、大成功の中にめでたく終了しました事は皆様御承知の通りです。

昨年、祇園大神の韓国に於けるゆかりの地を訪ねました。京都八坂神社真弓宮司以下祇園社に関係する全国の方々です。ソウルから錦江にかけて調査・参拝・見学をいたしました。

高松塚古墳が発見された前年、昭和四十六年韓国の忠清南道公州市の宋山里古墳で新しい王陵が発見された。盗掘を免れたため塼を敷き詰めた美しい墓室や豊かな副葬品が残され墓主を明らかにする墓誌石が残されています。誌石には「斯麻王」の文字とともに在位二十三年六十二才で崩御したことが刻まれています。逆算すると武寧王の生誕は四六一年で日本書紀の記述と同じで、日本書紀の記事が正確であることが証明されました。古代朝鮮の史書「三国史記」にも記されており、又「雄略五年（四六一年）百済王の婦が筑紫の各羅嶋で児を生んだ。島で生まれたので嶋君と言う」この島が佐賀県鎮西町の加唐島であり、日本生まれの王が百済中興の王、武寧王となり、その古墳が完全な状態で発見された

のであります。

石で作る古墳の中にあつて、朝鮮半島唯一の塼作りであり、梁の技術をもつて作られた事は歴然としています。その後研究が進み、木棺が日本の九州の槨の木で作られていることが判明しました。梁と百済と日本の技術の交流が又、証明されました。

書紀に、一書に曰はく素盞鳴尊の曰はく韓郷之嶋は是れ金銀有り 若使吾が児の所御子国に浮宝有らずば 未是佳也とのたまひて乃ちひげを抜きあかつ 即ち杉と成る 又胸毛を抜き散つ 是檜となる 尻尾はこれ被となる 眉毛は是れ樟と成る 已にして其の用ふべきを定む 乃ち稱して曰はく 杉及び樟 此の両樹は以て浮宝と為す可し 檜は以て瑞宮を為すべき材とす可し 被は以て顕見蒼生の奥津棄戸に将臥さむ具に為す可し 夫の噉ふべき八十木種も皆能く播し生うとあります。

御祭神スサノヲノ命による植樹、木の用法に関する働き、又武寧王の柩まで連なっている事に深い感覚と歴史と御神徳を覚えます。

(福岡県 八坂神社 宮司)

社頭講話でのふれあい

松吉宣和

学問、武運長久の神社として、崇敬者の方々が参拝に来られ、祈願を受けられたご家族との会話を紹介させて戴きます。

乃木將軍ご夫妻の遺徳を偲び、昔を昨日の事の様に思い出す年齢になり、今の社会のこゝとを友人たちと話している中に最後は必ず「昔は良かったな」ということが口癖になり、昔は苦勞したけれども、苦勞のしがいがあったが、今日においては生活は出来ても、人とのつながりが、むづかしくなったような気がしてならない。自分が子供の時は、父母に孝、兄弟に友、夫婦相和し、朋友相信じを基本であった教育でしたが、今はこの言葉さえ忘れかけている。子供や孫に話すと、「伯父ちゃんたちは古い」と言われ、それでもことあるごとに自分が子供時の事を話しているが、学校ではどのような教育をしているのだろうかと思わざるを得ない。先生自身標準語つかつての授業が少なくなり、地方弁で話しており子供たちの名前も正しく呼ばず略して呼んでいる。親しみがあるかも知れないが、子供にとつ

ては、ばかにされていると思う子供もいる。以前お参り来たとき宮司様から、乃木將軍の話をしていたいたとき、明治四十年一月五日地区十三校三千人余りの生徒に対して「智」(ち)ばがた遊びや、いやしいことをせぬよう、恩義を弁え、目上の人をたつとぶやう。「任」(じん)よわいものいじめをせぬよう、人の上をおもひやるやう。「勇」(ゆう)こぜりあいせぬよう、ずるけぬやう、かうと信ずることはあくまでしおせるやう、又強きものとてもわけなく恐れぬやうの訓話をされた話しを思い出し、私は一度先生方にこの話を聞いていただければ、子供たちへの教育が良いほうに、転回すると思う。なんとかしなくてはいつも思っている。

もう一つ家訓を今も家族にことあることに話をしている。それは「幸せの基は朝晩先祖に向ひて、手をば合わせよ」と言われ、形だけの先祖まつりは誰でもが出来るが真心を込めて先祖まつりを行うことが大切であり、自分の家の台所の水で作った「団子」を、ご夫妻のそれぞれの先祖にお供えし、敬いの心で日々の感謝すること、お祝い事の時は、昔は赤飯を炊いて、ご先祖様にお供えして祝い事の報告していたが、この事を子供や孫たちに、伝える家庭がすくなく忘れられつつある。先祖が受け継ぎ残した事を大切に存続して行くことが、毎日健全に過ごすことが出来秘訣と感謝しています話され、輝いていました。私

の両親が口癖のように言われていた事は、人との触れ合いを大切にし、その人の言われる事に耳を傾けて聞く姿勢が一番大切であり、言われたことが解らなければ、相手に教えてもらうことも必要であると言われた。宮司を拝命して心が痛む思いです。

崇敬者の方々は年代によつて考えもそれぞれ異なり、会話をして行くうちにお互いの信頼関係が出来、神社の年中行事の紹介し、また参拝に来ていただくようにしています。また誰が参拝されても、境内の清掃はいつもと変わらぬように、神秘的な整然を保ち続け、今では、毎日崇敬者の方々が早朝より清掃奉仕に来られています。「皆さん毎日の清掃奉仕がありがとう御座います」と挨拶すると宮司さん今では家庭の始まりは、乃木神社境内の清掃奉仕から始まり、奉仕させていただき幸せですと生き生きしています。

山本有三の「路傍の石」の小説に「たった一人しかない自分、たった一度しかない人生を本当に生かさなかつたら、人間生まれてきたかいがないじゃないか」と書かれている文章を、若い参拝者の方々に話し、自分自身の将来への目標をしっかりと持ち、前進することの大切さ、目標が定まらない時は、ご両親の系図をしっかりと見つめていく事により自分への考えと目標が定まり、前進する事が出来、勉学に力が入り日々楽しく過ごし、精神的負担がなくなることをご両親と子供に話しています。

お守りを渡すだけでなく、参拝者と少しでも会話をすることに心掛け、ここ数年一度参拝した人が再び参拝にこられて、乃木將軍ご夫妻への遺徳に感謝され以前に参拝されたと
きよりも、明るくなり人としての道を歩かれているように思います。ただ乃木神社にお参
りしただけでなく、参拝してよかったという印象が伺えました。何かあるたび事に乃木將
軍家訓を思い出ししてもらい、先祖に手を合わせるように話をして、ほとんどの崇敬者は乃
木神社にお参りしてよかったと言われ、わずかですがと初穂料をおいていかれる人もいま
す。また数日たつてお供えに品物を送ってくる人もいます。

崇敬者での神社維持管理は、このようにして、人との出会い、触れ合いを大切にしてい
かなくては、参拝者も少なくなってしまうますが、今のところ色々と相談に來られる方々
があり、人に聞いたので乃木神社に來ましたと言われる人がほとんどですが、知人、友人
の紹介で來られる人もいます。一人でも多くの人と出会うように心掛け神明奉仕に勤め邁
進します。

(山口県 乃木神社 宮司)

祝詞の妙趣について

市来忠恕

私は菱刈町という田舎町の神社の宮司です。辞令を戴いてから丸四年になります。

大きな神社に奉職する神職と違い、私の場合は専ら出前の外祭ばかりで、やる事はコーデイナーター、シナリオライター、プロデューサー、ディレクター、スタッフ兼メッセンジャー、スタンドプレーヤーそしてマネジャーという七役を一手に引き受け一人でこなしております。さて、神主が神座に向って奏上するものを「祝詞」と呼んでおりますが、私はその都度、言霊やどる祝詞にしたい一心から個々の祭祀の祝詞を作っています。

神の命もちという言葉があります。私流に解釈すれば、「神さまと氏子をつなぐインターフェイス」これが神主。一方、お坊さんとは言えば衆生になり変わって煩惱を解き払ってくれ、時に衆生に法を説く。ここが神主と違う。そして決定的な違いは、神道にはお経のような決まり切った經典が存在しないと言う事です。お経の原語はサンスクリット語ですが、これが古代の中国に伝わって行き、そこで響きのよく似た漢字をあてはめて綴られ現

在のようなお経となったと聞いております。従つて本来は有意文字である漢字で綴られていても、漢字一字一字には意味が無い。聞いてもさっぱり解らない。一方、祝詞は、お祭りの由来や意義、それまでの経緯を適宜盛り込んで作ります。その意味で祝詞は、程度の差こそあれ、いずれもオリジナルなのです。祝詞は、古語混りの文語体が基本ですから口語体の現代文と同じように、聞いただけで理解できる人は恐らくいないでしょう。

祝詞では、生活のことを「たづき」と言い、職業のことを「わざ」とか「なりわい」とか言います。「生活豊かに立栄しめ給ひ」とか「負持つ職業に勤しみ励みて怠る事なく」というような文語体のフレーズがしばしば出てきますが、注意深く聞けばどんな内容かは概ねお解りいただける筈です。

私は祝詞を詠む時は何時も、後に居並ぶ皆さんには漏らさず聴いて戴きたいと願っております。祭りに参列する皆さんが関心を寄せようとせず、聞く気にもならない祝詞は価値が無いとも思っています。当初の二年間はいざ知らず、ようやく神主として町内に顔が知られるようになり、皆さんの声も私の耳に入ってくるようになりました。二、三の方から私の祝詞奏上は聞き取りやすくわかりやすいと言われました。私の場合、月に一度か二度のご奉公で、多い時でも数回を超えませんがこの期に及んで、ようやく日頃の心掛けが実

を結んだかなと思っています。

これがお経ならば決してこうはならないでしょう。因に各宗派共通とされている般若心経というのがあります。ここでちょっとやって見ましょう。観自在菩薩、行深般若波羅密多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄舍利子、空不異空、空不異色、色即是空、空即是色、受想行識、亦復如是……いかがでしょうか。中には内容のわからない方が有難みを感じるという方もいらつしやる様ですが、私には領きかねます。神主は仲執り持ち役というインターフェイスです。然れば、氏子あつての神社であり、お祭りであり、祝詞ではないかと私は考えています。葬儀の時詠む祝詞、即ち祭文がその典型でしょう。遺族や、生前の故人の事情を知らぬまま参列した人にとって何度聞いても解らぬお経と、そのために作られた大和言葉の祝詞と、どちらが当事者により満足して頂けるかと言えば、その答は明白です。

私は祭りの依頼があれば、必ず現場に足を運んで、ご本人から直接お話を聞いて祝詞を作ります。町内の小学校分校の地鎮祭を頼まれた時の話です。祭りを終えた途端に、先生らしき女性が近づき、いきなり「祝詞の言葉ってきれいなんですネ」と言われました。「是非譲ってほしい」と言われたので、内心気恥ずかしかったのですが、早速コピーして差し

上げました。こんな体験はこれまで数回ありますが、神主になって良かったなと思うのはこんな時です。どの辺が良かったのか推察するに、「町の南領山の壊星の里、此の学び舎に育ち行く児等約十名、年毎に増え行きもせず、減りもせず」というような処でしょう。「青垣の山四方に巡りて、真中貫く流れも清き川内川、水穂の原の眺め麗しこの処を、」これは私が祝詞の冒頭で使うフレーズの一つです。祝詞のどこに魅かれるかと言えば現代の社会象を如何にして文語体で表現するかという技巧もさる事ながら、その文語体自体の持ち味、「韻」と言われる、文章の初めや終りの言葉の響きと、七五調風のリズムにあるように思われます。そこで一首「祝詞なる言葉の響き、韻といふリズムが生める妙なる境地」今後も、言霊の歌、言葉の花束を目指し、より心に響く祝詞づくりに精進して行こうと思っています。ご静聴ありがとうございます。

(鹿兒島県 南方神社 宮司)

老人のつとめ

熊谷房重

昨年の朝日新聞の世論調査の「老後の暮らしについて」の中で「年をとって一人になった時、誰と暮らしたいか。」という質問に対して「子供と。」は四四パーセントで、これは平成五年の時の五八パーセントより大きく減っております。代わりに「自分一人で」「老人ホームなどの施設で」「友人と」の合計が三四パーセントから四六パーセントに増えているのであります。「老後を子供に頼りたくない。」という考え方が広まって来ているようであります。

次に「自分の老後と家族について」のところでは「家族が頼りになると思っている」のは六〇パーセントで、「あまり頼りにならない」という三五パーセントを大きく上回っている。一方、「家族を頼りにしたい」は三六パーセントに止まり「なるべく家族を頼りにしたくない」が六一パーセントであった。「家族が頼りになる」と考えている人でも半数以上は「頼りにしたくない」と答え、「家族に迷惑をかけたくない」という気持ちが強い事がわかり

ます。

さて、子供の方は「親の面倒を見る事について」どう考えているのか。「子供は誰でも親の老後の世話をするのが当たり前だ」は四三パーセント。「そうは思わない」が五二パーセント。男女別では「親の面倒を見たくない」男性は四九パーセント、女性は五四パーセントと、女性の方が「親の面倒を見たくない」と答えているのであります。さらに、結婚している主婦層になると五九パーセントと、実に六割の主婦は「親の面倒は見たくない」と言っております。こういう傾向は、だんだん進んで来ているようであります。

「親は、子供に面倒を見てもらいたくない。」「子供は親の面倒を見たくない」というわけであります。どちらの意見も一致しており、めでたし、めでたし、で良いのであります。うか。

何とわがま、で、身勝手な考え方でありましょうか。現在の日本人は、ここまで利個的になつてしまったのでしょうか。自分さえ良ければいい。家族や家庭の事などどうでもいい。今の自分の生活だけを大切にしたい。実にわがま、であります。

ところで人間が、一生かかってしなければならぬ第一のつとめは、育児、立派に子供を育てる事です。その第二は、養親、年老いた親を養うことであります。

そして、その第二の仕事、親を養うことをしないと、第一のつとめである子育ての方も、うまく行かないのであります。子供は夫婦二人だけでは立派に育たないのであります。祖父母や兄弟、親戚や隣人たちの協力が必要なのであります。家の中にあつては、親が祖父母を大切にし、祖父母は神・仏・御先祖様を大切にし、親もそれを見習う。そういう姿が子供が見て育つ事が大切なのであります。そして、祖父母に可愛がられたり、叱られたり、昔話を聞かされたり、たしなめられたりする事が、子育てには絶対に必要なのであります。そんな中で、子供の心は、魂は、健全に安らかに育って行くのであります。

やがて、祖父母は年老いて、床にいたり、死を迎えたりします。家の中に、死があり、死者の霊が家の中に同居する事を、体験として知る事が、子供の教育には絶対に必要なのであります。そして、死者のまなざし、御先祖様の目が、常に自分たちに注がれている事を身を以て体験して育つ事が大切なのであります。

それをまあ、いまどきの若い者だけでなく、今どきのお年寄りたちの、無責任で身勝手さには驚いてしまいます。「若い者と同居するとわずらわしくてしょうがない。」「孫の面倒を見るのは疲れる。」「それより何か遊び事をしたり、自由に旅行をしたり、老後を楽しく過ごしたい。」などと言つて、若い者と同居をしない。そんな老人が多く、年寄りの一

人暮らし、二人暮らしの家が、最近増えてきております。

実際の生活の中にわずらわしさがあるのは当たり前です。気まずい思いをしたり、激しい言い合いをしたり、いやな事があるのは当然であります。それが生きるといふ事なのであります。三十年ほどの世代のちがう息子や嫁と、また、五、六十年も歳のちがう孫たちと、いつも面白おかしく、楽しい生活ができるはずがありません。そういうわずらわしい家の中にあって、祖父母としてのつとめをきちんと果す責任があるのです。責任を果す事は大変な努力を要する事であります。だから、それから逃げて、無責任なお年寄りが多いため、現在の社会がこんなに悪くなってしまったのだと、私は思うのであります。責任は年長者が取るべきであります。

世の中を良くするためには、何もかもを経験し知っているお年寄りが、しっかりとその役目を果す以外にはないのであります。

お年寄りのつとめは、若い者の教育をする事であります。若い者に苦勞をさせ鍛えてやる事であります。樂をさせてやる、甘やかす事ではありません。

年寄りには時代遅れだ。科学の進歩や社会の変化について行けない。だから。だから。年寄りには価値があるのです。社会の進歩をじゃまするから、ねうちがあるのです。

そういう発想の転換が、今、必要なのであります。科学が進歩する事が、社会が変化する事が、すべて良い事ではない、という事を、私たちは、この戦後五十年で学んだはずであります。

夜を明るくして、夜中まで働いたり遊んだりする事が、人間にとって本当に良い事でありましょうか。便利になる事が、急ぐことが、たくさん品物がある事が、そんなに良い事でありましょうか。こういう、いたずらな社会の進歩に待ったをかけるお年寄りが、今、必要なのであります。

老人は、村の社会にあつて長老として村の祭の世話役をしたり、郷土に伝わる食文化の伝承をさせたり、私たちのずっと昔の御先祖たちから伝えられて来た事を、次の世代に伝える責任があります。貴重な日本の伝承文化を自分たちの世代で絶やしてしまつて、将来の子孫たちに申し訳が立つのでありませんか。

家庭にあつては、無理にでも若い者と同居して、家の祭や行事をきちんと伝えて下さい。敬神崇祖の日本の心を子供や孫に、季節の行事を通して、身を以って体験させて、身に付けさせて伝えて下さい。姑から教わった我家の味を、嫁に教えてやって、作らせて、伝えて下さい。

それから、寝た切りになつても、年寄りには家の中に居るだけで役に立っている、という事を自覚しておいてほしいと思います。生きてそこにいることで子供に孝行というものをさせてやっているのです。子供に苦勞をかけて申し訳ないとか、苦勞をしてかわいそうだとか、思うでしょうが、そんな苦勞をするから、他のいろいろな事がうまく行く、という事が多いのです。若夫婦も子供たちも、家族が協力しながら老人に氣を使うから、夫婦のいさかきも少なくなり、子供の非行もなくなるのであります。お年寄りというものは若い者と同居しておれば、家の中に居るだけで、何もしなくても、役に立っているのです。

老人というものは、人間の社会にあつて、大切な役目を持つておる身であり、家庭においても必要とされる存在である事を、どうか、自覚してほしいと思います。

(福岡県 八幡古表神社 宮司)

受け継がれるもの

黒田明司

私は、昨年十月十四日から十七日まで、神宮で最も大切なおまつりと言われる、外宮での神嘗祭に奉仕して参りました。

実はこの神宮奉仕の話は二十年ほど前にも神社庁からありましたが、どうしても都合がつかず、お断りした経緯があります。今度機会を逃したらもうないと思いました。

かつて、私が子供のころ里の父が奉仕したことがあります。お伊勢さんのお土産だといって、白木の御敷にのった、干しアワビにスルメを見せてくれました。子供心にお伊勢さんの祭りってどんな祭りだろうかと思いついていました。

四山神社の宮司も若いころ奉仕しました。里の兄も数年前に奉仕しました。秋祭りで忙しい時期ではありましたがどうしても行きたいと思い、何とか都合しましてその機会に恵まれました。

外宮の神嘗祭では、十月十五日午後十時由貴夕大御饌（ゆきのゆうべのおおみけ）祭が

行われます。

瑞垣御門内の広い神前は深い深い闇に包まれ、かすかに鳥の鳴き声が聞こえます。ちろちろ燃える篝火に御正殿のお屋根が大きく浮かび上がっています。神楽歌が静かに響き渡る中、御正殿階下に設けられた神饌案にはまづお箸、鯛や鮑や餅に果物そしてお酒は白酒、黒酒、醴酒、清酒など約三十品目の神饌がお供えされます。

十六日の午前二時、由貴朝大御饌（ゆきのあしたのおおみけ）祭も同じように大御饌が供進されます。殆ど徹夜の祭りですが一つ大事な所が違います。それは夕御饌から朝御饌にかけてお米が旧穀から新穀に切り替わり稲霊の更新通じて新しい年を迎え、神と人が共に新たな生命を蘇るということです。御殿の飾り付けを始め祭器、装束に至るまですべて新しくして大神様の更なる御神徳戴くという最も大切なお祭りで「神嘗正月」と呼ばれています。

夜が明けて十六日正午、「奉幣の儀」が斎行されました。定刻、斎館の前庭より天皇陛下の幣帛を納めた辛櫃を先頭に、勅使が進まれ、続いて祭主であられる今上陛下のお姉様の池田厚子様、続いて皇族縁の北白川大宮司以下神職、私達奉仕神職が進みました。その光景はまさに天皇陛下・皇室の祭りであることを目の当たりに見る思いでした。

二の鳥居で修祓の儀があり、御正殿前の外玉垣御門御垣内の四丈殿という所から、勅使の方は中重という内玉垣の外に着されました。私達はさらに内玉垣御門を通り更に瑞垣御門内の内院まで進みました。一地方の神主がこんな奥まで入って来てよいものだろうかと思ふ不思議な時間でした。御正殿のすぐ近く拳大の石の上に畳表が敷かれた上に着座しました。

お白石が敷き詰められた神域に神殿は回りの緑と調和してお屋根の金具は輝くばかりで、祭主様のお姿は御鎮座当時の倭姫命様そのままを思わせます。

静かに神樂歌が流れる中、大宮司様と少宮司様が御鑰を捧げてご正殿の大床御扉の前に進まれました。これから御扉が開かれると思ひ、じいーっと見つめていました。すると、神様の御光が全身に浴びられるよな、又、あー神主でよかったなという思ひ。そしてここは特別な席であること。そのほか色んな思ひが一度に込み上げて来ました。何だか私は涙が出てしまいました。拭う間もなく笏拍子の合図で低頭、しばらくの間頭を下げました。

何時しか涙は乾き勅使の御祭文奏上。大宮司祝詞奏上。そして殿内に幣帛が奉納され太玉串奉典、八度拝という作法でお参りました。終わって、改服の時「私は涙がでました」

と仲間の長崎県の神主さんに話しかけましたら、「私も出た」と答えました。御扉開扉の時は私ばかりでなく、涙が出るほど人を感動させる何とも言えない神様のお力があると思いました。

そんな思いもつかの間、心密かに待ち望んだ直会です。お酒は白酒か黒酒かさては醴酒か清酒か楽しみです。祢宜さんの労いの言葉を賜り乾杯しました。お膳が二つあります。一つはお土産用です。白木の御敷には土焼きの皿に干しエビ、干しいか、昆布さらには、アワビに餅がのっています。

私が子供の頃父がお伊勢さんのおみやげだよ、といって見せてくれたものと同じ物でした。四十年間思い続けて来たことが目の前にあり、私は親父と同じ体験ができた事を実感し、本当に嬉しく思いました。あのお土産には感動的なお祭りの体験があったことを改めて思いました。

暫く歓談しながらお神酒を戴いてすっかりいい気分になりました。酔いもさめやらぬうちに神嘗祭だけに奉仕される御神楽奉仕に参列しました。

神嘗祭この祭りは、最も大切な祭りで、「斎庭の稲穂」の神勅、大神様の御鎮座に由来し、古くて常に新しい生命の蘇りの祭りです。古い時代にあつては神嘗祭のたびごとに祭場や

神殿を改めたと言われています。そして二十年に一度、神殿や御神宝の全てを一新して古宮にて宵の大御饌をお供えしてから遷御を行い、新宮にて暁の大御饌をお供えする今日の式年遷宮に繋がる大切な祭りでございます。

（熊本県 四山神社 祢宜）

郷土芸能の意義（太鼓踊りを通して）

中 木 屋 豊

今日の前夜祭でのお勤めご苦勞様です。特に太鼓踊りの皆様お疲れ様でした。また明日の本祭もよろしくお願いいたします。さて氏子の皆さん、改めてこの南方神社の「太鼓踊り」の意義を考えてみたいと思います

この暑い八月、鹿児島県内各地の「諏訪神社」を中心に「太鼓踊り」の奉納が行われます。今「諏訪神社」と申しました。ここは、「南方神社」です。実は諏訪神社の神様を建御名方神と申し上げます。建は美称、冠称と申しますか、ご祭神の名前で呼ばれる同系の神社なのです。南の文字が当てられているので、「みなかた」が正しい呼び名なのですが、「みなみかた」と呼ぶところも少なくありません。ちなみに県内の諏訪神社の系統は百社、うち南方は六四社あります。ではなぜ諏訪神社、南方神社に「太鼓踊り」が受け継がれているのでしょうか。そもそも諏訪神社は「武の神」として薩摩藩主島津家の篤い崇敬を集めました。伝えられる踊りの起源には、約五百年程前の島津日新公（忠良公）が加世田城

を攻略したことを祝つてとか、慶長の役（島津義弘公）の戦勝を祝つてなど、その関係が伝えられています。しかし、武士が踊ることはなく、あくまで「太鼓踊り」は農民の踊りでした。島津家は、諏訪神社が田畑をたくさん所有することを認めたり、寄進を行いました。その田畑の耕作を「門」（二、三十人が一箇所に住む）に任せて上納米で祭祀を行い、維持管理をさせていました。「門」はいくつもの集落に点在していましたので、集落ごとの産土神社的な性格ではありませんでした。たとえば、隣の吉利南方神社は、北区・南区・中区の三年に一度とか、吹上町では六つの地区の輪番制になっているなど、その証だと考えられます。しかも、同じ神社に奉納される踊りなのに、地区で特徴があつて同じでないことに、興がそそられます。

しかし、太鼓踊りの構成は、概ね同じものになっています。まず中打ちと呼ばれる鉦を持つ四人の少年たちが、頭に造花で飾った花笠を付けること、平打ちと呼ばれる人数も二十人くらいです。それらの服装やヤバタが、微妙に違っていて、勇壮さや優美さの違いになつて踊りに現れてくるのです。

さて、優美優雅な中打ち、華麗勇壮な平打ちで構成される「太鼓踊り」の目的は何でしょう。何を願つて踊られるのでしょうか。もちろん、繁忙で厳しい農作業の合間の、束の間の

娯楽の意味合いがあることは、否定しません。しかし、大切な役割が果たされてきたからこそ、今日まで営々と受け継がれてきたのではないのでしょうか。今一度考えて見ましょう。市来の大里にははつきり「虫追い踊り」と、名前が付いています。八月のこの時期、田畑に病害虫が広がっては困ります。疫病が里中にはやっても大変です。そこで純粹無垢な少年に神が宿る、稚児神的中打ち、平打ちが背負う色とりどりのヤバタに御神威が宿るから、疫病は起きない、田畑の病害虫もいなくなる。絶大な信仰があつて、伝統が守られてきたのだと考えます。

全国の神社で、春には五穀の豊穰を願つて、祈年祭が執り行われます。田植え前の伝統行事が残っているところも、少なくありません。この地区では六月の、「せつぺとべ」があります。田んぼの神様や精霊の、活発な活動を願つての踊りです。笹踊り、棒踊り、鎌踊りの奉納が、「せつぺとべ」を彩ります。「踊り」とは、飛んで跳ねる仕種を言います。衝撃を与えることによって、神霊などの活動を増進させる「御霊振り」と呼ばれるものです。秋の十五夜には、今でも綱引き行事が残っています。綱引きの後それを土俵にして相撲を取ります。十五夜の頃はいわゆる台風の時期に当たっています。せつかく実ろうとしている米が、被害にあつてはなりません。藁で作った綱は、竜を表しているのです。竜が

暴れないよう、風雨が強くならないように願って、水神を鎮めるための「舞」、つまり「すまい」が変化した「相撲」を取ります。相撲の基本が摺り足と言われるように「舞」は摺り足の動作を言います。「鎮魂」「御霊鎮め」の意味があるのです。時に御霊鎮めをしたり、御霊振りをして、合わせて「舞踊」と言いますが、すべて「米」を中心に、農作物の豊穰を心から願う・祈る郷土芸能として、受け継がれてきたのです。

重いヤバタや太鼓を担って、一日中踊るのは大変難儀です。しかし、豊かな収穫や、里の人たちの健康を約束させる、その役割は大切に重要、何より神聖なものです。ヤバタや衣装を作ったり、踊りの指導、支えてくださるたくさんの人たちの、物心両面での協力や支援が集まって、この行事が受け継がれてきていることに、自信と誇りを持ってください。これまで培ってきた、体力・気力が明日の本番でしっかり発揮できることを信じます。

（鹿児島県 稻荷神社 宮司）

祓いについて

川崎 太久美

今日は祓い清めとそれに使うものについて、ごく簡単にお話し致したいと存じます。

皆様方が神社に正式参拝なさいますと、神職が祓詞を奏上したあと、大幣で皆様方の罪や穢を祓い清めます。

ところが、神社以外のところでは、他にもいろいろなやり方で祓い清めをとり行っております。

たとえば、家を新築するときの棟上げの儀式では餅撒きをする習わしがありますが、これは単にお祝いだから餅を撒くというのではなくありません。また、神様にお供えした餅を撒いて与えるというわけでもありません。

棟上げでは、大工の棟梁は御幣を切って棟の中央に立て、その前に、米や鏡餅・御神酒や掛魚・取り肴や箱に詰めた小餅などを供え、北東・南東・南西・北西の四隅には四方の神に隅餅を供え、中央の御幣の前で唱え詞を奏上し、柏手を打ち、御幣を振って祓い清め

ると、箱に入った小餅を鬼門角といわれる北東の方角から南東・南西・北西の角の方に順次撒きます。これは餅によつて、罪や穢、悪霊を祓い清めて、この新築の家が清浄で、神の恵みを得て、災いがないようにとの願いを込めてとり行う祓い清めの儀式なのです。

また、新築された家の落成式や竣工祭などでは、米や切幣などで神職が各部屋ごとに祓い清めてまわります。

春の節分には神社はもとより、大方どの家でも豆を撒いて、悪の代表としての鬼を追いつ出すために、祓い清めの行事をとり行います。

家を建てる前の地鎮祭や起工祭では、米や塩・酒・切幣などによつてそのところを祓い清めます。

このように祓いと祓いに用いるものは、そのときどきによつて、いろいろと変わってきますが、世の中で、ごく普通に行われている祓い清めに用いるものとしては、塩によるものが一番多いと思います。

たとえば、家に訪れた者と喧嘩になり、あと味の悪い思いをするときなど、喧嘩の相手が帰ったあと、「塩を撒け」と言つて玄関先や門のところに塩を撒く風習がありますが、あれは、塩によつて、罪・穢を祓い清め、清浄な姿を取り戻そうとするやり方なのです。

玄関先と言え、飲食店や料理屋の店先には盛り塩をしてあるのをよく見かけます。あれなども塩の力によって、罪や穢を払い除けようとする祓い清めのための方法だと思ひます。

また、角力界の関取りは、土俵に上がるたびごとに、塩を撒き土俵の上を祓い清めると同時に、塩をちよつと舌尖で嘗めて、自分自身の穢をも祓い清めております。

穢というのは清浄ではない不浄のものをいうのと同時に、その他に「氣が枯れる」という意味をも含んでおります。「氣」というのは「氣持ち」という場合の「氣」という字です。「色氣」を「色氣」とはいいません。その他にも「氣色ばむ」など「氣」を「氣」と読む場合は多いのです。

ところで、土俵にあがつた力士が相手に向うときに「氣」つまり「氣」が枯れて、しばらくしては初めから勝ち目はありません。何としてでも相手に勝つためには、生気を蘇らせ、生気に満ち溢れた状態で相手に向わなければなりません。そのために塩を撒き、塩を舐め、塩の力によって生気を蘇らせるのです。

正月に海から潮水を汲んで来て、その潮水によって罪や穢を祓い清め、今年の無事を祈る行事があります。これはまさしく海の塩の持つ力によって、「氣が枯れ」たのを、年の

始めに蘇らせたいという願いを込めた正月行事で「若潮とり」と呼んでおります。

私の祖父は、夏の土用のうちに海に浸っておくと冬になって風邪をひかないという言い伝えがあるといって、必ず毎年海水を浴びるために海まで出かけておりました。これも、若潮とりと同じように塩によって罪や穢を祓い清め、生気を蘇らせて、万病の元といわれる風邪や災いを払いのけようとする祓い清めの方法であつたと思います。

この陸上のすべての生きものは、もとはと言えば海の中から生み出されたものです。それが陸にあがり、いろいろな種類の生きものに分かれ、進化して来たのです。したがってこの地上の生命の起源の根本は海にあるのです。海の潮は生命を生み出した根幹なのです。我が国には日本古来の、日本国有の神道と神の教えがあります。イザナギノミコトが、イザナミノミコトの穢に触れて海の潮で禊をし、穢を祓い清めなされたという神の教えがあるのです。

私が一日と十五日の月次祭に神前にお供えした塩をお分け致しますと、皆様競ってお持ち帰りになります。

皆様方も氏神様にお参りになったときには、遠慮せずに神様に供えた塩を分けていただき、その塩によって、日ごろ心せずも犯した罪や穢を祓い清めて生気を蘇らせ、清らかで

生き生きとした無病息災の日々を送っていただきたいと存じます。

(佐賀県 福富神社 宮司)

夏期御霊祭にて

芦原高穂

本日はご参列ご苦勞様でした。

本日資料として差し上げました中に、神社の社報『かがみ七九号』と顕勲神社奉賛会会報『いさおし』を同封させていただきました。この『いさおし』の中でご紹介させていただいておりましたが、日本政策研修センター主任研究員の岡田幹彦氏は北海道深川市のお生まれで、主に明治時代の人物を中心に研究されている方であり、この中では、乃木希典をテーマとして、昨年出版された本をご紹介させていただきました。

乃木希典といいますと、日露戦争の旅順攻略戦、司馬遼太郎の『坂の上の雲』という本で戦争下手とか愚かな將軍というイメージが定着した感がありますが、こうした印象は不当な物であるという主張を根拠を示しながら展開していて、明治の気概という物を示している本であります。この中の一説を引用して紹介させていただいております。

『乃木希典』

一一九頁

乃木の苦衷と静子の祈り

日露戦争において、第三軍を指揮し、旅順港を攻略のため二回にわたる総攻撃でも成果を上げることが出来ず、非難の声が国内に満ちあふれました。総司令官の机には非難の手紙が山と積まれたといひます。そうした中で静子夫人のことが紹介されています。

乃木への非難に誰よりも心を苦しめたのは妻の静子であった。第三回総攻撃がまもなく始まろうとしていた十一月十七日の朝の事である。静子は自邸の二階に上がって窓を開けたとき、ちょうど一人の将校が、門前に立ち止まっていた。するとその軍人は二階の静子を見つめてどなった。

「乃木のノロマめ、何をまごついているのか。我々が兵隊を作つてやれば端から殺してしまう。それで自分は侍だと豪語しながら今に生存してゐるではないか。もし眞の武士であるなら、我々に申し訳のために潔く切腹するがよい。(云々)」

聞くに堪へ難い痛罵であつた。静子はあまりの暴言に胸を痛め終日何も食べず日が暮れるのを待った。夕方静子はかつて乃木家で長らく女中として働き、今は結婚して近くに住んでいたものを招き、同行を頼み地味な着物で目立たぬようにひっそりと三等車に乗り伊勢へ向かった。

翌日宇治山田に着くやすぐさま内宮に参り、頭から水をかぶり身を清めて神前にひざまずき、一心に神威を以て旅順を陥落させたまへと祈願したのである。それは命がけの祈りであつた。

何十分を経過したであろうか、ひたすら祈り続けていると何時しかうつとりした心地になつた。その時涼しい声を聞いた。

「汝の願望を叶えてやるが、最愛の二子を取り上げるぞ」この声を聞いて静子は正気に復した。静子はさらに「二子のみでなく、私ども夫婦の命も差し上げます。どうぞ旅順だけは取らせてくださいませ」と哀願した。

長男の勝典はすでに五月、戦死していた。次男の保典は第三軍に所属していたが、十一月三十日、二〇三高地の戦いで戦死した。この時乃木と親しかつた陸軍大臣の寺内正毅が乃木邸を訪れて保典の戦死を報告した。

すると静子はこう言つた。「よく死んでくれました。之で世間の母人方に申訳が立ちます。」寺内は哑然たる面持ちで慰めの言葉を失つた。後に静子は「私の心願が神明に通じ、畏くも天照皇大神宮様がまさしく御神託を授け給うたものと確信します。」といっている。

乃木も又保典の戦死を部下より報告されたとき、「よく戦死してくれた、之で世間に申

し訳が立つ。よく死んでくれた」と言つた。

愛する子供の戦死に対して、こういわざるを得なかつた乃木と静子の心を思うべきである。

戦後の平和を享受する現代にあつてこの様な心模様は如何とも理解しがたいものがある反面、大切なものを賭けて戦つた歴史の厳しい一面をかいま見る如く、國を護る切実さが伝わり、連綿とした歴史の重みを感じさせられます。

しかし、晩年この二人の戦死に対し

咲くことをなぞいそぎけむ今更に

ちるを惜しとも思ふ今日かな

「よく死んでくれた」と言いつつも、一人の親としての悲しみが伝わってきます。

しかし、乃木將軍の偉大さに学ぶ時、忘れてならないのが、明治四十年から明治天皇の御信任により学習院院長として、昭和天皇はじめ皇族方の子弟の教育に渾身の力を振り絞られた事であります。

明治天皇より「二人子息を失つたが、かわりに多くの子供を授けよう」と仰せに恐懼してこの要職を拝受したのでありました。

その姿勢は正に『質実剛健』であり、特に後の昭和天皇である裕仁親王殿下には、厳しくしかし慈愛に満ちた姿勢で接し、昭和天皇をして、「私の人格形成にもっとも影響のあったのは、乃木希典学習院長であった」と申されたほどでした。

そうして成長された昭和天皇は後に大東亜戦争の敗戦で、食糧難にあえいでいた国民の為に、占領軍総司令官を御自ら訪ねられ、飢餓に苦しむ国民を救うべく身を賭しての交渉に望まれ、めでたく食料の援助を勝ち得たのみならず、マッカーサー將軍との厚い信頼感から、我が国の伝統文化の根幹である天皇制の存続につながり、全国巡幸を通して全国を駆けめぐり、敗戦に打ちひしがれた国民を励まし復興へのきっかけとなられた事は、皆さんのご承知の事ではありますが、その御聖徳の根底に流れているのは正に乃木の、功績そのものではないかと拝察する次第であります。

さて、最近八木秀次高崎経済大学教授が監修して、小学館から出版された本に『尋常小学校修身書』という本があります。この中にも、乃木さんのお母さんの事が掲載されておりまして、幼少の頃の乃木さんが好き嫌いを言う、食べるまで同じ物を食事に出したそうです、ただそれだけでは、単なるいじめでしかありませんが、家中のものが同じ物を食べたと言います。

御蔭で好き嫌いが無くなり、健康な男子に成長することが出来たのであります。

家庭教育の重要性を示すエピソードではないかと思ひます。

こうした厳しい躰をともなう家庭教育が、実は歴史の大きな転換期に、その潜在力となつて、我が国を救つてきたことを教えられたような気がしてなりません。

私はこの春まで、旭川中学校のPTA会長をつとめ、最後の卒業式の祝辞を述べる機会に恵まれました。

その中で、国際化が進む中で近隣諸国との交流も進んでくる訳ですが、特に韓国、中国、台湾との交流は盛んになってきています。

しかし、これらの国に共通していて我が国にないものがあります。

それは、一八歳から二十歳くらいにかけて兵役の義務があると言う事です。制度の是非はともかく、この年になったら全ての青年が軍事教練を通じて肉体的にも精神的にも鍛えられてくると言う事です。

その事をふまえ、皆さんも今後の学校生活の中で何ら目標や指針を持たない無気力な生活を送ることなく、進んで自らを鍛えそしてこれまで以上に大いなる学習への意欲を持たなければ、隣国の青年に接する機会に出会ったとき真の交流や友情を深める事は出来ない

ばかりか、在らぬ侮りや侮蔑を受けたり軽んじられたりする事は目に見えているのです。というようなことを申し上げましたが、そうした人材育成の原点が家庭であることを認識し、敬神崇祖と儉約、鍛錬、学習の精神は、社会人としての心構えとして大切な宝になることと心得ます。

本日の御霊祭を通じて改めて見直し聞き直す機会にしたいと存じます。

以上をもちまして、夏期御霊祭を終了いたします。ご苦勞様でした。

(北海道 旭川神社 宮司)

神武のもとに就くところ

波多野 學

俗に釣師のことを太公望と申します。私も早春の芽茸ふきの中に鶯うぐすの谷渡る声を聴き、初夏新緑に不如帰ほととぎすの遠く近く高鳴くを聞き、錦秋の紅葉もみぢに、又積雪の静寂の中、溪流に竿を振る、『莊子』の云ふ「魚を釣りて閒處する」太公望です。一本の釣竿を友として風月を楽しむ、「一竿の風月」『陸游』、世俗を離れて山水の間に高尚なる生活を送る、「一壑いちがくに漁釣ぎょちうし一丘いっきゆうに栖遲せいちする」『漢書』ことを望み、竿一本、独り静かに懷ひを廻らす風情を求めてやまないであります。

儲光羲しよこうぎは「春深く杏花きやうくわ乱れ、釣を垂る緑湾の春」(春爛漫、杏の花が咲き乱れた緑陰の入江で釣糸を垂れ、一層懷ひを深くする)と詩ひ、柳宗元りゅうそうげんは「孤舟蓑笠さかさの翁おきな、獨り寒江の雪に釣る」(独り寒江の雪の中、小舟一槽蓑笠みのかさを被り、釣糸を垂れ國を懷ふ)と詩ひました。

釣の心「釣心ちようしん」と云ふ言葉がありますが、この言葉は釣果ちようくわを求める釣人の気持ちではな

いのです。張志和が「江湖に居りて自ら烟波釣徒」と称したやうに、太公望が周の文王に「太公子を望むこと久し」と云はしめたやうに、釣心とは國を懷ふ心を云ふのであります。太公望は姓を姜、字を子牙、氏を呂、名を尚と云ひ、その兵書『六韜』によれば、匈奴に父母を殺され國を追はれ、渭水に鉤もつけず釣糸を垂れ、懷ふは國の再興でありました。やがて文王に望み用ゐられ、武王を助け殷を討ち、終には齊の國を再興した、齊二十九代の始祖、「武の精神」を奮ひ興した聖王であります。

平成六年七月、靖國神社、大野俊康宮司様のもとで、第十回全国神道講演大会が開かれました。私は御國の為に尊ひ命を捧げられた御英靈の前で、文弱日本の威義を正す正氣、武の精神を奮ひ興す「奮武」あるのものと「神武のもとに就くところ」を固く誓ひました。この霧島の峰、高千補の峰の高山は天孫降臨の聖地であります。苟くも天孫降臨の神、瓊々杵尊が祀られます、この霧島神宮で第十八回全国神道講演大会が開かれた佑啓、神様のお導きに感激一入であります。

瓊々杵尊は皇祖天照大御神の

豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は、是吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫、就きて治せ。行矣。寶祚の隆へまさむこと、當に天壤の與、窮りなかるべし。

との「天壤無窮」の神勅を身に體し、降臨されたのであります。

御皇孫神倭磐余彦尊、即ち神武天皇は、この天業を恢め弘べむと「天業恢弘」の勅を發し東征。六合の中心大和の橿原の宮に肇國の歴史を開かれました。

神武天皇は、二十八代とも云はれる彌生時代の鵜萱葺不合朝、更には遠く一万年以上の往昔、縄文時代にまで、日本民族の靈統を懷ひ偲ばれたことでありませう。勅にもありますやうに遠い遠いご祖先に倣ひ、これからの日本の國、日本民族を無窮に繁榮させてゆかねばならぬ、重責を擔つての肇國でありました。

初代天皇様の御名が何故に「神武」なのでせうか。それは背にご神統の神威を負ふて國を守り通す、固い決意を意味してゐます。

本来國と云ふ字は、囲ひの中に「武」と書きます。「武」とは戈を止めると書いてゐます。敵なす者の戈を止め、民族を守るのが國と云ふ字です。石井壽夫先生の言葉を借りるならば「神州、嚴として神州たり」の武の精神なのです。佐古幸嬰先生の母校、山口國學院の幟に掲げられてゐた「五条の教へ畏みて」「神武の昔に還れ」であります。

民族を守る大東亜の戦ひ終つて五十七年。今日日本は文弱の徒となりさがつてゐます。世界からますらをの武の精神なき、亡國の民とまでさげすまれてゐます。祖國を愛する、國

を守る武の精神がこつぱりと抜け落ちてゐます。

日本は神ながら、武の精神をもつて、陛下のもと、悠久の歴史をきづき栄へてきた揺ぎない民族でした。

世界に比類のない、連綿と続く、神武天皇肇國百二十五代の永々ときづかれた歴史をふりかへり、「奮武」あるのみです。神武のもとに就かねばなりません。

千早振る神のひらきし道をまた　ひらくは人の力なりけり（明治天皇御製）

益良雄の悲しき命つまかさね　つまかさねして守る大和島根を（三井甲之助先生）
幾そたびかきにごしてもすみかへる　水や御國の姿なるらむ（八田知紀先生）

さあ、神武のもとに就くところで、すみかへった御國にいたしませう。

（福岡県　高見神社　宮司）

霧島山に住む仙人

堀 康弘

霧島は昭和九年三月日本で最初に国立公園に指定されました。主峰高千穂峯を中心として二三座の典型的な群状火山と、俗に四十八池しじゅうはつちといわれる大小無数の湖沼こしやうがあり、コニーデ型、ホマーテ型、トロイデ型と、いろいろな火山がそびえ立つ中に、満々と蒼色あおいろの水をたたえる湖沼こしやうの美がさらに神秘しんぴさを加え、緑林りょりん、赤松林の中から白い湯煙りたなびく情景など、その恵まれた景觀、自然美は世界でもまれであるといわれております。このすばらしい環境は、同時に霧島神宮を中心とした神域でもあり、古来より南九州の人々にとって信仰の対象であり心のよりどころでもありました。この霧島山には、以前から仙人の話が伝えられております。「仙人」とは広辞苑によりますと、人間界を離れて山中に住み穀食を避けて、不老不死の法を修めて、人知でははかり知ることのできない神変自在の法術を有するという人と書かれております。昭和三年に刊行されました、宮地巖夫みやじいづおの書いた「本朝神仙記伝」の中の雲居官蔵うんきょくわんざうによりますと、雲居官蔵は日向国霧島山に住む仙人でありま

す。元は鹿兒島藩侯に仕える武士平瀬新右衛門の三番目の子で、その名を平瀬勘兵衛紀武乗と呼びました。出世できないことに不満を持つて、世間を捨ててこの霧島山に隠れてしまいました。数十年がたつて勘兵衛がこの山に居ることを親族の者が聞きつけ、甥の得能武左衛門という人が、はるばる霧島山に分け入つて数日尋ね歩いた末に、漸やく巡り逢うことができました。その姿たるや、身には木の葉の衣をまとい、髪とひげはのびほうだいでも人とは思われませんでした。武左衛門は言葉をかけて、今一度世間に帰つて来るように説得をいたしましたが聞き入れてもらえません。それどころか勘兵衛は「世間を逃れてから長い間仙道を求めて修練を重ねて来た。近頃は仙術もようやく身につけて名前も雲居官蔵と改めた。今となつては、人に会うことは甚く我道の妨げとなる。ましては再び世間に出ることなど考えてもないことである。今後は如何なることがあつても尋ねて来るな」と言い残してその場を走り去つてしまいました。武左衛門はしかたなく山を下りて行きました。その後はこの山奥に分け入つて尋ねて来るものは誰一人として無かつたということでした。この雲居官蔵が山に隠れた時が元禄十六年（一七〇三）八月二十四日のことで、この時三十一歳であつたということですから、武左衛門が尋ねて来た天明年間はすでに百十余歳であつたということになります。その歩き方は至つて健やかで、老いて

いるとも若いとも知れず、このあたりの人々は、山々を自由に飛び廻り仙術を使う雲居官蔵を、仙人であると敬っていました。時代はやがて明治の御世になりました。豊後の国杵築の藩士河野久（このの ひさし）という人が、大阪蔵屋敷に勤務している時に、感ずる所があつて明治六年より仙術の修練を志して、葛城山（かつらぎやま）に入りました。照道大寿真君（しょうどうだいじゅしんくん）という方に師事することができたので、奥吉野に住みながら教えを受けて修練を重ね、名前も至道寿人（しどうじゅじん）と改めました。その後もしばしば奥吉野に通つておりましたが、ついに照道大寿真君が天に昇られて行く日が来てしまいました。明治九年七月七日の夜、全国の名山の仙人（地仙）十三方が見送りのために奥吉野の山中に集合されました。十三方の仙人の中に霧島山に住む雲居少寿真が居ることがわかると、至道寿人は近寄つていつて、「神仙学を学びたいので道の教をいただきたい」とお願いしましたが、雲居少寿真は「私はいまだに充分ではないので教えられない」と断られてしまいました。このことが至道寿人の書いた書物に残されていることから、平瀬勘兵は道を得て雲居少寿真となり長生きをして、今もなお霧島山中に住んでいると思われます。この他にも霧島山六女仙（むくじょせん）も伝えられておりまして、霊山である霧島山すべてが仙境として、仙人をも育（はぐ）むほどのすばらしい環境が霧島の大自然なのであります。小鳥のさえずりは、春を訪ねて散策する旅人を楽しませ、夏は緑したたる樹林海（じゅりんかい）、木の間

を縫う風のそよぎに森林浴を楽しみ、ミヤマキリシマ、ハルリンドウの花は山路を飾り、ナナカマド、コハウチワカエデ、ヤマウルシなど紅葉する秋。赤や黄に染められた美しさはまた格別であります。冬を代表するのは、樹氷林の白銀の輝きでありましょう。風の音も陽の光りと響き合いますばらしいメロディーをかなでます。このように四季おりおりの自然が息づく霧島山は、訪れた皆様方を靈氣と安らぎの中に誘い込んでくれるでしょう。この霧島神宮に参拝されました後は、霧島を十二分に堪能^{たんのう}して帰っていただきたいと思います。

(鹿児島県 霧島神宮 権祐宜)

神職として氏子崇敬者に学ぶこと

青木信市

私は御縁を戴き、この天孫降臨の聖地高千穂の峯の麓の霧島神宮に御奉仕し、皆様から多くの事を学ばせて戴いております。御参拝に毎日多くの方々が来られますが、本日は御社頭にて体験致しました中から、學んだ二つの事をお話しさせて戴きます。

ある日の昼前のこと、境内の座頭馬場付近で、皆様がお参りされる処から見ますと、お札場（授与所）からすぐ下の処になりますが、身なりの良い紳士風の方が、何かそわそわした動作をされ、もしやこれかと思ひ「もしトイレでしたらこちらですよ。」と声を掛けましたが、ロープ（柵）を跨ぎ五、六歩入った処で、用を足してしまった。御本人に「神宮にとって神聖な場所ですので、今後はされなくて下さいね。」と気軽に声をかけたつもりだが、紅潮した顔で、「何処にしたらいけないと書いてあるんだ。人がわざわざ入ってやっているのに何が悪いのか。」と怒鳴り、こちらが「そうです。ここではいけません。」と言った事に気が収まらず、こちらの物の言い方を含め苦情を呈した方がおられました。

もう一つの話は神宮に犬を連れ散策に来られた御夫婦です。先ず、当神宮の手水舎で柄杓の口を愛犬に直接充てて飲ませた後、参拝せず周りを眺めておられた時、放し飼ひした愛犬が勅使殿下の階段で糞をしたのである。すると、その御婦人が気付くと慌てる様子も無く自然に袋を取り出して片付けされました。たまたまこちらがそれらを見ましたので、犬に飲ませた柄杓を巫女に片付けさせごく自然にそこを塩でお清めし、「犬を繋いで下で待たせてくれたら。」巫子さんと話をしてたら、その会話が聞こえたらしく後戻りし、こちらに向つて「そんな事はしていない。」と物凄い剣幕でまくしたてられたので、まず柄杓は人が使う為にあり、塩で清めた経緯等を説明し、こちらの説明に納得されたように見受けられた。けれど、数週間後に神社庁より問い合わせがあり、崇敬した神社に犬を連れて参拝したが、非常に不愉快な思ひをした内容を匿名で書かれていました。そうしたことを通して、『人は一言、事を破る。一言、人を誤る。』でついつかり言つた言葉、ちよつとした行為が、その人の価値を決めるのです。ですから私は、この尊嚴なる社で御奉仕させて戴きながら皆様が、気持ちよくお参りされ、神宮での良い思ひ出と共に再びお参りされることを願つて居ります。此処に奉仕している神職はもとより職員も皆同じ気持ちです。皆様には気持ち良く、いつも笑顔でお参りして戴きたいのです。「笑う門には福来る」の

諺は決して含み笑いで無く、腹の底から笑うこと。それこそが、自ら心身の薬となる笑いの効用であると言われております。

さて、神職がさりげなく語った言葉さえも、聞き手である皆様の中には、「これは、神様が私の為に言つて聞かせて下さっている。此処に奉仕されておられるどなたでも私は、有り難く思い聞いております。」とお話下された方の言葉は奉仕する神職として、有り難く、そういう方は不思議な程美しい笑顔です。どうか、皆様は是非自分の為に言葉を大切にされ、豊かな心、素直な心でお祈り下さい。心には魂が宿っており、皆様には人を思い遣る心・和魂をお持ちです。此処にお参りされましたことは皆様の御祖先の御霊も御悦びの事と存じます。どうか今こそこの世に生かされている神の子として御自分の心を大切にされ、更に霧島の皇大神様の思頼を戴くことにより、先程より申していますその「笑顔」をお持ちになつてお帰り下さい。本日は洵に御参拝下されましたこと、心より御礼申し上げます。

（鹿児島県 霧島神宮 権祢宜）

天孫降臨

松坂公宣

霧島と最も関係の深い神話は、天孫降臨の神話であります。しかし、この部分だけが独立した神話ではなく、その前後に開闢神話、高天原神話、出雲神話、日向神話とあります。本日は日本神話の中でも霧島と特に所縁の深い天孫降臨を中心に話を進めていきたいと思っております。

さて演題になっております天孫降臨ですが「天孫」とは、天照大神の孫という意味で、「降臨」とは、瓊瓊杵尊が、高天原から豊葦原中国に降りてきたことを意味しています。

霧島神宮が初めて祀られたのは、欽明天皇の御代、西暦五四〇年頃と伝えられています。慶胤というお坊さんが、高千穂峯の中腹から少し上にある脊門丘という場所に神社を造営したと言われています。しかし延暦七年（七八八）の噴火で、神社は焼失してしまいました。その後、天歷三年（九四九）に天台宗の性空上人が、修行でこの山に入り西麓の瀬多尾越に社殿を再興し同時に華林寺という別当寺を建て、多くの弟子と共に修行を行ったと

されています。

これらの社殿は、文暦年間の噴火でまたも焼失してしまい、その後は山麓の田口に建てた仮宮でお祀りしたと言われています。その後、文明十六年（一四八四）になって島津氏の第十一代藩主、島津忠昌公が、真言宗の兼慶上人に命じて、現在の社殿があるところに社殿と華林寺を再興したとされています。

現在の社殿は、正徳五年（一七一五）に第二十一代藩主の島津吉貴公が、造営寄進したものです。建物は入母屋造りで、内外装にはすべて漆が使われています。内部は彫刻と極彩色の絵が施されており、文化的にも貴重なものとして平成元年に、国の重要文化財に指定されました。

次に演題である天孫降臨についてお話ししたいと思います。この神話は、古事記と日本書紀に記されていますが、日本で最初にできた官選の歴史書である古事記の上巻にあたる天孫降臨には、「天浮橋にうきじまりそりたたして、竺紫日向之高千穂之久士布流多氣に天降りましき」と書かれ、日本書紀では、「天八重雲を排分けて稜威の道別に道別きて日向の襲の高千穂峯に天降ります」と書かれています。高天原から地上に降りた場所については、現在の霧島神宮がある霧島連山の高千穂峰とする説と、宮崎県の臼杵にある高千穂

とする説があります。現在は双方とも「天孫降臨の地」として祭祀が行なわれています。

日向の国の高千穂峰に降りられた瓊瓊杵尊は、天照大神から「八咫鏡」「天叢雲劍」「八坂瓊曲玉」という、いわゆる「三種神器」を授けられました。これは皇位継承のしるしとして今も受け継がれています。現在、八咫鏡は伊勢神宮に、天叢雲劍は熱田神宮に、そして八坂瓊曲玉は皇居にお祀りされています。

なぜ三種の神器が皇位継承の印なのかについては、天孫降臨の時に天照大神から出された「御神勅」に記されています。日本書紀の卷二、神代下には、「天壤無窮の神勅」として「豊葦原千五百秋の瑞穂国は、是れ吾が子孫の王たる可き地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。行矣。寶祚の降えまさむこと當に天壤と窮無かるべし」とあり瓊瓊杵尊が三種の神器を持って日本を治めれば、皇統は永遠に続くということを示しています。

もう一つ「斎庭の稲穂の神勅」には、「吾が高天原に所御す斎庭の穂を以って、亦吾が児に御せまつるべし」とあり、天上にあつた稲を地上に運んで国民の主食とするよう命じています。瓊瓊杵尊は、三種の神器と稲穂を授かつて降臨されたのです。

これは、瑞穂の国を天孫にお授けになる絶体の条件として示されたものであります。このうち、国を授けてくれることに合せて、民族の生命の糧である穀物をも授けられている

ことに私どもは最も重大な歴史の事実を発見するのであります。この様な我が国の説話は科学的に明確に証明できることではありませんが、私達の遠い先祖がこのような強い理念を以って、国造りを行っていた事が伺えます。

その国に科学的に立証できない程古い言い伝えがあるということは、その国の文化の深さと歴史の厚みを示す証拠であり、天孫降臨の神話は単に天皇家のためだけのものではなくて、日本人という民族のプライドの証であると某先生の著書に書かれています。

また最近でも多くの遺跡が発掘されていますがその中である作家の方が、国分の上野原遺跡を訪れたとき、鹿児島、桜島、高千穂峰が一望できる台地に立って、本当にここで天孫降臨があつたのかもしれないと書かれています。

私は「天孫降臨の神話」こそは、誠に雄大かつ神話らしい発想であると思います。大空にあこがれ太陽に向って呼びかけた古代日本人にふさわしい説話といえます。そしてこの降臨の場所こそは、神話の中で最も聖なる場所と信じられてきたと言わなければならないのであります。

神聖な天孫降臨の地とされる高千穂峰に祀られている霧島神宮が多くの推移を経て今日迄信仰の対象として受け継がれてきていることは、とても意義深いことであると思います。

今後、私達霧島神宮に奉職している神職は神話の中でも最も聖なところと信じ続けられてきたこの高千穂峰の麓に鎮るこの霧島の宮で、数多くの祭典を奉仕し、その中で私達の遠い祖先が持ちいだいていた大きな理想を受け継ぎ、明るい子孫の時代をきり開いていかなければと思うのと同時に、それを実践しまた継承していく責任の重さを痛感いたしております。

(鹿児島県 霧島神宮 権祢宜)

日本人が育んだもの

木下久榮

氏子総代の皆さまと共に、はるかなる日本人のルーツにさかのぼり、私たちの遠い祖先の心の旅路をたどってみたいと思います。

大昔、アフリカ大陸に誕生した人類は、ヨーロッパとアジアとロシアの三方に分かれて移動していったそうです。

日本列島には、先にロシアの方の人々がやってきて住みついたといわれていますが、その後、アジアから、そして南方から黒潮に乗った人々が北上するなど幾度か大きな人の流れがありました。時には、先住民との間に戦いがあったようですが、後から移って来た人々は、先住民を全滅させるのではなく、ある程度戦いをしたら、先住民との同化融合をはかり、仲よくまとまって生活をはじめました。こうして私達の先祖である日本民族が誕生したのです。日本人のはるかなる旅に思いを馳せながらその人達が育んだ信仰について考えてみたいと思います。

日本列島に住みついた人々は、美しい自然、豊かな自然に恵まれた気候温暖な風土の中で、狩猟や漁労植物の採集などをして生活をしていましたが、そのうちに植物の栽培をはじめようになり、その土地に定住するようになりましたがそういうくらし方は自然とかわりが深く自然の条件に左右される事の多いものでした。自然は豊かな恵みを与えてくれましたが時には早ばつ大雨台風など厳しい試練を与える事もありました。

そういう大自然の威力に対して、人間を超えた不思議な力とか霊の存在を感じたのです。目には見えないけれども、この世には森羅万象を司り、人々を守って下さる神様がいらつしやる事に気づいて、畏敬の念をもち感謝を捧げ、神祭りを行い、自然を大切に自然との共生をはかって参りました。

霧島神宮の御祭神でございます邇邇芸能命は天孫降臨の際天照大御神様より斎庭の稲穂の神勅を賜われ、稲穂をもつて高千穂の峰に天降られた事が古事記、日本書紀に記されておりますが、「いのち」の根である稲を日本人が作りはじめるようになると、種蒔く春に豊作を祈り、収穫の秋に感謝し、その間に虫がつかないように、適度の温度と雨がもたらされるように台風にやられないようにとお願いをするなどして共同体でお祭りを行い、神々様への深い信頼と崇敬を集めて参りました。

農耕儀礼にはじまった民の祭りは、やがて国の祭りとなり、個人祈願へと広がり、あらたまった時、節目の時、新しい物を得た時など人々は神様に祈願するようになりました。また神祭りは年中行事として習俗として日本人の生活の一部となり、日本人固有の精神文化を培っていきました。

このようにして、日本には美しい風土、恵まれた自然と古代の人々の豊かな感性によって民族信仰が生まれました。この民俗信仰を神道と申します。

神道は自然発生した信仰ですから、教祖もいなければ教義もなく教典也没有せん。しかし、すばらしい信仰のあり方や思想が貫かれていますので、いくつかを御紹介いたしましょう。

日本の神様は、天照大御神様を頂点として八百万神様即ち多くの神様が一つにまとまっていらつしやいます。その多くの神々様は、十分に大きなお力を持っていらつしやいますけれども、それぞれ水を司られる神様、火を司られる神様、海を司られる神様というようにある一部分のお働きを分担して仲よく共存していらつしやいますので、沢山の神様に守られていると考えていいと思います。

それから「清き明き直き正しき真心」と申しまして、清らかで明るく正直に誠実に生き

なさいという人の道即ち生き方の規範を示しております。

めにみえぬ神のこころにかよふこそ人の心のまことなりけり

という明治天皇様の御製がございます。

そして、禊と祓えがあります。知らず知らずのうちに身についてしまった悪い感情や罪を祓い清めて、清らかな心に立ち返って正しい生き方をしましょう。また、気力が落ちて
いる時、パワーをいただいて気力を充実させましょうという考え方で、生命の再生、充実は
はかります。

常々「祓え給え、清め給え、守り給え、幸え給え」と神語を唱えて自己反省し、幸せな
生活ができるように心がけようと教えていますが、生成発展を願うというのが神道のすば
らしいところです。

次に神様は「直毘の御霊」をもつていらつしやいます。「直毘の御霊」というのは、曲つ
たところを直す不思議なお力、災いなどを取り除いていい方に改め直して下さるお力、生
命力を回復して下さるお力のことです。

私達は神様の「直し」のお働きをいただいて幸せになることができますのです。神様は目
に見えませんが、お声をきくこともできませんが神様は広大無辺の御神徳をお持ちでござ

いますので真心から一生懸命お祈りすれば必ずきいて下さい。

しかし霊の力は放っておくと弱っていくそうですから神様のおまつりをして神様のお力を大きなものにし、心正しい行いや家族円満に心がけて神様の御心に叶うように努めてお加護がいただけるように祈り、健康で充実した日々を過ごしたいものです。神道では現世で幸せに生きる事を大切にしていきますので、神様のお加護のもとに意義ある人生を送るよう努めることはとても大事なことです。

更に神道のお祭りの特徴として、共同体の利益と安らぎ、国家国民の平安と繁栄を祈る事があげられます。

現在中央アジア一帯をはじめとして世界のあちこちで宗教的対立が起きていますが、これは唯一絶対の神を崇拝する一神教の人達の対立です。一神教は他の宗教を絶対認めないというきびしさをもっております。

神道は、天照大御神様を中心として多くの神々様がまとまっておられる多神教です。多神教は多くの神々様を認めますので、他の宗教と対立する事がありません。神道は大らかです。

また、神道は、自然崇拝を基盤とし自然の威力に畏敬の念をもち、自然の持つ大きな力

ルの中で生き、自然と共存する事を根本においていますので、自然環境を守るという考え方も一致しているところです。

古代の人々は豊かな感性とすぐれた創造力によってすばらしい信仰を育んでくれました。

そういう古代の人々に敬意を表しながら、このすぐれた民族信仰を宝のもちぐされにしないように総代の皆さまと共に神祭りに努め、日本人の心を大切に守り続けたいと存じます。

(熊本県 大江八幡宮 祢宜)

私の神道観

樺山成剛

本日は、「私の神道観」ということで、お話をさせて頂きます。まずはこの大会に参加しようと思った動機から、お話ししようと思います。この大会に参加しようと思った動機は、神職としてこれを一つの区切りのような物にしたいとのことから他なりません。今回、自分というものを、あるが儘に、素直に出すことで改めて自分を受け入れ直すことが出来るかも知れないとの思いからでした。前置きはそのぐらいにして、本題に入ってゆこうと思います。私の神道との出会いと申しますか、この道に入ったきっかけと言うようなところから、お話をさせて頂きます。私は大学を卒業してから五年間程、銀行に勤めていましたが、銀行では集まった小切手や手形を手形交換所に持ってゆき、銀行同士の決済を図っています。私はその手形や小切手を手形交換所にタクシーで持ってゆく時、どういうわけかタクシーにそれを忘れてしまったのです。すぐ気づいて、タクシーを呼び止めようと思いました。間に合いません。慌てて銀行に連絡し、そこからタクシー会社に連絡しても

らい、事なきを得ましたが、私はそれになんしショックを覚えました。こんなことをしでかした以上、最早、銀行にいても将来性は望めないのではないかと思い、実はその頃は、自らの適性を含めて、果たしてこれ以上銀行を勤め続けてゆけるだろうかと思ひ悩んでいた時期でもあって、もう少し自分を見つめなおす時間を持ちたいとの思いから、辞めたように思います。辞めて何をすると云う目標があつたわけでもないのですが、資格試験でも受け、自分なりにやってやれぬこともあるまいと、始めは社会保険労務士の受験を試みましたが、どうせやるならと、一念発起の思いで、司法試験を受験しようと思いました。が、なかなか合格することなく、五年程勉強していましたが、することなすことに行き詰まりを感じ、自信喪失感から、こんな自分を助けてくれるのは、神様しかないのではないかとこの思いから、神道に救いを求める気持ちでこの世界に入りました。実は、中学、高校、大学それに会社に就職してから、私をずっと捕らえて離さなかつたものが、その「自信喪失感」でした。私は現実よりもむしろその喪失感に長い間付き合ってきたのかもしれません。この感覚は多分、当時の厳しい受験戦争や家庭環境で生まれたものと思います。當時は、その喪失感は、物事にぶつかった結果のものというより、実体の如く私の眼前に立ちただかつているように思えましたので、私はこの喪失感に打ち勝たない限り、人生お先

真つ暗だと思い、現実によつかつてゆくのではなく、この喪失感に向かつてばかりいました。言わば実体に向き合うのではなく、実体に怯える不安感に向き合っていました。そして、愈々、資格試験を受験しながらも、行き詰まり、逃げ場を失って、最後のところで、全てを神に委ねるつもりで、この道に入りました。ですから、ここで私の「神道観」などと大層な題を付けてしまって、恥ずかしい限りですけど、これはこれでひとつの神道観なのではないでしょうか。「苦しいときの神頼み」これが私の神道の出発点となりました。私の生き方は、それ以後「神の随に」ということで、全てを神に託するという方向に向かいました。全てを託すとは言っても、日常の生活においては、頭で思うことと、実際の現実とは相違いたします。「神の随に」と思いつつも、自分の考えに囚われていたりすることの方が多く、なかなか実践することの難しさを感じました。また、「神の随に」と言うことも、全てを神に委ねることと解釈されますが、決して受身ばかりの考えではありません。何故ならそこには主体的に全てを神に委ねようとする自分がいるからです。自らの生命さへ、神に委ねる勇気が無ければ、「神の随に」とは言えないからです。そのためには、苦しいときの神頼みだけではなく、苦しくないときも、日常的に神への祈りが無ければ、いざと言うときに神のご加護は、得られないのではないかと思います。日常的な祈りとはと申しますと、

日常の生活の中では、神への祈りはついつい忘れてしまいがちですが、そこはなるべく工夫してその祈りを絶やさぬようにすること、そのためにこそ、日々のお祭りが、生活の区切り目毎にあるように思います。日々の生活の中で「神の随に」とお題目のように唱え、自分なりに努力していますが、神の御神慮の儘に生きるということ、神の御声は聞こえぬとも、祈りつつその御神慮に沿って生きようとすることは、いろいろな分別が介入して、そこに徹することはとても難しい。むしろ分別にばかり頼って、生活しているのが普通です。ここは、本当は同じような問題を抱えて悩んでいる神主さん同士が集まり、いろいろ話し合えるような環境を作り、知恵を出し合ってゆくことが大切なのではないかと思うのですが、中々思うようには参りません。分別を捨て去ることなんて出来はしません。ならばそれに惑わされること無く、在るが儘の自らを受け入れつつ、祈りに徹することは出来ないかということなのですが、それさへ、神にその実現を祈っている今日この頃です。「在るが随の神の随に」と祈りつつ、独り善がりて要を得ぬ話となりましたが、以上を持ちまして私のお話を終了させていただきます。有難うございました。

（鹿児島県 照國神社 権祢宜）

嗚呼老いゆく母

村田 徹郎

さしもの暑さも、いづこへか、いつの間にか秋の気配が漂ってまいりました。

この夏も八月六日・九日・十五日を中心に、各地で慰霊と平和を祈るさまざまな式典や集会が催されました。マスコミには例によって相も変わらぬ「平和＝反靖国」の報道があふれました。そして、総理大臣の靖国神社参拝はありませんでした。

今日は一人の「お母さん」のことをお話ししようと思います。「お母さん」と言うよりは、「母」と言ったほうがぴったりの話です。

数年前のことでした。氏子の方から御霊祭りの相談を受けました。「山内達雄の五十年祭をお願いしたいのですが・・・」。「山内達雄さんとおっしゃいますと。」この氏子さんが山内家の跡を見ておられるということは承知していたのですが、私の乏しい記憶では何か判然としません。でも、記憶の底の方にちらつと動くものがあるのです。そんな私の表情を見てその方は、「ええ、あの山内やすの子の達雄です。」とおっしゃいました。ああ、

そうだったと思うのと同時に、小学五・六年生だったか中学生になってからだだったか、祖母か近所に住んでいる叔母のどちらかから聞いた話を、臆気ながらたどっていました。

満州事変・支那事変・大東亜戦争へと、我国が列強の強引な軍縮や経済封鎖、主権の侵害に堪えかねてやむなく軍を進めたことは皆様も御存知の通りですが、その支那事変の勃発の時にこの話はさかのぼります。当然のことながら、戦後の昭和二十年十月生まれの私が直接聞くべくもない話で、同年代の友人知人も恐らくそのほとんどが知る由もない、学校では決して教わることのないエピソードなのです。

私は翌日山内家の奥都城にお参りをしました。自分の記憶を確認するためでもありませんが、何かしら自然にという気がします。それまでは御霊祭りも先代が奉仕致しておりましたので、私は初めてお参りしたわけです。

前置きが長くなりましたが、正七位 勲六等 功四級 海軍大尉 山内達雄大人命の墓碑には次のように記されていました。

昭和十二年夏支那事変起るや、我国の戦史に空前たる渡洋爆撃に参加し、新田慎一中佐に従い指揮第一番機に搭乗し、折からの荒天暴雨怒濤を衝いて、敵の防備嚴重且つ

猛烈極まりなき十字火と執拗なる数多敵機の中に枢要飛行場を果敢に襲撃せり。同年八月十六日朝敵弾のため飛行機に火災を生じ、誠忠愛国の血潮も共に火焰に引きなしつつ句容飛行場に突入自爆す。達雄時に齡二十七歳。

ここまでお話しすれば、七十歳以上の方は「ああ、あのことか」とご承知で、いまさらこのあとを続けてお話しする必要はないと思いますが、若い皆さんのために、達雄大人命の御母堂のお話……こちらが今日の主題なのですが………を続けましょう。

○月○日 海軍中尉山内達雄戦死せる旨の御通知 壱岐郡石田村長殿より御転送を得正に拝承仕り候 あの子既往の事 深く厚く御礼申し上げ候 あの子は幼少の頃より清き直き心の持ち主にて 父は我が子なりとは思はず 御国の御子なりとして養育致し来たりたる子に有之候 昭和七年祖国非常時に際し あの子が海軍旗の下に馳せ参じ候ひし時 既にこの最期を覚悟致したるものに有之候

嗚呼老いゆく母 月の明るきを眺めては泣かんとするか 花の香しきをめでては悩まんとするや あらず 首をあげて空ゆく飛行機をみよ あれよあの機 達雄永へに生き

て あるよ

『天皇陛下萬歳』『大日本帝国萬歳』『大日本帝国海軍萬歳』 戦死せる子達雄に代はり母やす謹しみて唱へ上げ奉る。

私 尚 男児三人有之候 育て見守りつつ 御国の御為に励ましめんと致し候の間御心安く思召し下さいませ。

海軍人事局御中

母やす 謹しみて上

この、国といとし子を思う名文は当時の全国新聞に掲載され、また歌にも歌われ大変な話題となり反響を呼んだそうで、学校では子供たちにこの話をし、この文章を暗唱させたりもしたそうです。私が今ここにこうして読んでおりますのも、今尚完璧に覚えておられた当社の総代さんを書いて頂いたものなのです。軍国の母の赤誠あふれる文章として、戦意向上のために軍やその筋に利用された面もあらうかとは思いますが、しかしそれは、支那事変も当初の渡洋爆撃による壮烈な戦死という衝撃的なものではあったとしても、大東亜戦争末期の一種ヒステリックな戦意向上策とは相当意味合いを異にするもののように私に

は思われます。

たれか我が子の死を喜ぶ母がありましようや。御国の為に、一億同胞の為に、一命を賭して空に散華したいとし子を、今は護国の神となつた我が子を、永久に生きてあると念じる母の、烈烈たるそしてなんと優しい鎮魂の賦であらうかと、「老いゆく母」の下りを讀むたびに新たな感動を覚えるのです。数多の畏き御英霊のお陰でこうして平和に豊かに暮らせる今、その慰霊顕彰にも他国の顔色を伺つてばかりいる国、そして一方には礼節も公德心も失つた、利己的でこころのない国民が増えてきました。そんな昨今の我国の姿に、言い知れぬ不安といらだちを覚えるのは皆様も同じだと思ひます。自由ボケ、平和ボケと言われて久しい今こそ、この母の誠の心を些かなりともくみとつてもらいたいものと、自戒をこめて念ずる次第です。

山内やす大刀自命 昭和三十六年一月十三日帰幽 齡八十歳

(長崎県 白沙八幡神社 宮司)

思うこと

岩田康彦

こんにちは松尾大社の岩田康彦と申します。私は人の前で話することを非常に苦手にしておりますので、お聞き苦しい点多々あるかとは思いますが、ちよつと私のお話にお付き合いただけたらと思います。宜しくお願い致します。

さて、皆様。皆様は日本国家を愛していますか。誇りに思いますか。

平成十四年も八ヶ月を過ぎようとしております今日ではございますが、私にとって今年一番の出来事は六月に日韓共催のワールドカップが開催されたことです。最近のサッカー人気や私もサッカーをしていたことから、きつと盛り上がるだろうな、良い大会になるだろうなと思っております。実際、この期間はどんな出来事があつてもその日の最初のニュースは日本が勝った、負けた。また、他の国がどうだったと、日本国中がサッカー一色の一ヶ月間ではなかったでしょうか。

神道青年全国協議会より京都の神道青年会に一つの依頼がありました。どんなものかと

申しますと、国旗啓発推進運動の一環として国旗・選手への応援メッセージを君が代の書いてある用紙に子供達に書いてもらい、それを会場のサポーターに配るというものでした。国際試合の前には必ず国家が流れます。六月四日の日本対ベルギー戦をテレビで観戦しておりますと、画面一面にその国旗が揺れており、私は非常に喜ばしく思い、何か安堵感のようなものも持ちました。

戦後の日本は、家庭からことごとく国旗が消え、数多くの学校では「反・日の丸、反・君が代」の教育がなされてまいりました。その結果、国旗の由来や君が代の歌詞さえ知らない国民が生み出されるという、おそらく世界では理解しがたい事態に進展しております。当社にまつのお緑の少年団という小中学生を対象として、神道教化を目的とする団体があり、ある活動の際に団員から君が代を歌いたくないと言われました。理由を聞きますと学校で歌わなくて良いと言われた。またはかつこ悪いというもので、非常にびっくりしました。と、言いますのも私が学校で最初に習った歌は、

白地に赤く 日の丸そめて ああ美しい 日本の旗は

と、現在聞く教育とは程遠い国旗の歌なのです。私は愛知県の生まれで、実家はごく一般的な家庭ですが、祝祭日には必ず国旗を掲げ、一日、十五日には神棚の掃除をするという

環境で育ちましたので正直あまり世間で聞く話に深い関心はありませんでした。

一時期マスコミで高校の卒業式の「日の丸・君が代拒否」やスポーツ選手が君が代を歌わない等を取り上げました。若い人はそれを見てかっこいい、それで良いのだと思う風潮があるように思います。権利とかを主張し肝心な部分に触れていません。また、マスコミは反対意見を中心に取り上げる傾向があり、今の日本人は見たニュースや読んだ新聞の取り扱い方で大きく左右されます。これを単に世の中の流れと黙っていて良いのでしょうか。明治憲法を創り上げた明治人には力強さと聡明さがみなぎっていたように思います。論議し、論破し、多くの人が議論内に入っていくエネルギーがあり、それには新しい国家を造ろうとする気概と自負がありました。日本は遠い神代の昔より受け継がれる世界に類をない歴史深い国です。戦後の復興によって世界第二位の経済大国になったと昨今では言われておりますが、私は今まで甘んじていただけだと思っております。GHQは日本人の国家観に恐れ、それを変節するために、昭和二十二年「日本国内における国旗の掲揚禁止令」を行いました。ところが、日本国民があまりにも元気がないので翌年には「祝祭日には国旗を掲揚してよい」とし、二十四年には「国内における制限無く掲揚してよい」となります。これはGHQ、日本人も含め皆が日本国民を奮い立たせる栄光の印が日の丸であり、

日本国家への誇りであると認めた結果です。

皆様、この機会に憲法で定められたとか、周りの意見、世の中の風潮ではなく日の丸・君が代の意味を再確認して下さい。戦争を象徴するものだという見方はいかに短絡的なものかを理解してもらわなければなりません。そうすれば、今の元氣のない日本のために、「日の丸」と「君が代」とはこういうものかをもう一度皆が考え直すことができるのではないのでしょうか。そうすれば日本という国はどういう国かということを見つめ直すいいきっかけになると思います。

最後に、これは私たち神職にも当てはまることです。祝祭日に国旗を掲げない家庭が多々あるように思えます。まず、神職の私たちから改め、この運動を一丸となつて行っていくことが大切ではないでしょうか。

(京都府 松尾大社 権祢宜)

人

植木貴道

先日、長崎県神社庁主催神職養成講習会が開催されました。この神職養成講習会とは、神社の神主さんになる為の資格をとる講習会ですが、私はこの講習でいろいろなことを学び、いろいろなことを考えました。その中で特に思った事が二つあります。一つ目はこの講習会の参加者は約三十人、期間は一ヶ月と長いもので、参加者の年齢は、下は十八歳から上は七十歳まで、学歴、職歴、育った環境も様々でしたが、十人十色とはよく言ったもので、夫々個性があり、重点を置くところも様々で、教養、学科に重点を置くもの、実技、祭式、ええ、祭式とは神社でお祭りをする際、神職が行なう作法のことですが、そちらに重点を置く人、一生懸命やる人、やらない人、同じような人は居ても、同じ人は一人も居ません。この講習会のように、目的が近くはつきりしている場合は、人はその目標に向かって一生懸命になれます。しかしながら、人は、八十年九十年と長い人生を送ります。その中で、人は何を目標に生きればいいのかほとんど困ってしまいます。光陰矢のごとしとは

言うものの、過去を振り返ればその通りで、過去は光より早く過ぎ、未来は果てしなく遠く感じてしまうでしょう。宇宙が生れ、地球が誕生した時から流れた時に比べたら、人生なんてほんの瞬きほどにしかありませんが、人にとっては一生という長い道のりを歩いています。その長い人生の中で目標を見つけ、目標に着実に進むのは難しい。人は楽なほう、簡単なほうに流れがちであり、私もその中の一人であります。然しながら、時間には長い、短いなんてあるのでしょうか。先ほど言ったように、何を基準にするかで変わってきます。今を一生懸命生き、その先に自分の思うような人になれば最高である。私が何を言いたいかというと時間は同じように流れ、同じように過ぎていく、日々新た、日々一生懸命生きていかなければ、思うような未来は来ないという事です。人生はその一瞬、その一瞬が一回きりなのだなあとつくづく感じました。

二つめに思いましたのは、講習会では色々な人間模様を垣間見ました。先生が居て、講習生が居て賄いの人が居て、その周りには何人もの人が関わっていました。人は一人では生きて行けません。親が居て、おじいちゃん、おばあちゃんが居て、その又お爺ちゃんが居て・・・いつから人が居たのかは分かりませんが、ずっと昔から受け継がれてきた命があります。また、生活する上でも、米を作る人が居たり、魚を採る人がいたり、人は知ら

ないだけで、たくさんの方の共同体によって生きていることを忘れてはいけません。引いては、人のみでなく、太陽、水、空気、土、動物、植物何一つ抜けても生きていくことは出来ないでしょう。人は地球という微妙なバランスの上に存在しています。存在していることが奇跡です。そのことを忘れてはいけません。現代人はそのことが分かってはいても感謝する気持が希薄になっているのではないのでしょうか。

古代の人は自然のもつ二つの側面を見たのではないのでしょうか。太陽の恵みと、旱魃への恐れ、山の育みと、火山への恐れ、川の恩恵と、洪水への恐れ、古代人は自然に感謝時には恐れも抱き、時には祈った。これが、自然と感謝の気持へ、お祭する気持へと変わっていったのではないのでしょうか？感謝の気持を忘れたら、そこには神様も存在せず、心の安らぎもないでしょう。

昨今、度々国会の中では夫婦別姓が盛んに議論されているのはご存知でしょう。皆様方はどう思われますか？

今の時代、夫婦別姓にどんなメリットがありますか？通称を使えば問題は解決されるのではないのでしょうか。これは、家族自体が分裂の危機に瀕しているということではないのでしょうか。結婚したのかしないのか、離婚したのかしてないのか、もう訳がわかりません。

子供も何で親と同じ姓ではないのか疑問に思うでしょう。親は仲が悪いの？僕はこの人の子供ではないの？色々勘ぐるでしょう。このことは、子供の教育にいいはずがありませんし、それ以外にも、友達が不思議に思い、そこからいじめられる危険性も多分に含んでいます。一部個人主義思想の持ち主の為に、何故、そこまでして法を改正する必要があるのですか？

今のままで、十分に機能しているわけではありませんか？新たに出てくるデメリットのほうがはるかに多くなると考えます。戦後、日本は世界有数の経済大国として成長してまいりましたが、戦前の大家族の時代から、戦後の核家族の時代へ、人の最小構成員の数が減少し、家族がより細分化され限りなく一人に近づきます。民主主義の名のもとに個人主義が横行しているのではないでしょうか。大多数の聞こえない意見よりも、少数の聞こえる意見のほうが通る世の中、おかしいとは思いませんか？日本人の本質的に持っている感謝の気持ちを強く感じることができれば、そのようなことにならないと考えます。

皆様方もどうか感謝の気持を強く感じ、一生懸命生きてください。

生きる

原 茂子

ファッションとか、おしゃれとかには、無頓着な人でも、コシノ・三姉妹を知らない人はいないとおもいます。コシノヒロコ・ジュンコ・ミチコの三姉妹のことです。私は、コシノ・ジュンコさんと岸和田高等学校の同期であつたこともあり、世界的デザイナーの三人の活躍に、いつも注目し、拍手を送っております。そしてまた、この三人娘のお母さん小篠綾子さんは今年八十九歳。とつてもお元気で、地元の岸和田駅前通りの商店街に、お店をもち、現役のデザイナーとして、講演で全国を巡り、海外へも気楽に出かけておられます。そして岸和田市では、多くの委員を引き受けられて女性の生き方のお手本となつてゐる先生でもあります。

産経新聞に今年六月中旬、「欲出しましよ」との見出しで、記者との対談が十二回連載されました。

「小篠さん自身の今の欲はなんですか。」との問いかけに「百まで生きることです。生

きる言うんは、ただ生きてることと違いますよ。働くんです。私はね、かつて八十八歳まで現役を続ける言うてたんです。いざそれが実現してみると、もっともっと、働きとうなつてきました。もうこれくらいでええやろう。というのが一番悪いことなんです。現実には百歳で現役というのは珍しいでしょうが、それだけに働く欲がでてきました。働いてこそ青春ですわ。」と答えておられます。そしてまたこんなこともいつておられます。「私、デザイナーの仕事、天職やおもうてますねん。おしゃれのお手伝いして喜んでもらうて、その喜びが私のよろこびです。神さん、ようこんな職与えてくださったことやと思うてます。」そして「これ感謝ですよ。」と結んでおられます。

昭和十七年夫が戦死し、女手ひとつで敗戦後の混乱期に、三人の子供を大きくされたそのご苦労は、「働いて働いて働きぬきました。でも子供たちは見てたんですね、母親の一生懸命働く姿を。生きるために、一日、一日を生き抜くために、ミシンを踏んでいる母親の姿を心の中に写し込んだんです。」と語る中に窺い知ることが出来ます。

生まれ育った岸和田で、三姉妹が揃ってファッションショーを催した折、最後の舞台にお母さんを招き上げて、その労をねぎらう様にヒロコ・ジュンコ・ミチコの三人が、母親子さんのまわりを取り囲んだ時には、ひと際大きな拍手が会場に響きわたりました。胸の

中が熱くなりました。

ふつとわれにかえった私は、これからの自分の生き方・自分の生きる目標をしつかりと見据えなければと思いました。

私は現在、大阪府岸和田市に御鎮座の夜疑神社にご奉仕しています。と言うよりは、掃除当番者として、毎朝境内の落ち葉の掃除と駐車場の草木の手入れをしながら、宮司の夫と長男夫婦、孫二人と一緒に生活させていただいております。

いつも、決まった時間に、決まった方が朝のお参りにこられます。そしていつも同じように声をかけてくださるのです。「おはようございます。いつもいつもご苦勞様です。」お帰りには、「ありがとうございます。」と。「ようこそおまいりです。」いつも同じように私も挨拶をする毎日です。夏の作業は汗びっしょりですが、気持ちはいつもさわやかです。おまいりの人たちの清々しい笑顔に、わたしが生きる力・生きるよろこびをあたえてもらっていると、心から感謝し、一日がはじまります。

お宮に嫁いで今年四十年になりますが、三人の子供を出産した折を除けば、病気で床についた日は、一日もありません。（かみさまは綺麗好きでいらっしゃるから、きつと掃除のおばちゃんが病気になる困るので、わたしにいつも元気で働かせてくださっている。

いつも見守ってくださっている。」と自分勝手に思い込んでいます。神様にいつも護っていただいて、生かされている自分を思うとき、健康で一日一日過ごさせていただくことを（あたりまえ）と思つては罰があたります。

小篠綾子さんは、八十八歳現役を實現されましたが、私は先ずは、（七十七歳、現役のご奉仕）を、生きる目標にしようと思います。神様のお膝元で日暮をさせていたでいているのでから、私が行いや心遣いを、間違つたなら、何かの試練を与えて、「そんなことでは駄目だ。」と、気付かせていただけるでしょう。

ご先祖さまから、両親からいただいたこのかけがえのない体と命を、地域の人たちのためにすこしでもお役に立てるように、そして生きる目標を實現出来るように、そしてもう一つ、私がいまもお慕いする亡き佐古幸嬰先生からいただいた言葉（かみさまからのごほうび）がいただける日暮をしたいとおもっています。

（大阪府 夜疑神社 権祢宜）

何とかしよう　　どうにかしよう　　何かをしよう

渡邊知宣

神宮さまのおふだのことです。正確には神宮大麻という御神札のことです。この神宮大麻が全国的に、七年間連続して減体し続けています。言い換えれば、日本の神さまの減少です。今日は、神さまにお仕えする神職のみならず、日本民族にとって重大な危機ともいえるこの神さまの減少について話をしてみたいと思います。

今年はこの神宮大麻が神宮司庁を通して頒布されるようになってから、丁度百三十年目の節目の年に当たります。

この節目の年に、私たちが直面しています神宮大麻の減体、即ち神さまの減少について考えてみたいと思います。

まず現在の問題点を整理してみます。

一、平成六年を最高にして、翌七年より全国的に連続して神宮大麻が減体を続けています。

人々の敬神の念の強い弱い、なかなか客観的な数値では表しにくいものです。神宮大麻の頒布数でその大まかな傾向は把握できると思いますが、その頒布数が減退し続けるということは、国民の敬神度が急速に弱まる方向にあるといつて間違いないと思います。神社の危機であるばかりでなく、神道を文化道徳の基礎としてきた日本の国の危機であるといえます。

二、次回の神宮の御遷宮の募金活動が不安です。

平成十七年より、いよいよ第六十二回御遷宮のための募金が始まります。前回の三百二十七億円の数倍の費用が必要なことを考えると、このような推移をする中で大丈夫だろうかと危惧せざるを得ません。

三、このままでは神社本庁、各県神社庁、各支部の予算規模が縮小し続けていきます。たとえば神社本庁の予算収入の内、神宮さまからの神徳宣揚交付金の割合は七割近くを占めています。殆どの県の神社庁や支部においてもほぼ同様です。その基となる神宮大麻の減体です。このままでは、健全な活動がいずれも出来なくなっていくことは火をみるより明らかです。

神宮大麻の減体は、今日は栄えていても明日は神宮のみならず神社界全体が衰退してい

くことに繋がっていることは明白です。

では、これらの問題点をどうやって克服していくべきでしょうか。

解決策について次に考えてみたいと思います。

一、大麻増体の取り組みを神職の最も大切な使命であると思うことです。

要は、神職の心構えだと思っています。大麻の増頒布については、多くの先人達が長年にわたってあらゆる手段を講じてきて尚、この現状ですから難しいことに間違いありません。どんな対策を講じてでも減少していくことを止めることは出来ないかもしれません。しかし、だからといってこの取り組みをやめることは許されません。

私たち神職の使命は、神明奉仕が第一です。神さまに奉仕をする職業ですから神職です。神さまを死守せねばなりません。神さまが減少されることを防がねばなりません。さらに日本全国の神社の本宗である神宮をお守りせねばなりません。

自社のおふだに力を入れる以上に、神宮大麻の増体を考えなくてはなりません。こうした心構えを全国の全神職がまず持つことが大切であると思います。

二、さらに重要なことは、神社関係者の中でリーダー的な役職の方々の方針です。

頒布状況を全国的に見た場合、各県によって大きな差があるのはご存知でしょう。例を

挙げて申し訳ないですが、月間若木にも記載されていますので御容赦いただきますが、頒布率の最も高い県は富山県の約六十%、低い県は大阪府と沖縄県の約三%です。これらは過去からの経緯があつて一面やむをえない点もありましょうが、その県神社庁のリーダーの熱意や方針に大きく左右されると思います。中大麻・大大麻の頒布数を見れば、特にそのことがわかります。

中大麻の最も多い県は茨城県の約十四万體、少ない県は沖縄県の○體、大大麻については、長野県の約五七〇〇體が最高で、奈良県・和歌山県は各一體、沖縄県は○體です。

皆さんはこれらの実態をどうお思いですか。

せめて中大麻・大大麻に関しては神職や総代さんだけでも受けるべきでしょう。そうすることによって始めて、一般の方々にも力強く勧めることが出来ると思います。県のリーダーはそのような方針を立てるべきだと思います。

○體、一体という事では、その県の大麻頒布の熱意が疑われます。また神社本庁においても神宮さまより委託を受けている以上、こうした県への指導を強めるべきでありましょう。

トップ同士の遠慮があつてはならない問題だと思います。全国の神職の熱意を高めるた

めにも各県のリーダーの方々がもつと厳しくあるべきでしょう。このままでは神社界全体が衰退していくのではないでしょうか。

三、神社参拝者へ徹底した啓蒙をしよう。特に参拝の多い神社は力強い取り組みをしよう。

それぞれの神社が、自分の奉仕神社に祈祷参拝にこられた方々には神棚が祀られていないご家庭は無い、という程の気概を持つて参拝者に啓蒙教化すべきだと思います。

赤ちゃんのお宮参りや車のお祓い、七五三や厄祓いの方々の中には神棚をお持ちでない方々がおられます。この方々が神社に近づいてこられたこの時が、神棚奉斎教化の絶好のチャンスだと思います。普段、あまり神事にご縁の無いときにいくら説明しても効果は薄いものです。神社に近づいてこられたこの時に、神棚や神宮大麻を「無料授与」してでも啓蒙すべきでしょう。そうすれば次の年からは初穂料を添えてお受け戴けるものだと思います。

また、このことは地鎮祭にも言える事です。この地鎮祭の時が神棚設置の分かれ目です。建物完成後二～三年経過して神棚設置や大麻奉斎を呼びかけても、もう効果は期待できません。結婚式の祭典の時も然りです。新しい人生出発の時の判断で、その後の神棚の有無

が決まります。

また、現在全国で毎年四十万體以上の大麻が神宮へ返戻され無駄になっています。申し訳ないことです。この大麻を返戻せずに「無料授与」してでも役立ててはいかがでしょうか。

これらのことは、参拝者の多い神社、都市部の神社に、特に力をいれていただきたい点でもあります。

三、結論

以上のことに焦点を絞った上で、神職一丸となって取り組みを進めるべきだと思います。私達はややもすれば、それぞれの立場で出来ないことの言い訳をしがちです。でもそれでは何も前へ進みません。自分に出来る最大限の取り組みを何でもいいから実行する必要があります。何もしないのが最もダメなことだと思います。

神宮大麻の増体を目指して「何とかしよう どうにかしよう 何かをしよう」ではありませんか。

神さまの国、日本の未来のために頑張りましょう。

人生行路

古川雅恵

私は毎月一回、九州管内の女囚を預かっている麓刑務所へ教誨に行く事も大切な勤めとなりました。平成元年、神社本庁より、神社本庁教誨師に任命され、今日まで早や十三年余りになりました。今は亡き故山口良吾先生には、主人久雄と共に尊敬の念深く、御生前中は一方ならぬ御指導を頂き大変御世話になってまいりました。今の度の私の教誨師拝命は、その山口良吾先生の御子息である、長年少年刑務所の神社本庁教誨師山口良和先生の御盡力の賜物と深く感謝し、御恩をわすれてはいけないと我が身に言い聞かせている。

私が神社本庁教誨師に任命された時、主人は亡くなって一年にもならず、高天原。貴女は教誨師になってよかった”とわけもわからない私に喜んで下さったのは、佐古幸嬰先生、石井壽夫先生だった。

何もわからない浅学非才の自分を反省しながら、難しい教誨の道を只菅、両先生のみ教えを胸に抱いて人生行路を歩きつづけている。

御盡力下さった山口良和先生や、刑務所管内の先生達の暖かいみ心に守られ大過なく歩いてこられたと思う。宗教教誨、各宗派の先生方、人生行路をふみはずし、谷底におちた可愛相な収容者を、大切に守り、管理されている職員御苦労が身に沁みた。

各宗派の教誨師の先生方、少年刑務所の職員の皆様に厚い信頼と尊敬を集めておられる山口良和先生の御日常を目のあたりみて感動した。全く資格のない教誨師の私が、あまりにも大切な教誨の道をたゞく神に祈り、月日を重ねている。その愚かな教誨師の私をまるで我が母親の姿をみる様に待ってくれている管内の収容者、二十才代、三十才代、四十才代、五十才代、の彼女達が、私には娘の様に可愛い。個人教誨は、筆談にすることにした。部屋の後には教育課の先生が一人、ひかえておられる。思う事が十分言えないのではないかと考えたのです。誰にも言えない事、悩みを訴える彼女に、出来る限り、力になって聞いてあげたい……。一日も早く社会復帰が出来るよう、祈るのです。

どんな指導をしたらよいのか？教誨の道は厳しい。戦後育ちの彼女達には、教育勅語の教もしらない。日本歴史、神話を習っていない。天照皇大神様も知らないのです。一時間の教誨の内容をあれも、これもと研究して作成する講録が、私の頭を悩まします。なやんで後、いつも考えることは、わが身の心の修養の足りない事、神様の様になれたらと、出

来ないことを考え、自分の力の足りなさを反省している現代です。暗い収容者の心を少しでも明るくしてあげたいと愚作の替歌をつくりました。

一、曇りガラスを手で拭いて、あなた明日が見えますか、人生行路の酷しさを、一寸先は闇の筈、神を信じて祈ろうよ

二、高い星空仰ぎみる、誰も知らないこの胸に、哀れ育くむ花なのに、寒さ身に沁む夜の風、神を信じて祈ろうよ

三、想、涯なき人生の、忘れぬ夢も愛故に、とゞけ、山越え野を越えて、深山みやまの鳥よ知るや君、神を信じて祈ろうよ

四、人のふりみて、我がふり直せ、あなたあしたが見えますか、自信過剰はけがのもと、母の教えを思い出す 神を信じて祈ろうよ

毎日、最後に伊勢神宮の歌でしめくくっていたのが、近頃は歌いますか、“人生行路”という声をき、時に歌はせております。

自分の犯した罪で人生行路の難しさはさる事ながら、近頃気にかゝるのは、靖国神社参拝を堂々と出来ない国会議員の姿です。日本人として日本の非常時、一旦緩急あれば、義勇公に奉じ、日本を守るため命をすて、戦って下さった勇士を戦勝国が、勝てば官軍、負

ければ賊軍で間違った裁判で日本を裁いた。かつての東京都市ヶ谷台の大本営を舞台にしてひらかれた“連合国”による極東国際軍事東京裁判では、東条英機大將をはじめ、A級戦犯として處刑し、又マニラ裁判では山下奉文大將他幾多の勇士達が御氣の毒な最期を遂げられました。後で日本の国会で共産党だけはずして総ての国会議員一同、犯罪になして犠牲になった方々、特にA級戦犯として命をおとされた方々を昭和殉難者として靖国神社に祀る事になり合祀されました。当然の事でしよう。この事について中国韓国等より横槍の入ることを苦にして国会議員の参拝が実行されていません。日本国を代表する身分の国会議員が残念でなりません。

五月三十一日、在日米軍横田空軍基地將校会の二十二名が靖国神社に参拝した記事を見ました。外国人でさえ手を净め、花輪を捧げて参拝し、国を愛する者として靖国神社に参拝するのは当然の事だと語っています。日本人として、こんな国会議員は笑はれています。いや、日本が笑はれて残念でなりません。

私達神道人は、しっかり立上って元気を出しましょう。天孫降臨発祥の地霧島山に神鎮ります霧島神宮の大前に誓って、日本人の大和魂をよびさまし、神道人として一層の神明奉仕に誠を捧げて靖国神社の神々様になり鎮り給う御英靈に報恩感謝を捧げ日本の復帰に

努力しようではございませんか。

(佐賀県 金刀比羅神社 祢宜)

南洲翁と敬天愛人

木下 鐐二

先の大相撲名古屋場所で見事準優勝、そして大関昇進を掌中に納めました御存知モンゴル力士朝青龍。彼が八月三日、故国に凱旋帰国しました。国あげての大歓迎です。

英雄となった朝青龍は、モンゴルの大草原に立ち語りかけていました。

「この広い土地は、私が二年前に購入したものです。ここにスポーツをしたくても貧しくて出来ない子供達のために、スポーツの殿堂を造ってやりたいのです。それが私の母国への恩返しです。」

若干二十一歳の童顔の若者が「母なる国、祖国モンゴルの為に役に立ちたい。恩返しをしたい」と、多額の蓄財を惜しげもなく投げうって、準備を進めているのです。

私達のまわりでは、「市民」が大威張りで、「国民」の影が薄れていくなかで、朝青龍の言葉は深く私の肺腑をえぐるものでした。

さて、去年の師走一日、待ちに待った、皇孫内親王殿下の御誕生です。国中が歓びに満

ちあふれました。

「一の姫まず生あれませるよろこびに師走の街の人らはなやぐ」

と歌人岡野礼彦さんが詠いました。街中で「よかった、よかった、本当によかったですネ。」の言葉が人毎に交されました。

「日本国に天皇すめみことあり」「日本国万歳」と国民の多くが私達の祖国を、国家を強く意識したのでございます。

お七夜にあたる十二月七日、命名の儀のあとお名前前の発表がございました。「なんと、素晴らしいお名前であろう。」とうなずいた人も多かったと思うのです。

川崎市の寺西正さんが詠っています。

「愛うつくしく生おひ立ちまさむ姫御子は授り給ふ御名そのまゝに」

『敬宮 愛子さま』声に出して呼んでみると、思わず頬がほころんでしまいます。

去る二月二十三日、皇太子殿下が四十二歳の御誕生日に、東宮御所で記者会見が行われました。

記者がたずねました。「敬宮さまの御誕生なさいました時の喜びと感動されたこと、また命名に当たっての御気持など、お聞かせ下さい。」との質問です。

皇太子殿下のお答えをかいつまんでお話致しましょう。

「新しい生命が誕生するということは、実に神秘的なことで、大きな感動を伴ったものでした。雅子には、本当に『御苦労さま』という気持ちです。」と述べられました。

そして世界各地での紛争や飢餓によって、失われたり、危機にさらされている多くの子供達の上に思いをはせられたあと「また国内でも幼児の虐待は、大きな問題となってきています。多くの人々に祝福されて生まれてきた子供の親として、幼児を取り巻く環境が、より良いものとなるよう、子供たちが温かく見守られ、安心して暮らせる、平和な世の中が実現することを、願わずにはいられません。」とおっしゃるのです。

殿下の我が子への愛が、国の安らぎ、世界の平和の願いへと昇華してまいります。

お言葉が続きます。

「子供の命名に当っては、漢文学や国文学の専門の方々から、複数の候補を挙げて頂きました。・・・（中略）・・・選考に当たっては、皇室の伝統をふまえながら、字の意味や、声に出した響きが良く、親しみやすい名前が良いというふうに考えました。

両陛下には、私たちが考えるようにと、全てを任せていただいたことを、大変ありがとうございました。

候補の中では、孟子の言葉が内容としても、とても良いように思いました。また敬と愛の二文字が入っているのも良いと思いました。

とかく人間関係が希薄になりがちな今の世の中であって、人を敬い、また人を愛するということとは、非常に大切なことだと思えます。そしてこの子供にも、この孟子の言葉にあるように、人を敬い、人からも敬われ、人を愛し、人からも愛される、そのように育ってほしいという私達の願いが、この名前には込められております。・・・後略・・・

慈愛に満ちた尊い親心が、一言一言にじんんでいます。

そして殿下の我が国の世情を憂慮なさいます御心が、「人間関係が希薄になりがちな今の世の中であって・・・」のお言葉に深く込められています。また国民等しく「敬愛」の徳目を思い起こすようにとの尊いお気持ちを拝察することが出来ます。

国民が互いに敬愛の心を持ったとき、ヘジコチュウも飛ばなくなり、自分勝手主義も姿を消し、犯罪も減少することは間違いありません。敬宮愛子内親王殿下の命名は、皇室からの「心の教育」の発信とも受け止められます。

さて、敬愛といえば、西郷南洲翁の有名な敬天愛人の四文字を思い浮かべる人は多いかと存じます。

西郷遺訓には敬天愛人について次のように記されています。

「道は天地自然の物にして、人はこれを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我れも同一に愛し給ふゆえ、我を愛するを以て人を愛するなり。」

私なりにやさしく申しますと、

人は自然のお恵みによつて生まれ生かされているのだから、天地自然に感謝し、敬うことが、人間本来の道なのだ。

しかも天地自然の恵みは、全ての人に分けへだてなく注がれている。人も自分も等しく神の子なのだから、自分を愛する心を持つて他人を愛しなさい。これが天地自然の道であり、同時に人の道である。と説いているのです。

「大自然は真理であり、愛であり、神である。」

この思想の中には、個人主義的な思想はコレツポツチありません。

正義も誠も平和もその源は敬天愛人に発し敬天愛人によつて具現されていると考えていいのではないのでしょうか。

このことに全人類が思いを致すとき、国際紛争も、宗教戦争も、犯罪も影をひそめていくことでしょう。更に、地球を虫ばみ続けている環境汚染も解決の方向へ進むことが出来

ると確信致しております。そうです、「敬天愛人」こそ神道思想の真髓なのです。

今こそ神道の出番なのです。神道こそ世界の宗教たり得るのです。

秋あたかも明治維新の大元勲、西郷隆盛公歿後百二十五年、『南洲翁の御霊よ、願わくば、天かけり国かけりまして、平成維新の先頭に立ち、導き給え、導き給え！』

(熊本県 大江八幡宮 宮司)

大和魂

井 出 舜すゐる

「ちはやぶる神の御代より一筋の道をふむこそ楽しかりけれ」

「おごそかに保たざらめや神代より受継ぎたる浦安の国」(明治天皇御製より)

さて「大和魂^{やまとたまし}」とは日本人の心又国体の精神である。背景には、我神道の「敬神崇祖」の道、根源には神代から神の血筋を受けた天皇が神から受けられた国家として、この国を開き、その伝統をもつて国家を成立せしめて来たとされる。「神の血筋」とは、太陽神の尊厳が、我本宗と仰ぐ天照大御神に帰依され、その御心を戴いたニニギの命の天孫降臨により、初代、神武天皇より数え、紀元二千六百六十二年、天つ日継の御子として、今上天皇百二十五代、連綿となく継承されている民族の心こそ、「大和魂」と言つても過言ではない。又祝詞^{のりと}の如く、言葉に「言霊^{ことだま}」があり、その幸ふ国の歴史的文化でもある。

この日本精神を根源とした民族は平和を愛し、寛容な心を持っており、歴史的にみて、外国^{とくこ}より伝来した、仏教、儒教、朱子教、近代には様々な宗教をも同化させ、よりよき文

明を開いて来た国民である。

しかし、長い歴史上には、二つの変革を見る事が出来る。それは、大化の改新（六四五
年）と、明治維新（一八六八年）である。大化の改新は、中大兄皇子中臣鎌足が、異文化
仏教信仰の時の権力者、蘇我氏を廃除し、年号を「大化」として、我国体をつくり、のち
天智天皇、天武天皇には後の律令制度の制定に寄与された。この時代にわが国体独自の基
礎づくりがなされたと言つてよい。

明治維新・封建社会の打破と近代国家づくりの、日本国の統一と独立を求めて・こ
の精神（大和魂の芽生え）から志士達を始め、尊皇攘夷の思想、これが維新の思想の原動
力となった。「君が代は巖いわとともに動かねば、くだけてかえれ沖つ白浪（伴林光平）」

今から百三十四年前、津波のようにおしよせてきた外圧のさ中に、われらの父祖ふそは、王
政復古の大革新を断行して、国内体制を整え近代的国家としての第一歩をふみ出した。

十九世紀後半のアジアがほとんどヨーロッパの植民地と化した時、我が国のみが欧米諸
国の侵略に抵抗し、よくその独立を維持した目覚しい、民族的活力は、今なお全世界の人
びとの関心を集めているが、その難局克服の先頭に立った者こそ実に維新の志士と呼ばれ
る人々であった。志士とは、①、高遠雄大な志ある人、②、道に志を有する人、③、世を

救う志のある人、④、国に尽くす志のある人、⑤、義を守る人、⑥、節操のある人。

幕末になり、内外の危機に対処するために国内体制を变革し、欧米列強の外圧から民族の独立を守ろうと志向する人びとが出現するに及び、「尊皇攘夷」のために献身した一群の人びとを「志士」と呼称するようになった。

その志士が特定階層の出身者に限られていないことは、「諸賢伝」の中より伺える。

志士の本質をとらへるには、彼等の階級的地盤を分析するのではなく、彼等を維新者としての実践にかりたてた志士精神の共通性に着眼する方が、歴史の実態に即した考え方と思う。

古橋暉児てるじは、その名を知る人も少いであろうが、安政四年頃水戸斎昭なりあきの告志篇こしへん・明君一班抄めいきんいっぺんしやうを読んで感激し、国事に目を開いた志士であった。安政六年（一八五九）伊勢神宮に詣で、本居宣長の「直日靈」なおひのみたまをよみ、文久三年九月いよいよ平田門に入り、国学につらなる同志の人びとと往来して、講演を開いて村人に尊皇攘夷の道を教え、農兵の組織をつくった。これは、「大和魂」の迸りほとけから興った志士の精神である。

幕末勤皇歌人として有名な伴林光平ともはらひるへいもその著「おもいで草」おもいでくさの中で「筆を以て梓はこに比ひす」と記して、次の如く述べている。

「文人が筆をにぎるは武士が杵ほことると等く、やむにやまれない時だ、だから文人が筆をとつて国家社会のことを論ずる時もそれと同様の心構なまであるべきなのに、一身の事を考え、命を惜み、君のため、国の為に発言しなければならぬ事を発言せず、書かなければならぬ事も書かないで黙だまつてゐるのは、戦場にありながら一身一家のことを考え命を惜しむ臆病者の比類たぐひと云うべきである。

久留米水天宮の神官の家に生れた、真木和泉守いずみのかみも、人と生れては、身分階層の如何いかんを問はず、学問をしなければならぬ、学問をせねば人の性さがが善であることもわからず、歴史の盛衰にも気がつかず、現実社会の批判もできない。ただ五穀ごこくを食して前向きに歩くばかりでは、人間の形はしてゐても犬や猫と同じだ。」と述べている。「大和魂」は消える事なく、日本民族に生きている。人生と同じく、いつも神風が吹くとは限らない。敗戦によつて神道の信念に冷水を浴せられ立場を苦しくさせた。しかし、ひるむ事なく言霊の幸ふ国日本精神を崇敬し大和魂の再認識と愈々御国の立栄えを祈らねばならない。

(長野県 諏訪神社 宮司)

うまし世に生まれて

佐古一冽

今年は午（うま）歳です。「うま」と言うコトバは、全ての褒め言葉で例えば日本をうまし国と言ひ、皆さんのような美男・美女をうましおとこ、うましおみなと申します。もつとも今日は、その例外もおられるようですが……。

ご承知のように、馬は足が長く頸も顔も長い、但し皆さんと違って鼻の下は短い。その性格はと言いますと、警戒心或いは恐怖心の強い動物で、反面おとなしく素直で愛情をもつて扱えば、飼ひ主を信頼し命令によく従う馴染み易く飼育し易い動物。丁度私の女房みたいなものです。しかし油断をすると足で蹴られるので、注意を要します。

馬は人間の乗り物、と同時に神様の乗り物でもあります。従つて神社に奉納されますが、やがて木で作った馬更に板に描いた馬が登場します。これが絵馬の始まりです。現在絵馬にはいろいろな願い事が書かれますが、その願い事の傾向はと申しますと、1 健康。2 合格祈願。3 家庭円満。4 結婚。5 幸福。6 仕事。の順になります。特に男性は、合格や就

職そして仕事上の成功、厚かましいのは宝くじ・競馬競輪の金銭獲得祈願です。女性のほうは純真そのもので、恋愛・結婚・妊娠・安産・子育てです。そして総じて女性の半数近くが、家族や恋人など自分以外の幸せを願い、心広く思いやりがあります。一方男性の七割が自分のみの願い事を記します。これを称して自己チュウと言うのでありますが、私は家では亭主関白、神社ではワンマン宮司で、蔭で愛称コマッタちゃんと言われております。娘がいつも言うのですが、「お父さんは自己チュウで、頭が禿げているからピカチュウだ。そして大酒のみのアル中だ」と。この自己チュウ・ピカチュウ・アル中の三つを揃えて何というかご存知ですか？ “サンチュウ ベルマツチ”と申します。



さて、今年がうま歳だからではありませんが現在、我々は史上最高の『うまし世』の時代に生かされております。すなわち衣・食・住どれをとつても快適・便利・豊富であります。戦後間もない昭和二十二年の香淳皇后様のお歌に、「身に纏う 衣にだになき 人々 にかくも降れる 秋の夜の雨」があります。当時は、食べる物・住む家・着る着物も満足にありませんでしたし、巷には親を失った可哀想な戦争孤児があふれていました。それを思うと、まさに隔世の感が致します。

今や人間の寿命は延び、栄養状態は良すぎる程良い。車はもとより新幹線・ジェット機の超高速の輸送手段、通信は携帯電話・インターネットの時代、かつての三種の神器テレビ・冷蔵庫・洗濯機は全家庭に普及し、冷暖房完備の日常生活。そして余暇・娯楽・スポーツなんでもござれ。加えてうまい酒は飲み放題、但し金さえあればの話。

かつて十九世紀は、結核や腸チフスなどの伝染病が蔓延、高い幼児の死亡率を示し、最高の乗り物と言えば馬車。夜は蠟燭や行灯の明かり、週七十二時間以上の労働、そして夜空に星を仰ぐ屋外便所の時代でもありました。この百年の間になんと、それ以前の二千年よりも多くの発明がなされたと言われますし、現代は一万年前の農業の革命つまり農耕の始まりと、二百年前の産業革命に次いで人類史上三番目の大きな転換期に立っております。しかしこれを、正直に喜ぶことはできません。

所謂『ローマ白書』では、人口の増加・エネルギーの枯渇・食料難・環境汚染を指摘かつ警告し、特に今日自然破壊や地球温暖化がとみに進んでいます。『風もお日様も川もゴミを出さない 雨も雪も雲もゴミを出さない 雀も鳥も鷺もゴミを出さない 動物の排泄物は植物のご馳走で草木が育つ 植物の排泄物は動物のご馳走でみんな喜ぶ 残念だが人間だけがゴミを出して地球を毀す』我々人間は、生活廃棄物・産業廃棄物やフロンガス・

ダイオキシンと言った有毒ガス果てはお尻からも臭気ガスを出します。地球で一番の悪質な害獣、それが人間であります。

今や「地球」そのものが一個の生き物と認識されています。地球と人間はお互い奇跡的な生命体同士で、人間社会が健全ならば地球も健全でその逆も又真という事になります。故にオゾン層が破壊され、大気汚染・森林破壊・環境破壊・温暖化が進めば、生きとし生ける生物・人間そして地球そのものも絶滅、＼さよならだけが人生＼と相成るのであります。

天才天文学者ホーキング博士は「限らない全宇宙で、この地球なみに文明の発達した星の数はおよそ二百万程ある。だがしかしどんな星でも、地球のように文明が進みすぎると、その星は極めて不安定になり加速度的に自滅してしまうのです。」と予言しております。そして、東京都知事で小説家でもあります石原慎太郎氏は「自分は物書きの直感でしかいえないけれども、人類はあと六、七十年しか持たないのではないか。」と言われています。我々人間は、現代の類い稀れに恵まれた『うまし世』に感謝すると共に、厳しい地球の未来を謙虚に受け止め、人類の英知を結集して『うまし国のよき地球』を後の世まで子孫に残し伝えて行きたいものであります。

その為には、吾神道のご登場を願わなくてはなりません。しかし丁度時間となりました。制限時間のベルも鳴りました。それでは皆さん、この続きは次回のお楽しみ。以上で「神道が地球を救う」前編を終わらせていただきます。

(京都府 松尾大社 宮司)

おはらひ
大祓は、今日より始めて、今、一歩前進

大宮四郎

齡をとると、さまざまな考へが生まれるチャンスに恵まれるものである。毎日奉唱する「大祓詞」にある、今日より始めてといふ言葉がそれである。

大祓詞の末尾にある、「今日より始めて」といふ文言に注意したい。

現在、神社本庁制定の「神拝詞」には、この今日より始めてといふ言葉がない。

ところが、神主の魂を育てるといふ石上神宮の「神拝詞」には確かにあるのである。

これこそ神道には色々な考へ方が生れるといふチャンスがあるといふ訳である。

神道には「祓へ給へ、清め給へ」といふ祈りがある。この祈りこそ、今日より始めてといふ信仰の原点である。

(子供たちのわらべ歌)

夜が明けた 夜が明けた

もう夜があけた あけた あけたと

早起の 雀が お庭の松の木で・・・

お隣りの 松の木の上から

おてんとさまが 眞赤なお顔を・・・

・・・

夜が明ける 陽がのぼる

(古語拾遺)

あ はれ あな面白 おもしろ あな 手伸し たの

あな清明 さやけ

おけ。

あつぱれ 祓へ給へ 清め給へ の生活が今日より始めて展開する。神々と共に、一歩前進といふ、中今の世に生きる生活が始まる。

齢をとることはすばらしい。いくつになつても、今日より始めて、祓へ給へ、清め給へといふ世界が展開する。これが、中今に生きる日本人の誇り。

(われら今、中今にあり)

「中今に生きて」——(照介)

椿大社の、山本行隆宮司の書である。中今とは刻一刻、いのち一杯生きたいといふ記録

の書である。

(神樂歌)

神道は千道^{ちみち}、百道^{も、みち}、多けれど

中なる道こそ 神の通ひ路

中とは神々と結ばれる世界である。いくつになっても、今日よりはじめて生きる、祓へ給へ清め給への世界である。

亡き母より誕れ給ひし、八月一日、神の世に旅立たれた山本宮司は永遠に生きて、最後の書に結んでいる。

“今日は再び来ない”

(終)

(愛媛県 忽那島八幡宮 宮司)

すでに神道は出番だ！

戸内康雅

私共日本人は、三の字が好きだ。三の数字が安定しているから、三大ばなしなどが好きだ。また、三大ナントカとか、三大ナニヤラとか、いろいろあります。

さて、今日は、それと同じに、三つのお話しをしようと思います。

先づ第一に、近ごろの生活で気になることがあります。とかく、近ごろは夜型の生活が多くなっています。みんなテレビなどで、つい夜遅くまで寝ない。そのため、朝早く起きられない。

ラフカディオ・ハーンつまり小泉八雲だかが書いて居りますが、……。松江の朝、「パーン、パーン」

と云う拍手の音で、目が覚めたと。この「パーン、パーン」の拍手は、東に登られた太陽、つまり

「お天道さま」

を、拝んでいる土地の人々です。

このお天道さまとは、私共日本人には、伊勢にお祭りされている大神宮様です。

むかし、伊勢の大神宮様は、伊勢から御師おしと云う人達が、先年も古くから全国にお神札ふだを授けられました。行つた事もない伊勢に祭られている大神宮様、その大神宮様のお神札が、何故全国のみんなの家庭で祭られたのか？

それは、毎朝、昇られるお天道さまが、ありがたい、あゝ有り難いと、拝まれて来たからです。あの有り難いお天道さまを地上で祭っている「お伊勢さま」、直接伊勢まで行けなくとも、あの「お天道さま」さえ、毎朝

「パーン、パーン」

と拝んで毎日を、平安に暮らす。これが、私ども日本人の生活の、朝の神事かみことでした。

ところが、近ごろでは、この「パーン、パーン」の音が聞こえない。

どうも、それが近年、神宮大麻の拝戴数が少しづつ、でも少なくなっていると云うことと、繋っていないか？ 私は、それが気がかりでなりません。

次に第二に、朝起きたら、自分の住んでる処、その地域を広く見回してみたら、どうだろう。自分の住んでる処が、今どうなっているか、だけではなく、昔からどうなって来た

か？これからどうなつて行くか？　までも、見通し見回すこと、であります。

それは、災害だけでなく、古くから河川、噴火、地震はどうだったか、植物や動物がどう育っているか？　など／＼です。

古くから人が住んでいた処とは、どんな処か、これから新たに住むとしても、その土地は昔はどうだったか？　そこに住んで来た先祖さまは、どのような苦勞をして来たか？　など／＼を振り返ること、これは朝の神事―たとえ神社の前でなくとも―として、「そのところの鎮守さま」の神棚を、

「パーン、パーン」

と、拜んで振り返ることです。

それは「ところの鎮守さま」は、その土地、そのところの象徴でもあります。

その土地の樹木が、草花が、生き／＼として育っているか？　その土地は汚れてはいないか？　今日の環境汚染なども、この毎朝の神事―神棚拝礼が、おろそかになったからではないか？

皆さんの家庭には、神棚はお在りだろうと思いますが、

「パーン、パーン」

と、家族そろって、拝みましょう！

次に、第三になりますが、太陽の暖いお守りのもと、その土地の神さまに囲まれて、自分よりずーと古い昔から、祖先の皆さま方より今日まで、また更に今日より将来の子や孫たちへ承け継ぎ、自分たちの生命の元を、振り返ってみる。つまり、祖先から自分、自分から子孫、その生きている私達の生命の元、「お先祖さま」に

「パーン、パーン」

と拝んでほしいのです。勿論、仏式の方もありますから、合掌を捧げて頂いて良いのです。私が初代だから、この家には先祖がありません！ などと言いつけるのは、自然薯と同じです。先祖がないなどと云うのは間違いです。お互いが、みんな先祖があります。先祖から子孫まで、みんな同じ血が通い合ったことを忘れないためにもです。先祖さまを祭りましょう！

この三つが、実はわが国の美しい気風をつくって来たのです。太陽と鎮守さまと、先祖さまとで、争ふ必要はないのです。家内中、町内、国中みんな同じく、一つにまとまる。

この三つを実践する毎日が、生活を美しく、古くから

「平安くませ」

と、云います。平安であることが、「幸く」つまり「しあわせ」なのであります。難しい行を修めないと救われないのではありません。

神の道は、だれでもが、いつでも、どこでも出来る人の道なのです。それが、我が国の平和の姿でもあり、この教えは世界を救う道なのです。ボランティアやODAで金を出して、世界を救う必要はありません。

世界中の人々が、この三つを毎日正しく生活するならば、世界は平和なのです。この三つは神道の道ではあるが、人の道でもあります。この三つを大切にして来た日本人、祖先以来の道であります。

すでに神道は出番です。この神道は、学ぶだけでは、何なりません。私ども一人ひとりが、この神の道を毎日大切にして実行することにあります。ぐずぐずしている時ではないのです。

すでに出番なのだから！

神の御声

—— 敬愛の碑と浩徳の花 ——

大野 康 孝

あれいでし みどり児のいのち かがやきて

君と迎ふる 春すがすがし

平成十四年の歌会始めの、皇太子妃殿下の御歌であります。

奉祝 皇孫内親王殿下御生誕

皇太子殿下御成婚より満八年余の平成十三年十二月一日、畏くも皇孫内親王殿下御生誕の朗報に、我が国内は奉祝慶賀の歓声に沸き立ち、天照らす光明に満ち輝きました。

職場や家庭にあつては、満を待してTVニュースの特別番組が流され、道行く人々には直ちに、電光掲示板やラジオ放送・新聞の号外記事等が、千秋待望の慶事を大きく大きく競って伝えました。

あの感激は、胸の高鳴りは忘れ得ません！

瞬時に世界中を駆け巡った我が日本の皇室の弥栄ノ皇室とともに、国民こそぞって心よりお喜び申上げ、渾身の赤誠をこめて、萬歳の声高らかに絶唱申し上げた次第でした。

振り返ってこの年もまた多事多難激動の一年でした。深い混沌と暗雲に世界の情勢は日本の行方は一体どうなるのだろうか、先行きが憂い案じられる中でのこの度の御慶事ノ本当に心晴れ晴れと祓い清められ、安堵した次第でした。皆さんも、私達日本人は本当に皇室によって支えられ、守られているのだと気付かれたことでしょう。

皇太子殿下御成婚と敬神愛郷の碑

平成五年六月九日、皇太子同妃両殿下御成婚御当日の同時刻、本渡諏訪神社においては境内を埋めつくす氏子崇敬者多数とともに、この慶事の奉祝祭を斎行。引続いて奉祝記念事業の「国旗掲揚塔大改修竣工除幕の儀」を盛大に斎行しました。

その規模と概要は、台座は総みかげ石製で高さ二メートル四十センチ・幅一メートル八十センチ。掲揚ポール高十八メートルを誇り、天空高く輝く金冠までの総高は実に二十メートルを優に越します。

正面大鳥居右奥の境内吉き処に、堂々と大地に根差し蒼穹高く聳えて、日の丸を翩翻となびかせてくれる様子は清々しい限りです。

その台座正面には当時、靖国神社宮司として奉仕の現名誉宮司揮毫による『敬神愛郷』の字句を金色にたがね深く彫刻致しました。そして側面の刻銘には『奉祝 皇太子殿下御成婚 皇紀二千六百五十三年 平成五年癸酉歳六月九日』と刻ませて戴きました。

この名誉宮司揮毫を色紙に複製、関係各位に記念品として贈呈。その挨拶状に「婚礼は萬世の始めなり」と支那の古典・礼記を引用させて戴いたことを申し添えます。

敬宮愛子内親王さま御命名

ご生誕より七日目の命名は、実にお優しい素晴らしいお名前でした。神の恵みと人の情けに包まれて生かされいきる、つつしみいとおしむ敬愛の心。まさに時代に相応しい御名と謹んで拝聴した次第でした。

そしてそのお名前を拝誦していると、欣然天にも昇る感動に包まれました。

誠に恐れ多い事ながら、皇太子殿下御成婚を心より奉祝記念して除幕した国旗掲揚塔に燦然と『敬神愛郷』の碑銘が、御称号とお名前の「敬愛」の文字が、あざやかに鑿深く記されているではありませんか！

ああ！恂に奇霊にして妙なる赫々たる諏訪大明神の御神威。あゝまさに我が国は皇室をいただく神のみくに、神国日本！

畏くも皇太子殿下御成婚のその日に、氏子崇敬者の赤誠捧げ奉らんと祈りに捧つて建立した記念の国旗掲揚塔に、何と、此のたび御生誕の皇孫殿下のすがすがしいお名前が燦然と輝いているではありませんか！

身も心も感激に打ち震え、滂沱の涙は止みませんでした。あ、御民吾れ生きる証あり。

神職としての私の目標

私ごとき田舎神主でもそれなりに、生きる目標があります。父祖累代の奉仕神社である本渡諏訪神社をしかと守り受け継ぎ、御社頭の御隆昌をはかることです。

規模の大小はともかくも充実した鎮守の御社として、氏子の心の拠り所と仰ぎ誇られる安らぎと元氣進発の、すがすがしい神まつりと神社整備をと、皇室の御慶事ことある毎に記念事業をなし遂げ、日夜、一步一步と努力前進し、理想の実現を目指しています。

神域保全工事と自生蘭の発見

そのお諏訪さまの神垣に自生の蘭を発見したのは今から二年前の事でした。境内中央にあつて、御本殿東北側に亭々とそびえ立つ樹齢三百年余の大楠の地上より約八メートル程の二股に分かれる部位に、大人の両手で一抱えほどもある春蘭の大株が自生しているのを折からの皇紀二千六百六十年（西暦二千年）記念事業施工の工事関係者が、指さし教えて

くれたのが始まりでした。

その工事とは神社環境と緑の保全の為に、御本社境内全域の表土を平均して一尺程を掘削して入れ替え、その上に新たに玉砂利を敷き替え保水の便を図るものです。

更に、御影石による正面参道と恵比須神社にいたる参拝道の石畳み工事および駐車場にいたる車道兼用西参道の透水性の敷石による美観と環境保全をはかる境内神苑整備の大事でした。併せて、駐車場隣接の西門大鳥居脇に新たに銅板葺きの堅固なる手水舎を建設した次第です。

皇孫殿下御生誕奉祝記念事業

さて皇孫殿下御生誕の奉祝記念事業として、さらに石灯笼の改築と総檜木製銅板葺きの立派な社頭揭示板を新築、御社頭の荘厳をはかりました。

そして私事にわたり恐縮ですが、かねて崇敬する神風連の志士ゆかりの新開大神宮には肥後の名刀匠延寿宣次作の最高傑作と思われる二尺三寸七分の太刀を奉納しました。この刀は、天皇陛下御即位大典を奉祝して、先年、私が打って貰った大業物で特に大事にして参りましたが、このたび改めて精査し、自筆の奉献趣旨と願意を茎に写して追刻銘切りしひたすら天壤無窮を祈って、心晴ればれと大御神様にお捧げした次第でした。

御製碑周辺に咲き繁る自生蘭

やがて拝殿正面左右の「昭和天皇御製碑」並びに「建立趣旨副碑」の両脇にそびゆる御神木、樹齢二百数十年を経た大蘇鉄にも十株余の若い蘭が自生しているの気づきました。深山幽谷の蔭にひっそりと咲く、幻の花とも称える天然自然の自生の蘭。人手では培養がほとんど不可能であると聴くその蘭が、市街地の中心地のわが産土鎮守の杜にいきいきと芽生え茂っているのです。

驚きと嬉しさ、感激で胸が大きく膨らみました。一体全体、この蘭の花はいつ頃咲くのだろうか。どんな容姿でどんな色、その香は名前は何と称するでしょうか。色々な想いが深まってゆくばかりです。

自生蘭の名は、浩徳の花

明けて平成十四年、大楠と御製碑脇の自生蘭の株は愈々青く中庸の葉肉を大きく茂らせています。春四月となりました。英霊顕彰奉慰の各町の招魂祭も桜花と共に終わり、若葉の緑が目には優しいこの頃、ふと見上げれば蘭はひっそりと、しかも力強く、いくつもの蕾を付けているではありませんか、春蘭です。

開花は四月の中旬でした。始めに大楠の花が、気づいた頃にはもう両手で抱きかかえる

ぐらい一杯に小粒の花が一斉に咲き乱れていました。それはそれは無上の感激で、時間さえあれば仰ぎ眺め、参拝の人々の手を引き、指さし知らせる日々となりました。

満開の蘭は神様の花なのです。大蘇鉄に宿る蘭も、楚々と清らに開花してくれました。

昭和祭奉仕後の宮司挨拶には当然ながらもこのことを報告。共に仰ぎ見た次第です。

まさに瑞兆ノ総代世話人みな大喜びです。しかも、その花の名も詳しい方に調べていただき「浩徳の花」とたちまちに判明しました。皇太子殿下の御名そのものです！

神国日本 神の御声

あ、またもや神の御声、心が昂まり目頭が熱くなりました。至誠は神に通じるのです！
静かにさざ波のように伝わるわが大神様の更なる御神威と靈驗。氏子崇敬者の多くは、「ほんなこつ不思議かありがたか。たまたまやろうバッテン偶然だろバッテン、やつぱり神様じゃるけん、お諏訪さまお導きばい。」と異口同音に心から賛嘆してくれます。
敬神愛郷の碑の感激に、さらに加えて足しての神威の顕現ノ皇室敬慕・恋闕の心に通う神の御心ノ眼にはみえぬものが顕れて、今ここにその証しがあるのです。

新春歌会始の皇太子妃殿下のみ歌と、この春蘭「浩徳の花」とが重なり合い一体となつてこの上もない感動を覚えさせてくれるのです。

あれいでし みどり児のいのち かがやきて

君と迎ふる 春すがすがし

ああ恂に奇霊にして靈妙なる赫々たる御神威、大神様の御声。あゝまさに我が国は皇室を仰ぎ戴く神のみくに、神国日本であります！

神の御声 ―サムシンググレート―

最後に一言申しあげたく存じます。それは、わが神社神道には偶然という言葉がないという事です。すべては自然であり必然のことなのです。なるべくして成る。すべての事は神のみはからい、神意なのであります。

靈妙なる神の計らい！これを英語で申せば「サムシンググレート！偉大なる神の摂理」普段は眼に見えぬが、耳には聞こえぬけれども、たしかに確実に、何かあるもの！

どうぞ皆様方、至誠は神に通じます。神は守りたまうのです。確固たる信念『神国日本み民吾れ』の祈りに徹し励もうではありませんか。清心の氣をよみがえらせましょう！

(熊本県 本渡諏訪神社 宮司)

植樹祭

徳久豊彦

去る六月二日午前十一時、私は何気なくテレビのスイッチを入れました。すると第五十三回全国植樹祭の実況放映が行われていました。丁度、天皇・皇后両陛下が山形県知事の先導で会場である山形県最上郡金山町の「遊学の森」に御到着になり、お野立所の御席にお付きになりました。

開会のことばに続き、君が代を斉唱し、国旗・県旗・大会旗を掲揚。衆議院議長である綿貫民輔大会会長と高橋和雄山形県知事が、主催者を代表して挨拶し、天皇陛下がおことばを述べられました。その中で、資源と防災面での森林の重要性に触れられ、「手入れの行き届かない森林は、木材生産や災害防止の効果を減退させます。過疎化の進む山間地では活力ある森林育成に、多くの人の協力が求められています」と森林への関心が高まるよう期待されました。

この後、天皇陛下にはブナ・トチノキ・カツラの苗木をお手植えになり、皇后陛下には

オオヤマザクラ・ネムノキ・ヤマボウシをお手植えになりました。また、天皇陛下にはブナ・スギの種をお手播きになり、皇后陛下はネムノキ・ヤマボウシをお手播きになりました。また招待者も両陛下に倣って二十四種の樹木を記念植樹し、参加者代表は記念播種をおこないました。

なほ、お手植え・お手播きされた木に関しては、山形県のブナ天然林は全国一の面積を誇り、最上地域には日本有数のトチノキの巨木、日本最大級のカツラの巨木がある。また皇后陛下は「ねむの木の子守歌」を作詞されています。

わが佐賀県では、来る十月六日全国育樹祭が、温泉で有名な嬉野町の総合運動公園で執り行われます。これには皇太子殿下、同妃殿下お揃いで、御臨席される御予定になっています。この事は今から十五年前の昭和六十二年五月二十四日、全国植樹祭が昭和天皇御臨席のもとに、この嬉野町の同じ所で執り行はれました。その時植樹された苗木を大切に育てて来て、十五年後の今年、育樹祭を執り行って更に関心を深め、その手入れ、管理に万全を期し、立派な森林に育て上げようとする、植樹祭・育樹祭一貫した大切な国家的行事であります。

古来、日本民族は森を神霊の鎮まる所として、神奈備の森、或は鎮守の森と崇めて大事

にして来ました。「神奈備」とは神います処、神の宿る場所、神が天から降りて来る場所として信仰された山や森を言います。

万葉集では神社と書いて、モリと読ませています。神の社のある聖なる森という意味です。

この日本民族の樹木、森に対する深い思いは、戦後荒廃した山河に、先づ木を植えることを始めました。国破れて山河ありと申しますが、この山河に緑の森を取りもどすことに国を挙げて取組みました。その現われが植樹祭であり、育樹祭であります。

森は二酸化炭素を吸収して酸素を排出すると言はれています。人間と有無相通ずる共存の関係にあります。また森は水を蓄え川の源となります。植物プランクトンを海へ運び、豊かな漁場となります。さらに木材として利用されることは勿論です。

いま世界は環境問題・地球温暖化問題に真剣に取組んでいます。そして国連では平成九年京都議定書を採決し、二酸化炭素削減を規制しました。この中で森林の持つ浄化力を高く評価しました。

神奈備の森、鎮守の森と森を神聖視し、大事にして来た日本民族は、今こそ民族本来の相に立ち返り、森を守り育て、自然との共存の道を進まねばならないと思います。

(佐賀県 與賀神社 宮司)

いのち

松本 スミ子

全国民がお待ち申し上げて居りました、皇孫内親王殿下の御誕生より早八ヶ月が過ぎましたが愛くるしい手をにこやかな笑顔をなされ、しきりに手を動かされる愛子様、御皇室の御慶事をニュースの報道の中で目をうるませながらの一時で御座いました。心が洗われ豊かになって行きました。尊い事だと思います。

今日八月二十二日はみづのえいぬの日なのです。いぬの日は安産祈願と申しまして皆様岩田帯を清祓にお持ちになられます。祝詞の奏上に「御霊を神様より戴き今日のよき日に清祓の式を仕へ奉る眞心を」と……神様の御恵みを戴いて岩田帯をしっかりとつける
と親の喜びと責任を嬉しく輝く時であります。生命を生み育てる喜びは女として親として誇りと重大な責任をひしひしと感ずるのであります。最近の状況は悲しい事があまりにも多すぎはしないでせうか。毎日の報道の中で目を疑ふ様な報道が多数見られます。社会が悪いとか親がいけないとか、議論がわきますが、日本はこれでいいのでせうか。あの美

しい日本の家族は社会はどこに行ったのでせうか。

工藤雪枝先生の特攻へのレクイエム。涙なくしては読めません。あの当時若者達は素晴らしい青春を持ちながら、父や母やはらからの後を信じ、殉じて行った多数の若者達その健気に涙する許りです。

特攻の生みの親とも言はれる大西中将は、終戦のその日に自刃なされ、その遺書の中に特攻隊の英霊に申す善く戦いたり深謝す（中略）隠忍するとも日本人たるの矜持を失うなかれ 諸子は国の宝なり 平時に処し（中略）世界人類の和平のため最善を尽せ 陸軍中将 大西瀧治郎

これでよし百万年かりねかな すがすがし 暴風のと月清し 籠次郎
とお詠みになり、多くの部下の許に行かれました。

「ああモンテンルバの夜は更けて」

一、モンテンルバの夜は更けて

つるるの思いにやるせない 遠い故郷をしのびつ、

涙に曇る月影にやさしい母の夢をみる

この唄を御存じの方もいられると思います。此の歌はある国際的な会議がありそれに参加

した折に比島の戦いの收容所跡に行き、慰霊の鐘がつるされた所で收容された日本の兵士がよく歌っていたと聞かされました。

モンテンルバに朝が来りや昇る心の太陽を

胸に抱いて今日もまた強く生きよう倒れまい

日本の土をふむまでは

こうした望郷の念にもえながら南の国で尊い命を落とした人々、如何に生命の尊さを思ふ。日常茶飯事の様にニュースを作る人もやはり尊い命であるはずである。

いぬの日に喜び勇んで希望の命

希望ある日本人として私達は生きるでなく生かされる喜びを持って天地の自然、神様に感謝して、大切な大事な生命を育て、行きたいものと思ひます。後を信じ殉じて行かれた人々のためにも、皆様元気で長生きをして行きませう。

ありがとうございます。

(長崎県 諏訪神社 宮司)

生命いきの根ね

村田和之

私達は神のお計らいにより、この世の中に生を受け、何のためらいもなく自然に、気軽に空気を吸い生きています。

では、その空気や太陽、光、熱や水も土も、この地球から無くなれば我々人間はどのようになるのでしょうか。

今年の夏は、ことの外暑く、記録的な暑い日々が続いております。

太陽は朝、東の方より昇り、夕方西に沈み、夜になると直接目に見えないので必要でないからと、一日の内半分位は無くてもよいのでしょうか。

キリスト教のエホバの神は全知全能の不死不滅「沈むことのない朝の太陽」とたたえませんが、太陽は夜になれば地球の裏側を廻っているだけで決して、その働きを一秒たりとも休んでいるわけではありません。

空気は太陽がこの世から無くなりますと三日間位は残っているそうですが、太陽は一瞬

たりとも、この地球から無くなれば人間を始め地球全ての生物は即刻死に至るといわれております。

しかし、私達はこれだけ大切な太陽や空気を税金も払わず、タダで好きなだけ自分勝手に使用しているのであります。

この地球の中で太陽の必要性を知り、太陽が基になっていることから、私達の先人達は「日」が「本」と考え「日本」という国の名前も生れ、太陽がこの世で一番大切と考え神と崇め祭ってまいりました。

また、私達日本民族の元となられる人も太陽の如くすばらしく偉大な神と崇め、天照皇大神と名付け崇高なる神と尊び祭ってまいりました。

日本最古の書物といわれる「古事記」や「日本書紀」によりますと、この世の中は、最初は混沌とした、卵が固まらないような、どろどろとした状態で、そこに造化の三神と呼ばれる天御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神が出現され、次々と神々がお生まれになり、次で夫婦の神として、イザナギノミコトとイザナミノミコトがお生まれになりました。

天つ神はこの二柱の神に対し、高天原の玉飾りの矛をお与えになり「どろ／＼として固まっていな土地をしっかりとした大地に作り上げなさい」と仰せになりました。

イザナギ・イザナミの二柱の神は矛で海水をコオロ／＼とかき廻し、引き上げますと、矛の先からしたたり落ちた海水が自然と固まって島ができました。

これをオノコロ島といいました。

次でその島を拠点として国生み、海生みという偉大な仕事にとりかかられたわけですが、初めに淡道之穂狭別あわじのほのさわけという今の淡路島を、次に伊予之二名いのふたなの島という四国、次に隠岐島おきである隠岐の三子の島、次で九州に当る筑紫の島、次に伊岐の島（壱岐島）次に津島（対馬）そして佐渡の島（佐渡島）そして本州に当たる大倭豊秋津島おほやまとあきつしまをお生みになりました。

古事記と日本書紀とでは島の名前や数の点で多少相違はありますが、このようにお生みになられた島々をまとめて大八島国と名付けられました。

この大八島国という語は天皇による国土統地を示す重要な意味を持っているのであります。

国生みが一段落し、次でイザナミの神が火の神をお生みになられた時、大やけどをしてお亡くなりになり黄泉の国に入られました。

あとに残られたイザナギの神は妻を慕い黄泉の国を訪問されましたが、その穢れた汚い様子に驚き、お帰りになられる時、筑紫の日向にある橘の阿波岐原の小門で禊祓をされ三

人のお子様をお生みになりました。

この三人のお子様が天照皇大神、月読命、素佐之男命という三貴子といわれる尊い神様であります。神代の国の天照皇大神がそのお子様にあたるニニギの命に命じ、この日本の国土を治めるようにと仰せられたのであります。

「豊葦原の千五百の瑞穂の国は是れ吾が子孫の王たる可き地なり、宜しく爾皇孫就きて治せ行くませ、宝祚の隆えまさむこと当に天壤と共に窮無かるべし」と天照皇大神より、ご神勅を畏み戴かれたニニギの命は三種の神器を奉持し高千穂の峯に天降られたのであります。

その時、皇位の継承のみ標としての三種の神器と同時に、天照皇大神様の稲穂の神勅を見逃してはいけません。

ニニギの命に対し天照皇大神は高天原の斎庭の稲穂をお授けになり人民の糧とし永遠に栄えるようにと仰せになられたのであります。私達人間は空気だけ、水だけでは生きて行けません。何かを食べなくては生きては行けません。私達日本人が生きて行く中で主食としてお米を食するようにと仰せになつているのであります。

お米は稲、「生命の根」「生命の基」になるもの、そこから「イキのネ」「稲」となつた

のであります。

その「稲」の手振りを神代より受け継ぎ降臨された場所が筑紫の日向の高千穂の峰であり、その主人公たるニギの命を祀るお社がこの霧島神宮なのであります。

従つてこの霧島神宮こそ、日本の稲作りの原点、日本民族のイキのネ、生命の根もとなのであります。

今も神宮では故事に習い、旧暦一月一日には天孫降臨の時、稲穂を蒔き散らし行手の霧を払った故事と、稲作をすすめた伝統にちなむ散うちまき籾祭という特殊神事が厳かにおこなわれているのであります。

日本民族は古代より伝わる大切な行事を次の世にも伝える為に神社や里々の住民達の手振りの中に受け継がれ伝えているのであります。

キリストの曰く「人はパンによらざれば生きるものに非ず」といいます。

西洋人にとって命の糧であるパンを得る道を教える祖先は人類にとって無上の大恩人であるかもしれません。

しかし、日本人にとっては米を取り入れ、これを食する道を教えたご祖先は米を主食とする人々にとっては無上の恩人であります。

従つてその大恩人たる天照皇大神を上座に祭つてあがめることは当然のなりゆきなのであります。

従つて米を主食として生きて行くようにとさとされた天照皇大神の稲穂の神勅は日本人として大切に伝えて行かなければなりません。

「米」「稲」は私達の生命の基になるものであります。

八十八回も手を加え大切に育て作り出した米、生命の基たる米、しかし今私達の廻りの現状はどうでしょうか。米を食しながら、その先人達の恩も忘れ、減反く、輸入く、と作ることさえ忘れ騒いでいるのであります。

稲作りは約二千三百年前、中国大陸より、金属文化と共に北九州に伝わり、その稲作りの暮しの中より生えぬいてきたのが我が日本神道であります。

皇孫今上陛下は今も米の祭を厳重に継承されておられます。

毎年陛下ご自身が皇居の吹上御苑にて御田植される手振りを皆さん方はTVや新聞でよくご覧になっていると思います。

神嘗祭かんなめさい、新嘗祭しんじようさい、そしてご一代一度の大嘗祭等とりっぱに斎行だいにじようさいされております。

稲作りの道は日本国民の食を足らす道であります。

天照皇大神様は稲作りの道と、天地の神々を祭る道を教えられました。

イザナギ、イザナミの神が、この山川草木、虫魚鳥獸等すべてのものを生み、私達人間も「イノチ」の継がる「ハラカラ」生まれ、神々と継がっていると教えられました。

皇室のご祖神である天照皇大神様が我々日本国民の総氏神といわれる所以であります。

「豊葦原瑞穂国」と昔からいわれますことは豊かな収穫の続くみずくしい稲のできるすばらしい国であつてほしい願望も込められているのであります。

天照皇大神はニニギの命に勅をさめを仰せ下さいました「宝祚たからひつぎの隆さかえまさむこと、まさに天壤あめと窮きわまりなかるべし」と。

稲作り、神祭りをするところこそ我皇室と国家、国民の限らない隆昌に継がるということであります。

太陽も空気も光も熱も私達はそれがなければ絶対に生きて行けません。しかし絶対に必要なもの程私達はタダで与えられ、使用料金も税金も払わず使用しているのであります。

私達人間の生命も、親はタダで子供にゆずる。私達の先人達はこの尊い有難さに感動し、感謝し神と崇め祭つてきました。

私達人間は神々の恵みなくして生きて行けないのであります。

ご祖先無くしてここに生まれてはいません。皆さん、私達人間は天地自然やご祖先のお恵み無くしてこの地球上に一日一夜も生きて行けないのです。

目覚めよ、この素晴らしい日本の伝統文化、生命の基になる「米作り」の手振りを。日本人に生まれた幸福と責任を教え広げようではありませんか！

（広島県 長束神社 宮司）

神道講演構成法

神道講演の大先達、渡辺武清先生を始め、野村清臣先生、宮地保先生、河本眞澄先生、石井寿夫先生、佐古幸嬰先生など神社界のために一生を捧げられた大先生が神去りまして久しい、先生の教えの万分の一でも恩返しできればと門下生は各地で祈りの庭のひろがりを願ひ神明奉仕に励んでいます、講演内容を組立てる構成法を参考迄に佐古先生の「庭のおしえ」より抜粋し、神道講演の手引きにしてみました。

「論」と「証」

一般には序論、本論、結論からなる三分法が主ですが「序」「論」「証」「結」の四分法からなる構成法の必要性を説かれています。

それは、本論をさらに分析して「証」を独立させ「論」の正しさを証明する。

「論」で神道の古典を引用し大綱をしめし、その真実性を証明するために具体的な例話「証」を語る。

内容として

I 何のために語るか（祈願）

- 1 神命をかしこんで立つ
- 2 まず祈れ
- 3 正しい志しを
- 4 まじめな生活を
- 5 話は生きている

II 何を語るか（内容）

その一 体験を語る

- 1 体験を語る
- 2 体験を反省する
- 3 二つの「門」

- ① 自然のいのちのなかに神様を見る
- ② 人間のいのちのなかに神様を見る

その二 講演の内容

1 岩戸を開け、門にとどまるな

2 位に中す

3 講録をつくる

① 話の材料をあつめる

② 話の材料を選ぶ

③ 話をまとめる

④ 特に切り捨てについて

Ⅲ いかに語るか（表現）

1 わかりやすく語る

① 話はわかりやすく

② 自分の言葉で語る

③ 抽象的な論理よりも具体的な事実を

④ 話には“うねり”を

2 至誠をもつて語る

① 主催者にも聴衆にも深い感謝を

② 至誠をもつて語る

③ 遺言の覚悟

3 自然に語る

① 講録をはなれて

② 自然に語る

③ 個性ある語りぶりを

以上、紙面の都合で構成法を簡単に記してみました。詳細については各地で活躍している門下生、又は、事務局迄お尋ね下さい。

第十八回神道講演全国研修大会 鹿児島大会の記録

於 霧島神宮

名 譽 会 長
顧 問

々 々 々 々 々 々 々 々 々

工藤 伊豆	阿部 信	川上 親昌	下條 洋二	田村 靖邦	高司 道典	草場 昭司	岩下 忠佳	黒岩 龍彦	末安 大孝	真弓 常忠
(神社本庁総長)	(神社本庁長老)	(鹿児島県神社庁長)	(長崎県神社庁長)	(福岡県神社庁長)	(大分県神社庁長)	(佐賀県神社庁長)	(熊本県神社庁長)	(宮崎県神社庁長)	(沖縄県神社庁長)	(八坂神社宮司)

々

大野 俊康

(前靖國神社宮司)

々

大宮 四郎

(忽那島八幡宮宮司)

々

矢野 憲一

(元神宮欄宜)

大会 会長

高橋 弘平

(霧島神社宮司)

実行 委員長

村田 和之

(長束神社宮司)

実行 副委員長

佐古 一洌

(松尾大社宮司)

実行 委員

渡邊 知宣

(正野神社宮司)

々

芦原 巖夫

(旭川神社名譽宮司)

々

田中 正也

(矢合神社宮司)

々

徳久 豊彦

(與賀神社宮司)

々

二橋 一彦

(熱田神社権宮司)

々

藤井 昭彦

(神宮欄宜)

々

秋野 義正

(神明社宮司)

々

喜多川 忠之

(高岡神社宮司)

々

谷田 勉

(桜山八幡宮宮司)

事務局長	事務局長	々	々	々	々
------	------	---	---	---	---

中野 幸彦	大野 順弘	今井 稔	芦原 巖夫	生 嶋 經和	畠田 明彦	村田 佳子
-------	-------	------	-------	--------	-------	-------

(多賀大社宮司)	(檀森神社宮司)	(梅戸神社宮司)	(旭川神社名誉宮司)	(松尾大社権宮司)	(松尾大社権欄宜)	(長束神社権欄宜)
----------	----------	----------	------------	-----------	-----------	-----------

あとがき

「むかしあめつちいまだひらけざりし時、冊^{タビヤフタヘ}諾二柱の御神、天の浮橋の上より霧のうみを詠^{ナガ}め下だし給ふ。小島のごとくに見ゆるものあり。二柱の御神、天のとはこを以て是をさぐりみ給ふに國なりければ、即ち此のところに跡をたれ給ふ。是霧島山と名づくる由来にして、其の銚^{ササ}を逆しまに下だし給ひしが、今に至り其のままに此山の絶頂にたちて有るを、天の逆銚といふ。誠に神代の旧物にして、奇絶の品又外に是を比すべきものなし。」

—西遊記卷五、天の逆銚—抜粹

平成十四年八月二十一日より二十三日にわたり、会員の待ち望んだ天孫降臨の地、鹿児島県は霧島神宮での第十八回神道講演全国研修大会・鹿児島大会が盛会裡に終了。霧島神宮、宮司高橋弘平先生を大会々長に全国各地より四十名の参加者。平成四年、宮崎県宮崎神宮で第八回の全国大会が開催されてより十年振りの九州地区全国大会、九州各県神社庁の力強いご支援ご協力を戴き、開講式では川上親昌神社庁長、閉講式では神社本庁、工藤伊豆総長の替りに井澤正裕教化部長をはじめ川上庁長、照国神社宮司、島津修久理事の来

賓出席と花を添えて戴き一同この上ない喜び。研修終了後は絶好の機会だからと午後より、高千穂峰、一、五七四メートルの聖地を登拝、高橋宮司御自からのご案内、神宮職員、宮林省のご協力同行を得て総勢二十四名の参加、霧の立ち込める中、天壤無窮の神勅に語られる天の逆鉾拝覧、涙の出る程の感動、感激。ゆっくり休む間もなく夕刻、大神様のご神慮を得て全員無事下山。霧島温泉で疲れを癒し各地の奉務神社へ向った。

今回より神社本庁の主催、来年度より神社界の一翼を負うべく責任は重大、今迄学んだ研修をもとに期待に添えるよう各位の益々のご研鑽とご精進を祈ります。

又、末筆ながら何時も甘えております講話集出版について事務局の皆様には神明奉仕の合い間をみて一年もの期間を費し編纂のご協力を賜わりますこと紙面を借りまして厚く御礼申し上げ挨拶いたします。

平成十四年初冬

第十八回神道講演全国研修大会

鹿児島大会実行委員長

村田和之

講話集 肇国の誓ひ

— 第十八回 神道講演全国研修大会 講話集 —

発行 平成十五年六月一日

編集者 神道講演全国協議会事務局
装幀者

印刷所 呉市広白石一―二―三四
製本所 株式会社 ユニックス

発行所 神道講演全国協議会

〒六六〇〇四 京都市西京区嵐山宮町三 松尾大社社務所内

TEL (〇五) 八七一―五〇一六 FAX (〇五) 八七一―三四三四

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします

